
拳と魔法と勇者と世界

マークピース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拳と魔法と勇者と世界

【Nコード】

N1290W

【作者名】

マークピース

【あらすじ】

十年前、人間と魔物の最終決戦『人魔戦争』により、ほとんどの魔物は魔王と共に滅ぼされた。

そして、魔王討伐の中心となった魔法大国ジグライオスは、次第に諸外国の覇権をも握るようになっていった。

そんなジグライオスの東端にある辺境の村、カーロス。

その村で平和に暮らす少年、ハルトにはある秘密があった。

実質王国最強の六人である『守六光』。

その一角に最年少で加わった少女、ミーシエは今の生活に不満を抱いていた。

二人の運命が交錯する時、物語は動き出す -

プロローグ（前書き）

お目汚し頂ければ幸いです。

プロローグ

魔法大国ジグライオス。

住民の4割が魔術師を占めるこの国では、魔法について最先端の研究が進んでいる。

そんなジグライオスの東端にある小さな村、カーロス。
物語は、ここから静かに幕を上げる。

いつも通りの朝。

いつも通りの天井。

いつもと違う事、それはこんな朝早くから訪問者が訪れるというところか。

玄関の扉が叩かれる音でハルト・ヘイジは目覚めた。

ボサボサの黒髪に半開きの瞼。

今年で十六になるのだが、二つ下ほどに見える童顔。
それが彼だった。

目をこすり、大きく伸びをしながら目覚めるハルト。

だが、今日から学校は夏休み。

にも関わらずこんな朝早くから尋ねてくるような無礼な訪問者に取

り合う必要はない。

そう思い、再び布団をまとい船をこぎ始める。すると、しばらくして扉を叩く音が消えた。

帰ったか?と思つた瞬間

轟音と共に扉が木つ端微塵に吹き飛ばされた。

眠気を吹き飛ばされたハルトは急いで玄関へと向かう。

そこには、甲冑を着た二人の兵士と、その二人の物より豪華な装飾が施された甲冑を着た、ハルトと歳の違わないであろう少女だった。少女はハルトの姿を確認すると、ニコツと笑顔を見せ（しかしこめかみに青筋を刻み）

「おはようございます。貴公がハルト・ヘイジ殿でよろしいでしょうか?」

「な…な…」

「?」

「何してくれたの!? え、なにこれ、えつと、色々言いたいことはあるけど…ちゃんと弁償してくれるんだよね!？」

「……アンタが居留守なんぞ使うからでしょうが!」

「た、隊長、落ち着いてください」

取り乱した少女を小太りの兵士がなだめる。

深呼吸で息を整えた少女は、改めてハルトに向き直ると

「私は王都直属『守六光』第四席を務める、ミーシエ・マテリアです。この度は『貴族院』の命により」

「えっと、板は雨漏り用があるからいいよね？あとは金槌と釘が……」
「……………」

ミーシェと名乗った少女は、右手をハルトに向ける。
すると、ズドンという音と共に、ハルトの足元の床に、砲弾がめり込んだかのような穴が空いた。

「……………話を、聞いてもらえますか？」

表情は笑っていても、決して目が笑っていないミーシェの前に、ハルトはただ頷くしかできなかつた。

とりあえず少女と二人の兵士を家に案内し、小さなテーブルを四人で囲んで座る。
が、先ほどの轟音のせいで、ハルトの家の周りには村の住人達が何事かと集まっていた。

そして、玄関の扉はミーシエが壊してしまったので、中の様子は丸見えになっている。

気まずい空気の中、口を開いたのはハルトだった。

「えっと、とりあえず、マテリアさん、だっけ？……何か言う事は？」

「……分かったわよ、謝ればいいんでしょ！」

「違うよ！弁償してよ！」

「分かりました。この旅が終われば私が自腹でします！これでいいんでしょ！？」

「人ん家の玄関壊しといて反省の欠片も………旅？」

すると、背の高い兵士がミーシエの代わりに答えた。

「我々は、貴公を王都へと連れていくよう『貴族院』より命を受けたのです」

「『貴族院』って………確か、貴族で集まって国王の行政を手助けするっていうとこだよね？そんな人達がどうして僕を？」

「さあ？お偉いさんの考える事は我々には分かりませんよ」

「パラソス！今の発言は不敬罪に抵触するわよ？」

パラソスと呼ばれたその兵士は「以後気をつけます」とミーシエに会釈した。

ミーシエはゴホンと咳払いし、ハルトに向き直る。

「……というわけで、私達と共に王都へ来てもらえませんか？」

「普通に嫌だよ！何で、自分家の玄関を壊した相手に従わなきゃならないんだよ」

「……貴族院の命でも？」

「……確か、国王直属の命令か犯罪者でもない限り、連行は断れるんでしょう？」

ミーシエは心の中で舌を打つ。

まさかこんな田舎の者が、そんな事を知っているとは思っていないかったのだ。

だが、やりようはある。

「お引取り願うよ。生憎、今日から夏休みでね。予定があるんだ」
「そう言わず、お願いします。旅路ではもちろん、王都でも貴女の身の安全は我々が保障します」

ミーシエはハルトの手を握り、頼み込む。

端整な顔立ちをした彼女に手を握られ、思わず動揺するハルト。

「な、何と言われようと僕は行かない……ん？」

ハルトは先ほどまでミーシエが握っていた手の中に何か握らされてあることに気付く。

それは、贅沢をしななければ二、三年は生きていけるほどの価値を持つ、数枚の金貨だった。

「……………出発は、今日中？」

かくして、少年ハルト・ヘイジは王都へと旅立つことになった。

夕刻には出発するとミーシェに言われ、ハルトは旅の支度を始めた。しかし、予想以上に持っていくものが少なく、昼を迎える前に支度を終わらせてしまった。

買い物をする際、村の人達に色々と心配をされた。

中には、旅へと赴くハルトに饞別をくれる人もいた。

「鉄道を利用するから二週間ほどで帰ってくる」と説明したのだが、それでも心配してくれる、村の人達の優しさが嬉しかった。

昼食を終え、やることもなくなったので、朝やり損ねた2度寝をすることにした。

すると、ドタバタと騒がしい音がしたかと思うと

「ハルト！おい居るかハルト！」

訪ねてきたのは、ハルトと同じ学年である鍛冶屋の息子、フランクだった。

「……うるさいよ、フランク」

「ハルト！よかった！まだ居たのか」

「うん。夕方出発だったさ」

「そうか……二週間くらいで帰ってくるんだよな？だったら、夏休みはまだ半分以上も残るな！」

フランクは寂しさを紛らわすようにはにかんだ。

「……でも、外は色々と危ないんだろ？盗賊とか魔物とか……」

「魔物は『人魔戦争』の影響でほとんど絶滅したって習ったじゃないか」

「でも、生き残った魔物は凶暴で強力な奴らばっかとも聞いたぜ？」

「この近くに魔物が生息するような場所なんて、コルザ山脈ぐらいじゃないか。あそこはルートの通らないよ」

「でもよ……」

「大丈夫だって『守六光』が護衛してくれるんだよ？それに、万が一戦闘になったとしても、僕は一応格闘家の血を引いてるんだよ？鍛錬だつて欠かさなかった。フランクだって知ってるだろ」

「……ああ、そうだよな。お前が負けるわけないか！ハハハ」

フランクは茶色の頭を掻きながらポケットを探る。

「ホラ、銭別だ。とっとけ」

そう言ってフランクは、ナイフをハルトに渡す。

「お前が旅立つって聞いてよ、親父に無理言っつて鍛冶場を使わせてもらったんだ。まあ、親父や祖父ちゃんのに比べりゃあ、質は劣るけどよ」

「……ありがとう、フランク。大切に使うよ」

へへ、とフランクが鼻をこする。
すると

「居た！ハルト！」

「探したよハルト君」

ハルトを訪ねてきたのは、アンナとヨウコの姉妹だった。
アンナはハルトの二つ上で、ヨウコはアンナの妹で、ハルトと同い年だ。

扉のない玄関を通り、アンナが恐ろしい形相でハルトに詰め寄る。

「ちょっと！夏休みは私達と一緒に遊び倒す約束だったでしょ！？」

それなのに、王都に行くなんてどういっつ見よ!」

「ちよ、アンナ姐、く、苦しい…」

「お、お姉ちゃん、そのくらいにしてあげたら?ね?」

「アンタは黙ってて!今年の夏は…」

最後の方は小声でよく聞こえなかったのだが、怒り心頭だという事はしっかり伝わった。

そこへ、フランクのフォローが入る。

「まあまあ、アンナ姐ちゃん。二週間くらいで戻ってくるらしいしさ。それから遊びにいこうぜ、な?」

「……分かった。ただし!絶対無事に帰ってきてね!怪我して遊べなくなるなんて許さないから!」

そう言うと、アンナはハルトに何かを投げつけ、家を出て行った。アンナが投げつけたもの、それは彼女がいつも身につけていたお守りだった。

「……ありがとう、アンナ姐」

すると、今度はヨウコが持っていた箱を手渡す。

「私からは…ハイ、応急手当のセット。私が調合した薬もあるから」「あ、ありがとう」

「できれば使わない方がいいんだけど……どうかな？」

「いや、嬉しいよ。ヨウコの薬はよく効くからさ」

「そ、そう？……えへへ、ありがとう」

「いや、お礼を言うのは僕の方だってば」

「……殴りてえ」

フランクの呟きに頭を傾げるハルト。

すると、ヨウコはさっきとは打って変わり、暗い顔でハルトを見つめる。

「……本当はね、ハルトに行つて欲しくない……去年みたいに一緒に遊びたいんだ。でも、ハルトが決めたのなら反対はしないよ……じゃあ、行つてらっしゃい。怪我、しないでね」

「おっと、俺もそろそろ家の手伝いに戻らねえと。じゃあな、早く帰ってこいよ」

そう言うと、二人もハルトの家を後にする。

再び家が沈黙に包まれる。

もし、三人が「金貨に目がくらんだから旅に出る」と知ったらどう
いう顔をするだろう。

思わずそう考えてしまった。

だが、ハルトが旅に出る決心をしたのは、実は金に目がくらんだからではない。

どうしても確かめなければならぬ事ができたのだ。

彼はそのために王都へ向かう。

真実を、確かめるために。

空は茜色に染まり、日は沈みかけていた。

夕焼けに染まる空を見て、ミーシエは素直に綺麗だと思った。

王都では、絶対に見る事のできない、穏やかな景色。

(……何もないとこだと思ってたけど、案外そうでもないみたいね)

ジグライオスの、実質最強である六人の戦士が集まる『守六光』。

彼女は、最年少でその一角に加わった。

だが、世の中には才能を持つ者が居れば、それを妬む者も少なからず存在する。

当然、王都も例外ではない。

貴族の出身でもない彼女は、生まれがいいだけの無能な者達の、格好の標的だった。

もちろん、彼女に味方してくれる者達もいた。

しかし、まだ十五の彼女に、この環境は苦痛以外の何物でもない。
……退職してこの村に住むのもいいかもしれぬ。
そんなことを考えていると、大きな荷物を抱えた少年が歩いてきた。

「……予想以上に饑別が多くてね」

そんなハルトの言葉に思わずミーシエは噴き出した
不謹慎だと分かっているも彼女はこう思う。

(楽しい旅になればいいな)

こうして、少年ハルトはカーロスを旅立った。
果たして、王都への旅路に、彼を待つものとは。

ハルトの「始まりの夏」は、今、幕を開けた。

プロローグ（後書き）

初投稿です。

自分の文章力の低さに驚きましたが、あたたかい目で見守ってもらえるとありがたいです。

第1話 少年ハルトの旅立ち（前書き）

投稿するのが思ったより遅くなってしまいました。

第1話 少年ハルトの旅立ち

ハルト達がカーロスを出発して3時間。辺りは暗闇に包まれていた。

ミーシエの部下の炎魔法により松明を作り、なんとか光を確保しつつ進むことができた。

その炎を見て、ハルトはなんとなく抱いてた疑問を口にする。

「そつえば、マテリアさんは何の魔法使うの？ 僕の家床に穴を、僕の家床に穴を空けてくれたあの素晴らしい魔法」

「だから謝ったじゃ……コホン、私の魔法は『衝』の魔法です」

「……その歳で、飛ばせるほどの『衝』が使えるの？」

「え？ 最初から飛ばせましたけど……？」

この言葉を聞いて、ハルトは何故彼女が『守六光』に選出されたのか分かった気がした。

話題を変えるためにハルトはミーシエの部下2人に同じ質問を試みた。

最初に答えたのは小太りの兵士、ピリンクだった。

「自分は『土』の魔法を扱います。防御の方はお任せください」

ピリンクはおどけたように笑ってみせた。

続いて長身の兵士、パラソスが答える。

「私は見ての通り『火』です。まあ、大したことはできませんが」「よく言うぜ。こいつ、俺達一般兵の中では1、2を争うくらい強いんですよ」

「お、おい、話盛りすぎだろ！」

「ふふ、安心して前衛を任せられるわね」

「ちょ、隊長まで、勘弁してくださいよ」

そんな3人のやり取りを見て、ハルトは思わず笑ってしまふ。

とても王都最強の『守六光』が率いる部隊とは思えなかったからだ。

「魔法…か。僕も小さい頃は魔術師になれると信じて疑わなかったな」

そう、魔法というのは努力で使えるモノではない。

魔法とは、いわゆる才能のようなものだ。

魔術師のほとんどが先天性のもので、親が魔術師であればその子も魔術師である場合が多い。

そして、力の程度も魔術師それぞれだ。

だが、天は二物を与えないとはよく言ったもので、生まれ持つ魔法は、基本的に1人1種類である。

極稀に、2つの魔法を持ち生まれる魔術師もいる。

しかし、その魔術師はどちらの魔法も通常の魔術師の半分かそれ以下程度にしか育たない。

それがこの世界の『魔法』だった。

魔術師の人口はこの世界の約200万分の1と言われている。その点、ジグライオスの魔術師の人口は4割を超えている。この国が魔法大国と呼ばれる由縁だ。

「でも確か、ヘイジ殿は代々対魔術の格闘家の家系と聞きましたが？」

「あ、やっぱ調べてた？…まあ、一応僕も小さい頃からそういうのは叩き込まれたんだけどさ」

「対魔術師用の格闘術、ですか…一度手合わせ願いたいものですね」「いや、マテリアさんとじゃ命の危険があるから、主に僕が」

「そういえば、ヘイジ殿のご両親は？姿が見当たりませんでしたか」「3ヶ月前に隣国のザベリスに居るって手紙が来たつきりだね。元気そうだったよ」

(子供を置いて、か……辛くないのかしら?)

ミーシエはそう思ったが、ハルトの様子を見る限り苦はないようだ。

そこらしばらく歩き、ようやく町の灯りが見えた。

ストルトの町、ハルトもフランクらと共に何度か来たことがある。

ここも田舎には変わりないのだが、カローヌより店も多く、遊べる場所も多い。

だが、カローヌから少々遠すぎるため、頻繁に訪れるほどでもなかった。

「夜が早かったせいで予定よりも到着が遅れたわね。今日はここに泊まりましようか。ピリンク、宿を取ってきてくれる?」

「了解しました。では、先に行ってますね」

そう言うと、ピリンクはストルトに向かって走り出す。彼の姿はやがて町の灯りへと消えていった。

「パラソスもありがとう。また貴方の魔法に助けられたわ」

「勿体ないお言葉、ありがたく頂戴します」

「えっと、明日は1つ先の町の行商人に頼んで、馬車を仲介してもらうんだよね？」

「はい。そこから約2日ほどで鉄道の通る街、クライオに到着する予定です。そこからは鉄道で王都まで一直線です」

「へえ、案外楽に行けそうだね」

「楽観はできません。魔物に遭遇する危険もありますし、馬車での道中で盗賊に襲われる場合もありますから」

「パラソス！護衛対象を不安にさせるような発言は控えなさい」

「失礼しました」とパラソスが頭を下げる。

「どうやら、2人のこのやり取りはよくあるものらしい。」

「まあ、戦闘になったら隊長が一掃してくれますから、盗賊集団だろうと魔物の群れだろうと」

「私をアテにしてどうすんのよ」

それでも「無理」とは言わないのは『守六光』故の自信だろうか。

まあ、戦闘に関しては特に不満はない。

いざという時は自分も出ればいだけの話だ。
そんな事を考えているうちに町へ到着し、一行は宿へと直行した。

夜、既に町の住民も眠りに就いた頃。

ミーシエは目を覚ました。

再び寝ようと目を瞑るが、1度起きてしまつとどうしても目が冴えてしまう。

仕方なく起き上がり、夜風を浴びようと宿を出る。

すると、宿の前に先着の人影があった。

片手で倒立をしていた（上半身裸の）ハルトだった。

ハルトもミーシエに気付き、2人の目が合う。

先に口を開いたのは意外にもミーシエ。

「…へ」

「へ？」

「この変態！」

「ええ！？いや、僕はただ鍛錬してただけで」

「言い訳しないで！さあ、そこに直れ！」

「え、ちょ、マ、マテリアさん！？今、夜中だからそんなの撃つたら大事に……」

「キヤ、いや、近寄らないで……！」

「マテリアさん！？」

今にも『衝』を連発しそうなミーシエを何とか説得し、落ち着かせるハルト。

我に返ったミーシエは、先程の振る舞いを恥じ、顔が赤く染まっていた。

「……すいませんでした、ヘイジさん。気が動転していました」

「い、いや、いいよ……それとさ、言おうと思ってたんだけど、別にタメ口でいいんだよ？」

「いえ、公私混同は避けていますので」

「うーん……あ、こう言えばいいのか」「？」

「さっきのこと、タメ口利いてくれないと2人にはらしちゃうよ？」

「！？そ、それだけは勘弁！……してください。部下にそのような事知られたら……」

「知られたら？」

「……からかわれちゃう……」

その言葉に吹き出すハルト。

なんだ、普通の女の子じゃないか。

それはそうだ。

『守六光』と言つても元は自分達と何も変わらない人間なのだ。それが自分と歳の変わらない女の子なら尚更だ。

「じゃあさ、2人の時だけでもいいからダメ口で…ダメかな？」

「…分かりました。それが貴方の…いえ、キミの望みなら」

ミーシエとしては正直気恥ずかしかつたのだが、ハルトとは、この少年とは任務の関係だけでは終わりたくない、そう思つたのだが、仮にミーシエと同じくらいの騎士がいたとしたならば、この要求には答えないだろう。

「任務に私情を挟んではならない」

軍人として最も重要な心構えの1つだ。

しかし、ミーシエに友人と呼べる人物は極めて少なかった。

それは僅か15歳という若さで『守六光』に選出されたが故だ。彼女を妬んだ、或いは畏怖した同年代の者達は彼女から距離を取つた。

それは、それまで普通に友人と接してきた者も例外ではない。

そんなミーシエにとって、自分を『守六光』と知りながらも自分に近づいてくれたハルトの存在が、とても輝いて見えたのだ。

「そこなくちゃね」とハルトは手を伸ばす。

一瞬躊躇いながらも、ミーシエはその手をしっかりと握つた。

「よろしく、マテリアさん」

「…ミーシエでいいわよ、歳も近いんだし。アタシもハ、ハルト…」

君って呼ぶから。も、もちろん2人の時だけだけど」

「はは、分かったよ。よろしく、ミーシエ」

「ええ。よろしく、ハルト君」

まだ鍛錬を続けるというハルトを残し、「無理はしないようにね」と声をかけ、ミーシエは宿へと戻っていった。

1人となり、ハルトは再び上着を脱いだ。

「…あんな簡単に人を信じちゃって大丈夫かな？」

ハルトは思わず声を漏らす。

実はハルトがミーシエに近づいた理由は、ある事を聞き出すためだ。

彼が王都へ旅立つ直接の原因となった事。

だが、おそらく彼女は何も知らないだろう。

もし知っているのならば、部下2人で来るなど軽率な行動は出来な
いはずだ。

ならば何故彼はミーシエと親しくなろうと思ったのか。

「……まあ、可愛い女の子と仲良くなるのに理由はいらない、って
のが男の性……なんてね」

早い話、下心が含まれた試みだったのだ。

しかし、予想以上にミーシエが友好的な態度を示してきたので、正

直罪悪感で胸が一杯だった。
まあ自業自得ではあるのだが。
自責の念が激しく責め立てるが、心を無にして鍛錬に臨む。

翌朝、部屋を出たハルトはちょうどミーシェと鉢合わせたが、彼女は何事もなかったかのように

「おはようございます、ハイジさん。順調に行けば今日の昼までに
は次の目的地であるキャリオスに行けると思っていますので、それまで
どうかご辛抱を」

「え？あ、ああ、うん。別に大丈夫だよ」

「そうですか。では、私はこれで」

そう言ってミーシェは自室へ戻っていった。
出発の準備をするのだろう。

だが、ハルトがそれ以上に気になったのは

「…昨日と同じ女の子には思えないな」

どうやら公私混同しないというのは本当だったらしい。

宿で朝食を終え、ストルトを出発する一行。
進路を北西に取り、キャリオスへと向かう。

「そつえば、キャリオスってどんなところなの？」

「商業の盛んな街ですよ。問屋を介してないので、色々物が安く買えます」

「へー、楽しみだな…って、遊びに行くわけじゃないんだけどさ」

「ははは、まあ、馬車を用意するのも時間もかかりますし、その間へイジ殿は好きにしてもらって構いませんよ」

「あ、ホントに？…でも、2人が働いてるのに僕だけ遊んでるってのもなあ…」

「我々のことはお気遣いなく。雑務は一般兵の仕事ですから」

そんな他愛もない話を続けている中、ミーシエは考えた。

その考えが、軍人として間違っていることはもちろん分かっている。だが、彼女にとってこんなに任務が楽しいと思ったのは初めてなのだ。

「もっと旅が続けばいい」

ミーシエはそう思った。

しかし、彼女のその願いは最悪の形で叶うこととなる。

ストルトを出発して3時間ほどが経過した。
途中で休憩を挟みつつ、ハルト達は順調にキャリアオスへと歩を進める。

「…お、見えてきた見えてきた」

ピリンクの言う通り、民家や露店らしきものが立ち並ぶ街が見えてきた。

だが、更に街に近づいたところで

「ヘイジ殿、ここまで来ればあと10分程度で……ん？」

そこまで言いかけたところで、ピリンクは目前に見えるキャリアオスから違和感を感じた。

やがて、全員がその違和感の正体に気付き始める。口火を切ったのはパラソスだった。

「……少し、静か過ぎじゃないですか？」

そう、ピリンクの話によればこの街は商業が盛んらしい。

それなのにこの静かさは普通ではない。

ここまで近づいたというのに人っ子1人見当たらない。

ミーシエ達3人は、共通の嫌な予感を感じ取った。

まるで、戦場を前にするかのような…今のキャリアオスにはそんな雰囲気漂っていた。

一行は街の入り口までやって来たが、相変わらず人の姿は見当たらない。

「……全員でどこかに出かけてる…わけないよね」

「うーん、別の場所で祭でもやってるんじゃないか？」

「だとしたら、ここで露店が出てるのはおかしいだろ」

ミーシエは住民は居ないのかと、近くの民家を訪ねた。
すると

「（…開いてる？）」

鍵はかかってなく、ミーシエは慎重に扉を開けた。

中はいかにも普通の民家という感じだったが、やはり住民の姿は見当たらなかった。

だが、そのあまりの普通さに疑問を抱いたミーシエは家の中へと入る。

家の中には、僅かではあるがミントの香りが漂っていた。

何かないかと家の中を調べる。
すると

「！…！」

ソレを見たミーシェは直感的にソレが何を意味するかを悟った。
ミーシェは慌てて民家を飛び出すと

「パラソス、少し街の様子を見てくるからついてきて」

「隊長、自分はどうすれば？」

「ピリンクはヘイジさんの護衛をお願い。そこを動いちゃダメよ」

ミーシェはパラソスと共に近くの民家を10軒ほど回った。

彼女の予想通り、ほとんどの民家の家の鍵は開いていた。

どの民家にも人が居ないにも関わらずだ。

そして、ミーシェが最初の民家で見つけたソレも、2軒ほど発見できた。

「…パラソス、これを見て」

「これは…血痕、ですか？」

ソレは、正直血痕と呼べるかどうかも怪しい、雫が落ちたかのような血の跡だった。

「…これが何か？」

「周りにも同じような血痕がいくつもあるでしょう」

「…お言葉ですが、これくらい出血なら普通にあるのでは？」

「じゃあ、この血痕をよく見て、何か変じゃない？」

「…？」

「分からない？まるで何かで拭き取ったようじゃない」

「…それが？」

「これと同じような血痕があつた民家が合計で3軒。それも、全てこの血痕と同じように拭き取られたような跡があつたわ」

「！…まさか」

「…あくまでまだ仮説だけだね」

「…ええ、それを証明するには、聊か証拠が足りません」

「…ねえ、この部屋ミントの匂いがしない？」

「そう言われれば…僅かですが匂いますね…それが何か？」

別に、ミントの香りを家に漂わせる民家は珍しくない。
臭い消しとしてやっている事だろう。
だが

「これまでの10軒、そして私が最初に調べた1軒…：…全ての民家で、これと同じ比較的匂いが薄いミントが使われていたわ…：いくらなんでも変でしょう？この辺一帯の民家が全てミントを、それも同じものを使っているなんて」

「…：…つまり、隊長は何が仰いたいのですか？」

薄々パラソスも気付いていた。

あまりにも突拍子な話だ、信じられないのも無理はない。

ミーシエは、重々しい口を開き、その仮説を語った。

「……つまり、この街を何者が襲撃し、その痕跡を消した……そして街の人々が…生存している可能性は極めて低い……そういう事よ」

「あくまで仮説だけだね」とミーシェは付け足す。
だが、パラソスの体からは決して暑さのせいではない汗が止め処なく流れ続けた。

第1話 少年ハルトの旅立ち（後書き）

後半でようやく物語を動かす事ができました。
評価等つけてもらえれば幸いです。

第2話 監視者デイルイズの奇襲（前書き）

ようやく戦闘に入りました。

第2話 監視者デイライズの奇襲

ミーシエの衝撃的な仮説を聞いたパラソスは、呆然と立ち尽くしたが、やがて我に返ると

「……もし、その仮説が正しいとすれば、ピリンクとヘイジ殿が危ないのでは？」

「大丈夫よ。この血痕が付着したのは、早く見積もっても12時間前。仮に襲撃者がこの街を襲ったとしても、とっくに逃げてるわ。それに、もしもの事を考えて『土』で防御ができるピリンクをつかせたんじゃない」

パラソスはその言葉に奮えた。

自分の上官は、自分より3つも若いながらのに、こんな優秀で冷静な指揮が取れる。

やはり、この人について来て正解だった。

パラソスは心からそう思った。

だが、今はそんな感傷に浸っている場合ではない。

「でも、万が一に備えて徹底的に街を回るわよ……襲撃されたのなら、死体の処理も近くでしている可能性もあるしね」

「……そうでない事を願うばかりです」

2人は街を探索する。

ミーシエの仮説が外れていることを祈りながら。

ミーシエ達が街に出て10分。

ハルトは2人が中々帰ってこないので心配していた。

「……マテリアさん達、大丈夫かな」

「なあに、隊長なら大丈夫ですよ。あの人が負けるなんて考えられません」

「……でも、僕にピリンクさんをつけたって事は、少なからず危険があると判断したって事だよね？」

この言葉を聞いたピリンクは素直に驚いた。

調べた限りでは、ハルトはどこにでもいるようなごく普通の少年である。

このような状況にも免疫がないはずだ。
にも関わらずその答えを導き出す辺り、中々どうして頭が回るらしい。

「大丈夫なのかな……」

「自分達は軍人、このような状況は日常茶飯事ですよ」

ピリンクは嘘をついた。

近年、ジグライオスは近隣諸国の政権をも握っていた。

遙か北の大国ゾブリンと長年争いが続いていたが、ジグライオスが急激に力をつけた為か、向こうから仕掛けてくる事はほとんど無くなった。

つまり事実上平和となったこの国で、軍が赴くような事態はほとんどなくなったのだ。

正直、ピリンクは今まで「自分は軍人だ」と胸を張れるような仕事は1度もなかった。

だからなのか、不謹慎だと分かっているながらも、ピリンクはこの状況に少し興奮していた。

「とにかく、我々はここで待っています。念の為、周りに注意してくださいね」

「……そうだね、信じて待ちますか」

2人は辺りを見回し、警戒を強めた。
だが

「……………」

この時、既に背後から2人を監視する者の存在を、ハルト達はまだ

知らない。

ミーシエとパラソスは街の中心である広場に向かっていた。

道中にある家の中も調べたが、やはりこれまでに調べた家とほとんど変わりなかった。

血痕があったかどうかの違いはあったが。

広場に向かいながら、パラソスが口を開いた。

「……襲撃犯が魔物、という線はないでしょうか？」

「そうね…伝説魔獣程の知能があれば別だけど、この辺には生息してないでしょう？」

「それはそうですが……知能の高い魔物、例えばグリフォン等があったという可能性もあります」

「えっと、どんなのだった？」

「四足歩行の鳥のような魔物です。魔物にも関わらず『風』の魔法を扱える辺り、その知能の高さが伺えます」

「よく知ってるわね」

「学生時代は魔物学専攻だったもので」

「それで、そのグリフォンはこの辺に生息してるの？」

「ええ。ストルトの東にあるコルザ山脈、その頂上に生息していると伝えられています」

「コルザ山脈か……確かに、それならありえるかもしれないわね」

だが、これは現実的な線ではない。

パラソスもその事に気付いていた。

虐殺ならグリフォンにも可能かもしれないが、痕跡の消滅までではできないだろう。

が、それでも考えてしまう。

もし、この街全ての住民を虐殺したのならば、犯人は単独という事はないだろう。

しかし、あまりに大人数で行けば、近隣の町や村に見られてしまうだろう。

以上の条件を踏まえて、ミーシエが予測した犯人の数は1〜3人。

この街全ての住民を、たったそれだけの人数で虐殺できる者達が、果たして本当に人間なのか、と。

または、これだけの人を虐殺できる者を、自分達と同じ人間だと認めたくなかっただけかもしれない。

ミーシエもそれを察したからこそ、パラソスの「犯人は魔物説」を否定しなかった。

2人は心中に流れてくる嫌なイメージを必死に押し殺していた。

ハルトとピリンクは、相変わらず暇そうに街の入り口で立っていた。そんな2人を遠目で見ていた者は呟く。

「……………チツ、これ以上は待てんぞ」

瞬間、ハルトとピリンクは同じものを同時に感じ取る。

それはハルトにとって初めての、ピリンクにとっては数度目の……殺気……と呼ばれるものだった。

「……………ヘイジさん」

「……………うん」

「……………！、来ます…！！」

「分かってるよ！」

直後、監視者は見に『何か』を纏わせると、目で追えるのがやっとのスピードでこちらに向かってきた。

ピリンクは瞬時に『土』を発動させ防壁を作り出し、ハルトは腰のガントレット籠手を取り外し手にはめる。

監視者は猛スピードのまま土の壁に突っ込んだ。

直後、辺りに轟音が鳴り響く。

「…ッ！なんて衝撃だ…！」

監視者はそのまま土の壁に連撃を加える。

壁で監視者の様子は見えないが、おそらく魔法か何かしらの武器で攻撃しているのだろう。

そして、ついに壁が壊れ監視者の攻撃がピリンクを捉える。

「（殺られる！）」

ピリンクは瞬時にそう悟った。

だが、キイイインという甲高い音が響き渡り、監視者の攻撃はハルトの籠手ガントレットによって止められていた。

そして、初めて監視者の姿がハルト達に晒される。

全身を黒のコートで纏い、かろうじて覗かせるその目は恐ろしく冷え切っていた。

だが、ハルトの目が魅かれたのは服装でも顔ではなく、攻撃を仕掛けてきたその右腕である。

監視者の腕は、人間のものとは思えないほどドス黒く染まっており、その長身痩躯からは想像できないほど太かった。

「……人間のものに見えないっていうより……」

「……人間の腕じゃないよね、コレ？」

ハルトの言葉を見殺し、監視者は右足でハルトの脇腹を狙う。が、それはピリンクが瞬時に発生させた土の壁によって阻まれる。

「チツ」

監視者は舌を打つと、後ろに下がり、ハルトとの距離を取った。見れば、右腕は普通の人間のものになっていた。

「……ピリンクさん、あの右腕、何だか分かる？」

「……『変』の魔法ならば体の一部を何かに変えることは可能です。……が、あの魔法は一番効力が低い魔法でも詠唱が必要のほうです。それに、生物に変化させる事は不可能なんです。」

「あの腕はどう考えても生きてるよね」

「ええ、自分にもそう見えます。とにかく、さっきの轟音で直に隊長達も駆けつけるはずですよ。それまで持ち堪えましょう」

2人がそうこう話しているうちに、監視者は奇襲の時に見せた、『何か』を体に纏わせる。

おそらく、再び突進してくる気なのだろう。

時間を稼ぐ為、ハルトは監視者との会話を試みる。

「ねえ！君は誰？どうして僕達を襲ったんだい？」

「……敵に教える事など何も無い」

「やはりダメか」とハルトとピリンクは身構える。

「と、言いたい所だが」

「え？」

「貴様等の目的は時間稼ぎだろうか？ならば、その質問に答えてやる。まともに戦えば、こちらもただでは済みそうにないからな」

「……話が分かる人で助かったよ」

「ふん、勘違いするな。お互いの利益が見合ったただけだ……あと」
「あと？」

「我々は貴様の言う所の人ではない」

「……どういう意味だい？」

「そこまでは言えん、こちらにも事情があるんでな。最初の質問は俺は誰か、だったか？俺の名はディライズ・ゼグラードだ」

「そう。僕はハルト・ヘイジ、よろしくね」

「……聞いた覚えはないんだが……まあいい。あと、何故貴様等を襲ったか、だったか？簡単な事だ。戦力を分断していた方が楽に殺れるからさ……質問は以上か？」

「僕達を殺す必要があるのかい？」

「……あー、守秘義務なんだが……まあ、これくらい構わないだろ。

俺達はある依頼を受けてな。あと1時間後まで、この街に入った人間を消せってな」

「……なるほどね、依頼人は軍のお偉いさん辺りかな？」

「言っはすないだろうが」

「だよな……まあ、必要な事は粗方聞けたし別にいいかな、で」
「？」

「お仲間さんはどこに居るの？」

「……何故そう思う？」

「いや、君が『我々』なんて言った時点で読者の大半は気付いてたと思うよ？」

「ヘイジ殿？」

「あー、コホン。で、君が時間稼ぎをする理由がないじゃないか。不利になるだけだし。あと決め手は、戦力の分断なんて言っちゃった事かな。分断したところを討つて事は、最低でももう1人仲間がいるって意味でしょ？」

「……フン、ただのガキかと舐めていたのが仇となつたか」

「君も、そんな歳は変わらなく見えるけどね」

「減らない口だな」

「それが取り柄だからね」

兩名共不敵に笑う。

ピリンクは目の光景をただ見ているしかなかった。

一触即発の空気が漂い、1つの失言もできない舌戦。

おそらく敵はプロの請負人だ。

そんな相手を前に、ハルトは互角に渡り合っている。

その姿を見て、ピリンクは純粹に彼を敬った。

重い空気の中、デイライズと名乗った男は話し始める。

「で、俺の仲間についてだよな？ いいだろう、その物怖じしない姿を称えて答えてやる」

「仲間のことバラすなんて随分と軽い口だね」

「抜かせ。俺の仲間はおと1人。今はおそらく……」

「？」

「貴様等の仲間を手荒く歓迎してるところだろうな」

「なっ!?!」

その言葉を聞いたピリンクは、広場に向かおうとするが、ディライズが立ち塞がる。

「行かせる訳ないだろ」

「……ピリンクさん、僕がアイツと近接に持ち込むから援護頼める?」

「……護衛対象に前衛を任せるようでは軍人失格ですね」

「はは、僕は心配いらないよ。ピリンクさんが守ってくれるからね」

「……そうですね、分かりました。遠慮なく突っ込んでもらって構いません」

「助かるよ……じゃ、行くよ!」

「やれやれ、騒がしいな」

その言葉をきっかけに、両者共走り出す。

戦闘が再開された。

ミーシエとパラソスは広場にやって来ていた。
だが、2人は広場の光景を見て絶句していた。

「……………これは」

「……………あんまりじゃない」

それは、20〜30の死体が無造作に転がっている地獄絵図だった。

だが、その死体の山からは血生臭い香りはしなかった。

よく見れば、どの死体からも血らしい血は流れていなかった。

が、それが死体だと分かったのは首が切断されていたり、心臓を貫かれていたりしたからである。

血が流れていないのは切断面が焼かれているからであろう。

そして、その死体の山で唯一立っている少女が1人。

年齢はミーシエと同じか1つ下と言ったところか。

少女は死体を運んでいたようだが、ミーシエ達に気付き、そちらに視線を向けると、満面の笑みを浮かべ

「アンタら、『侵入者』だよね！」

侵入者、それが一体なんの意味を指すのか、ミーシエには分からない。

だが、少女はまるで祭りのようにはしゃぎ

「退屈してたんだ！遊んでよね！」

そう言うと、少女は腰の剣を抜き横に一振り。

すると、剣の軌道がカマイタチとなり、ミーシエ達に向かって飛んでいく。

「パラソス、後衛を頼むわ！」

「了解！」

パラソスは強力な魔法を行使する為、詠唱を始める。
ミーシエは『衝』でカマイタチを吹き飛ばした。

「おっ！やるね〜、じゃ、これはどうかな！」

少女は少し溜め、カ一杯剣を振る。

すると、今度はいくつものカマイタチが飛んでいく。

「……確かに、これ全てを相殺させるのは骨が折れそうね……でも」

ミーシエはいくつか『衝』を飛ばし隙間を作ると、その合間を縫って進んでいく。

「これならどうよ!」

「……いいね!」

少女はミーシエとの間合いを詰め、刀を振り下ろす。
ミーシエも腰の剣を抜き、それを受け止める。

「……ん?それ模造刀だよねん?そんなん使ってたら死んじゃうよ?」

「それはどうかしら?」

その時、詠唱を終えたパラソスの追尾炎弾が少女を襲った。
少女は慌てて後ろに下がったが、ガラ空きになった少女の腹をミーシエの模造刀が捉える。

が、ミーシエの攻撃は空を切っていた。
何故なら

少女の背から翼が生え、飛んでいたからだ。

「……ねえ、私の見る限り、あの子の魔法は『風』だと思っただけ
ど…あんなことできるの?」

「……いえ、見た事も聞いた事ありません。ですが」

「何？」

「あの翼、文献で見たグリフォンの翼によく似ています」

「あ、お兄さん分かる人だね、大正解だよん。あ！そういえば、自己紹介がまだだったね。アタシは、ティナ・フェイトス！お姉ちゃんは？」

「……ミーシエ・マテリア」

「よろしく！ミーシエお姉ちゃん！」

すっかりティナのペースに巻き込まれたミーシエ。

「……貴女は何者？その翼はなんなの？」

「んー…秘密って言われてるんだけど……お姉ちゃんならいいよね！強いし！」

「あ、ありがとう」

「どう致しまして！アタシ達はね、簡単に言っちゃえば半分人間で半分魔物なんだ！」

「…どういう、事？」

「実験で魔物と合成された人型のキメラ、『魔人』なんだ」

「！…！」

ティナの衝撃的な告白に思わず息を呑むミーシエとパラソス。信じたくはない。

だが、ティナの体を見れば信じざるを得なかった。

重苦しい空気の中、ティナの明るい声だけが木霊していた。

第2話 監視者デイレイズの奇襲（後書き）

ということ、ようやく初戦闘に入りました。
新キャラも2人ほど登場させました。

というかサブタイトルで結構バレバレな気がします。W
今回登場した大国ジグライオスを脅かす脅威、『魔人』。
彼らの正体は、次話で明らかにする予定です。

評価・感想・指摘等よろしく願います。

第3話 守六光ミィシェの実力（前書き）

戦闘の激化とその終了まで進めてみました。

第3話 守六光ミーシェの実力

ミーシェとパラソスは押し黙っていた。

その様子を見たティナは、意地悪そうな笑みを浮かべ

「ヒヤハ！なに？お姉ちゃん達いきなり黙っちゃって。『魔人』がそんなに珍しい？」

「……少なくとも、貴女のような体をしている人間は見た事ないわね」

「ふ〜ん、まあ、アタシ達みたいに実験に成功した検体はほんのちよつとだったからね……いや、ヤツらに言わせれば……失敗……なのかな？」

「ヤツらって？」

「ベリオスの研究者共だよ。2年前、世間には公表されていない最悪の実験事故『キメラの悪夢』アタシ達はそれで『魔人』になったんだ」

ベリオスというのは、王都の西にある技術都市のことだろう。

そこで2年前に起きたという『キメラの悪夢』……聞いた事もない。

「ヤツらはさ、魔物や動物同士でのキメラ合成じゃ飽き足らず、アタシみたいな魔力を多く持っていたり、魔法の素養が高い人達を片っ端から攫いやがったんだ……より強力で知能の高いキメラを作る為にね」

「……そんな非人道的な事が、何故世間に公表されなかったの？」

「ハハ、そんなの簡単だよ」

ティナは可笑しそうに笑う。
だが、その目は決して笑っていないかった。

「イカれた王都公認の実験だったからだよ、正確に言えば『貴族院』の独断だけどね」

「なっ!?!」

「『貴族院』がそんな事……デタラメを言うな!」

「……あ、よく見ればその服……お姉ちゃん達、王都の兵士だったんだね。残念だけど全部ホントだよん。アタシの体を見れば分かるでしょ?」

「……っ!」

パラソスも本能では分かっていた。

だが信じたくなかったのだ。

この国の政治を担う存在である『貴族院』がそんな事を認めたといい事実を。

もしそれが本当ならば

この国は既に病んでいる、それも2年も前から。

もしかすると、同じような事がもっと前からあったのかもしれない。

「それで、こんな姿になっちゃったアタシ達は日々色んな実験をさせられてね。魔物と戦わせられたり、よく分からない薬打たれたり

ね。それで死んじやう『魔人』も少なくなかったよ」

「……貴女はそこからどうやって出てたの？」

「ある『魔人』が皆を説得して、脱出する事にしたの。だけど、裏切り者が1人いてさ。そいつの密告のおかげで、沢山死んだよ。『魔人』も、研究者も。結局、生き残った魔人は両手で数えるほどしか残らなかった」

2人は思わず息を呑む。

自分達が知らない所でそんな事が起きていたなんて。

「……この街の人達を殺したのは貴女？」

「いんや、私達は依頼を受けただけだよ。死体と痕跡の処理、あと、2時までここにまで来る奴らを消せってね」

「……依頼を受けた後、ここに来たのは私達だけ？」

「うん。ここに通ってる行商人とかは、ほとんど昨日に殺されちゃったからね」

「そう……じゃ、この後はどうするの？」

「決まってるじゃん！早いとこコレ片付けないといけないから、お姉ちゃん達を倒さないかね」

「……どうしても、戦わなきゃならないわけね。分かった、相手してあげる」

「そこなくなっちゃ！」

「ただし」

「？」

「貴女は強い……だから、手は抜けないわよ？」

そう言うと、ミーシエは左手を突き出し『衝』を放つ。翼が生え、機動力の上があったティナは上空へ飛翔しそれをかわした。いや、かわしたつもりだった。瞬間、ティナの足に衝撃が走る。確認すると、『衝』が掠めていたらしく両足の靴がボロボロになっていた。

一瞬で放った『衝』にも関わらず恐るべき範囲である。

「……………えつと、お姉ちゃんって何者？」

「『守六光』第四席」

「……………あちゃ〜、これは失敗だね。大失敗だよ。完全にお姉ちゃんの実力を見誤ったね……………どうしょ、色々喋っちゃったな…：ディライズに怒られちゃう」

「どうする？ 投降するなら今のうちよ」

「まさか！」

そう言うと、ティナは突然の詠唱を始める。

同時に、ティナの剣が光り出す。

あまりにも唐突だったので、ミーシエは一瞬対応が遅れた。

ミーシエは急いで『衝』を放とうとする。

が、それよりも早く詠唱を終え、ティナは剣を振った。

「『まかせ魔風太刀』！！」

爆風と共に巨大なカマイタチがミーシエを襲う。

ミーシエは溜息をつくと、両手を前に突き出し巨大な『衝』を放つ

た。
その一撃はカマイタチを吹き飛ばし、更にティナの体を吹き飛ばした。

「カハツ…！」

ティナはそのまま後方の民家に激突する。

何とか立ち上がるが、やはり相応のダメージを負ったのか、立つのがやっとのようだった。

「……王都の魔術師とは何度か戦り合ったけど、やつぱ『守六光』は桁違いだね。痛っ！今のアタシの最強の技を、詠唱も無しに吹き飛ばしちゃうなんて」

「…これ以上抵抗しない方がいいわよ？無駄な怪我を負うだけだから」

「ハハ、言うね……まあ、その通りだからさ……逃げるが勝ちってことで！」

ティナはそう叫ぶと翼を展開し、風を起こしつつ一気に飛翔する。ミーシエは風で怯み追撃が遅れるが、パラソスは即時に詠唱を始め追尾炎弾を放っていた。

だが、ティナが魔法と羽ばたきを組み合わせた事で発生させた強風により、炎弾を消されてしまう。

「ハハツ！そっちの兄ちゃんには負けないよん」

「くっ！」

ティナはそのまま街の入り口へと飛んでいく。

「ッ！入り口にはヘイジさん達が……！」

「隊長！我々も急ぎましょう！」

2人は入り口へ向かって走る。

パラソスは、先程のティナについての疑問を口にする。

「……あの少女の言う事は本当なのでしょうか？」

「さあね。まあ、あの体を見る限り、一概に嘘とは言いきれないわ

……それに、もし彼女の言葉通りなら、彼女と同じ体質の人間が他にも何人かいるって事になるわね」

「……この先、敵に回るとしたら厄介ですね」

「いえ、多分すぐに戦う事になるわね」

「えっ」

「何故、彼女は入り口に向かったと思う？」

「それはヘイジ殿達を襲う為……あっ」

「気が付いた？彼女はずつとここで死体の処理をしていたはずよ。それなのに、入り口にヘイジさんが居るなんて分かるはずないじゃない」

「……という事は」

「仲間が居るかもしれないって事よ。それに、既にヘイジさん達と戦闘に入っている可能性があるわ」

「……アレと同等の力を持っているとしたら、ピリンクだけで防げるか分かりませんね」

「ええ……でも、ヘイジさんも一応戦闘はこなせるはずよ」

「……あのような化け物を相手にできるほど、ですか？」

ミーシエは押し黙る。

昨夜、ハルトの鍛錬を見たミーシエだったが、それでも不安は拭い切れない。

ミーシエは速度を上げて入り口に向かう。

ハルト&ピリンクとデイライズの戦闘は意外な展開を見せていた。ハルトがデイライズの攻撃をほとんど受ける事なく、一方的に攻めたてたのだ。

デイライズは腹部を押さえ、息を切らしながらこう思う。

「（……）……どういう事だ。確かに、あのデブの『土』も助力とはなっているだろう……だが、それを差し引いてもこの状況はおかしい。

何故こちらの攻撃が当たらない？」

「『どうして攻撃が当たらないのか』そんな顔してるね？』」

「……………」

「簡単な話だよ。君が僕を舐めてるからさ、丸腰だからってね」

確かに、心のどこかでデイライズはそう思っていたのかもしれない。どんだん銃の改良も進むこのご時世に、格闘家などは時代遅れだ。だが、デイライズは仕事に手を抜くような男ではない。

多少油断はしていたかもしれないが、本気でハルトを殺すつもりで戦った。

「（それでも仕留め切れなくなると……いよいよアレを使うしかないか）」

突然、デイライズは戦闘の構えを解いた。

そのまま静かに目を瞑る。

ハルトはチャンスだと分かっていたが、デイライズの異様な空気に攻めあぐねた。

が、直後にそれは間違いだったと悟る事になる。

デイライズが目を開いたその瞬間、ゾクツとハルトの身体を何かが突き抜けた。

本能が叫ぶ「早く攻撃しろ」と。

ハルトはデイライズとの間合いを一気に詰め、右の拳で殴りかかる。

その時、両者の間に上空から強い風が叩きつけた。

ハルトは攻撃を強制的に中断され、デイライズからもさっきの異様

な空気は消えていた。
その場にいた3人は上空を見上げる。
そこには、翼を生やした少女が浮かんでいた。

「なっ!?!」

「はいはい、そこまで、次回に持ち越してね」

「……ティナか」

「ねえ、アレはまだ使っちゃいけないってボスにも言われたでしょ? 止めたアタシに感謝してよね」

「フン……処理は終わったのか?」

「いんや、それがまだ30人ほど残ってるんだけど、『守六光』が割り込んできちゃって……」

「やはり、お前が相手するには無理があったか」

「……知ってたの?」

「当たり前だ。王都の要人だぞ? 敵の顔くらい覚えてろ」

「ムキヤー! だったら助けに来てよ!」

「そのつもりだったんだがな。残念ながらこちらの敵も只者じゃなくてな」

「えっ、ディライズを負かしたの!?!」

「……負けてはいない」

あまりに突然の出来事だったので、ハルト達は呆然とするしかなかった。

すると、その場にミーシエ達が駆けつける。

「ヘイジさん! ピリンク!」

2人の無事な姿を確認し、思わず安堵するミーシェ。
だが

「アチャク、追いついて来ちゃったよ」

「どうする？コイツらをどうにかしない限り、依頼は果たせそうにないぞ」

「ハハ、大丈夫だよ。お姉ちゃんの事だから、多分こつすればね！」

一瞬だった。

ティナは剣を抜き、そのまま振り抜く。

剣の軌跡をなぞったカマイタチが飛ぶ。

そして

「ガッ……!!」

その一撃はピリンクの体を切り裂いた。

直後、鮮血が飛ぶ。

「ピリンクさん！」

「ピリンク！」

「大丈夫、死にはしないよん。すぐに設備の整った所で治療すれば、
だけどね」

「……お前もエグい事をするな、わざと生かすとは」

もし、ここでティナがピリンクを殺せば、怒りに満ちたミーシエ達にやられてしまうのがオチだろう。

だが、あえて死ぬかどうかの傷を与える事で、ミーシエ達をこの街から追い出す事ができるのだ、怒りを買うのは同じだが。

しかし、ティナの狙いは1つだけ外れた。

真っ先にピリンクの元に駆けつけるものと思っていたミーシエが、その場を動かなかったのだ。

ミーシエは下を向いたままブツブツと何かを呟いている。

ティナとディライズは、ようやくそれが詠唱であると気付いた。

「チッ」

ディライズは詠唱をやめさせる為、ミーシエに攻撃を仕掛けようとする。

が、それはティナによって止められる。

「ダメ！早く逃げなきゃ！」

「……分かった」

ティナは羽ばたき、広場へと向かう。

ディライズはそれに続きジャンプし、そのまま空中を進んで行く。

彼の魔法は『重』、その名の通り重力を操作する魔法である。

結構魔力を消費するのだが、空中を浮遊する事も可能だ。

「クソツ！『守六光』の詠唱魔法なぞ食らえば一撃だぞ！」
「分かってるよ！だから急いで！」

2人とも最速のスピードで空を進むが、ミーシエの詠唱は予想以上に早かった。

右手をティナに照準を合わせ、左手で右手をしっかりと固定する。

一瞬、ティナはミーシエの方を振り返る。

その目は怒りに満ちていた。

部下を傷つけた敵への怒りと、それを止められなかった自分への怒り。

ミーシエは静かに、そして荒々しく魔法の名を叫んだ。

「『巨人の咆哮』……！！」

瞬間、大気が震える。

ミーシエの放った一撃は空を、地上を大きく揺るがした。

そして、その一撃は確実にティナを捉える。

が、その時

「…………チツ！」

ティナの前にディライズが立ち塞がる。

実際、空中にいたので立つ事はできないが、ディライズのその姿は『立ち塞がる』以外の表現

できない。

「ディライズ退がって！死んじゃうよ！」

「五月蠅い！黙ってる！」

ディライズは体に『重』を纏い、更に腕を魔物のものと変化させ、『巨人の咆哮』を受け止める。

当然、ディライズの体には信じられないほど衝撃が走る。

が、それでも彼は退かなかった。

やがて、止められないと悟ると片手でティナを突き飛ばす。

「キヤツ！何を…！」

「邪魔だ、どいてろ」

そして、魔法を受け止められなくなったディライズは、それを身に被る。

「ガッ…！アアアアアアアアアア！！」

ディライズはこの世のものとは思えない痛みに絶叫する。

ティナはそれを見ているしかなかった。

やがて、魔法の効果がなくなると、とっくに魔法の効果が切れてい

たディライズは落下を始める。

すかさずティナはディライズを空中で受け止め、広場に向かう。

ティナは今にも泣きそうな顔をしていた。

それを見たミーシェは、罪悪感に駆られる。

「何よ……悪いのはそっちじゃない」

彼女が消え入りそうな声でそう呟いた事は誰も知らない。
その背後からハルトが声をかける。

「……ピリンクさん、血は止まったけどまだ危険な状態は抜け出してないんだって」

「……分かりました。それでは、ストルトに戻りましょう。少しでも進みたいところですが、広場を通ればまた奴らと鉢合わせしてしまう可能性があるので……おそらく旅は長くなってしまふと思われ
ます。本当に申し訳ありません」

「しょうがないよ、緊急事態だもん……ねえ、大丈夫？マテリアさん」

「……大丈夫？何がですか？私は軍人ですよ。気遣いは無用です」

「……そうだね、ゴメン。じゃあ、行こうか」

言っですぐミーシェは後悔する。

何も悪くないハルトに八つ当たりしてしまった。

自己嫌悪に陥りそうになるミーシェだったが、ぐっと堪え、皆を連

れストルトへと向かった。

第3話 守六光ミーシェの実力（後書き）

ということ、『魔人』の存在と『守六光』であるミーシェの力を軸にしてみました。

ちよつと敵（主にデイライズさん）をかつこよくし過ぎた気もしますがw

あと、自分の技のネーミングセンスに改めてorz

『魔人』についてはまた書く事になると思います。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

次回は短めの番外編を上げてみようと思います。

戦闘後のティナとデイライズの様子を書くつもりです。

評価・感想・指摘等もらえれば幸いです。

番外編 処理者ティナの罪悪感（前書き）

今回は少し短めの番外編です。

1日に2つ投稿したのは初めてですね。

番外編 処理者ティナの罪悪感

デイライズがミーシェの魔法を受けた数分後。

ティナはデイライズを連れ広場に降り立った。

そして、そのまま介抱を始める。

「カハツ……何を、している？」

「喋らないで！傷に障るから！」

「あいつらの、始末は、仕方ないとしても、あと20分で、死体の処理を、しなければ、コホツ、ならないんだ」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！？えっと、包帯はこれで……」

「いいから、しろ！」

デイライズは傷だらけの体で叫ぶ。

「俺は、お前の方が、処理が早いと踏んで、庇ったんだ。それを、無駄にするのか？」

「それは……」

「とにかく、早く終わらせて、俺を、近くの町まで運んでくれ。介抱は、そこで頼む」

「でも」

「俺なら、大丈夫だ。あの『守六光』、ミーシェ、と言ったか？あいつの甘さに、助けられた」

「？」

「考えて、みる。『守六光』の、詠唱魔法を受けて、死体が残る事さえ、おかしいんだ。それが、この程度の傷で済んだのは、やはり、殺しに、徹し切れて、なかったんだろ……フン、この国の平和さに、感謝、しなければな」

「デイライズ……ごめん」

「……そうだ、お前は俺に、謝罪、しなければならぬ」

「……」

「だがそれは、俺が、怪我を負った事に対してでは、ない」

「え？」

「お前の、行動が、俺達の仕事に、支障をきたした、事に、対してだ」

「……どういう意味？」

「……お前が、あのデブに攻撃し、『守六光』の、怒りを買ったのは、確かに、お前の責任だ」

「……うん」

「だが、俺がお前を、庇ったのは、俺の独断であり、俺の、責任だ。お前が、負い目を、感じる事では、ない」

「……違うよ。全部アタシが悪いんだ」

「ああ。お前が、悪い」

分かってた事ではあったのだが、ストレートに言われるとさすがに傷つく。

だが、デイライズの言葉はまだ終わっていないかった。

「だから、覚えておけ」

「え」

「俺が、怪我をしたのは、お前が原因だ。だが、お前の、責任じゃない。俺の責任だ。俺の責任を、勝手に、奪うな。罪悪感を抱いているの、ならば、筋違いだ。とつとつ、返せ」

「……………どうして、ディライズはそんな風に割り切れるの？よく分かんないよ」

「フツ、だろうな。今は、それでいい……………長く、なつたな。さあ、とつとつと働け」

「……………分かった、それがディライズの望みなら」

ティナはディライズに背を向け、黙々と死体を運ぶ。

正直に言つと、自分の顔をディライズに見せたくなかったのだ。

頬が火照り、真っ赤に染まった自分の顔を。

何故こうなつたかは分からない。

だが、自分の事を身を挺して守つてくれたディライズ。

厳しい言葉の中にも僅かな優しさを含み、自分がやるべき事を諭してくれたディライズ。

罪悪感に苛まれている自分を、そっけない言い方で慰めてくれたディライズ。

気がつけば、ティナはディライズの事ばかりを考えていた。

この感情を何と言うのか、彼女はまだ知らない。

それでも、この気持ちを大切にしたい、ティナはそう思った。

番外編 処理者テイナの罪悪感（後書き）

ということ、今回は敵サイドのお話です。

自分の中でデイライズさんがどんどんカッコイイ人になっていくので困りますww

テーマとしては、自分の判断ミスでデイライズに怪我を負わせてしまったテイナの後悔と立ち直りでしょうか。

まあ、あれを立ち直りというのか人それぞれだと思いますがw

一応番外編としましたが、時間軸的には3・5話というところですね。

次回からは本編に戻ります。

ピリンクの安否は、そして一行の取る選択を軸にしようと思っ
てます。

評価・感想・指摘等もらえるとありがたいです。

第4話 少女ミーシェの心中(前書き)

今回はちょっとだけ恋愛要素(?)が高めです。

第4話 少女ミーシェの心中

『魔人』と名乗る者達の襲撃を受けたその夜。

一行は、宿でピリンクの安否の報告を待っていた。

ピリンクは今、宿の医務室で町医者の手術を受けている。

幸い、ハルトがカーロスでヨウコから受け取った救急キットがあった為、止血等の応急手当は出来た。

医者にも、止血されてなければとつくに事切れていたと言われた。

だが、それでもピリンクはまだ生死の境を彷徨っている。

3人の中に重い空気が漂う。

ピリンクの手術が始まって2時間。

誰も口を開く事はなかった。

ボタンと扉の開く音がし、中から町医者が出てくる。

一同は立ち上がり、医者言葉を待った。

「ピリンク！」

最初に部屋へ入ってきたのは、意外にもパラソスだった。ハルトとしては、パラソスに冷静なイメージを抱いていたのだが、結構感情的なところもあるようだ。

ピリンクは胸に包帯を巻かれ、ベッドで横たわっていた。そしてピリンクは……

「おいピリンク！大丈夫なのかピリンク！」

「……zzzzz」

麻酔も手伝ってか、ぐっすりと眠っていた。

パラソスはその場に崩れる。

「はあ………つたく、心配させやがって」

「きよ、教官、もう無理であります……zzzzz」

なにやら奇妙な寝言を呟いていたが「多分、昔の夢を見ているんだと思います」とパラソスが解説を入れてくれる。

町医者によると「出血は多かったです、傷自体は浅かったのが幸いでしたね。数日程で回復しますよ」との事らしい。

ピリンクの回復をその場にいる誰もが喜んだ。

もちろん、ミーシエもそのうちの1人である。

だが、彼女の顔は優れない。

「……先生、もう彼は大丈夫なんですよね？」
「ええ。手術も無事成功しましたし、容態が悪化する事もおそらくないでしょう」
「そうですね……パラソス、ちょっと休んでくるわ、ピリンクを頼める？」
「もちろんです。ゆっくりとお休みください」
「ありがとう」

そう言うと、ミーシエは部屋を出る。
その言動にハルトは疑問を感じた。
まだ旅に出て2日だが、ミーシエは自分よりも部下の身を案じるような性分のはずだ。
そんな彼女が、危険な状態を脱したとはいえ、瀕死のピリンクを置いて休むなど想像できなかった。
ハルトがそんな事を考えていると、パラソスが声をかけてきた

「……ヘイジ殿、少し頼んでいいですか？」
「え？」
「隊長の様子を見に行つて欲しいのです」

正直驚いた。
今まさにハルトもそうしようと思っていたからだ。

「……やっぱり、あれはちょっと変だよね」
「ええ……おそらく、隊長はピリンクがこうなったのは自分のせいだと考えているんだと思います……こいつも、そんな事はちっとも考

えてないだろうに……」

「なるほどね……でも、僕なんか行っているの？まだ会って2日だよ？」

「本当に信用出来る者というのは、付き合った長さで決めるものではないと考えていますので」

「……分かった、信用に答えられるよう善処するよ」

そう言うと、ハルトも部屋を出て行く。

町医者も診察の準備があると言って出て行った。

沈黙が支配する中、パラソスはまだ眠る相棒に声をかける。

「……なあピリンク。俺達は、やっと隊長を任せられる人を見つけたのかもな」

「……はあ」

夜中という事もあってか、誰もいない暗い町中でミーシエは溜息をつく。

あんなに感情的になるのは久しぶりだった。

『巨人の砲吼』^{ほうこう}を使ったのもまた久しぶりだった。

「……許せない」

その眩きはピリンクに傷を与えたティナに対するものではない。もちろん、ティナの事を許せないのは確かだ。

だが、ミーシエはそれ以上に自分が許せなかった。

広場でティナとの決着を着けられなかった事。

それが原因でピリンクが傷を受けてしまった事。

その現場に間に合わなかった事。

あの時、自分のやった全ての行動が許せなかった。再び自己嫌悪に陥りかけたその時

「見つけた！」

突然声をかけられ、驚きながら振り向く。

視線の先にいたのはハルトだった。

「探したよ。宿にもいないんだからさ」

その言葉が、ミーシエにとってはたまらなく嬉しかった。キヤリオスを出発する時、彼女はハルトに対して冷たい態度で接してしまった。

それが八つ当たりであると分かっているのに。

様々な感情で入り乱れていたあの時、ミーシエには人の事を考えている余裕が無かったのだ。

にも関わらず、ハルトはこうして声をかけてくれた。

それだけでミーシエの心は満たされる。

「……どうかしたの？ 僕でよければ相談に乗るけど？」

不思議だ。

まだ出会って2日だというのにここまで心を許してしまうなんて。

「……ピリンクがあんなになっちゃったのは、私のせいだよね」

(パラソスさんの予想通りだ)とハルトは素直に関心する。

「……違うよ。ミーシエは何も悪くない。それに、ピリンクさんはちゃんと助かったじゃない」

「そんなのは結果論、私のせいでピリンクが傷を受けたのは事実よ」

(思ったより頑固だな)と、ハルトは頭を掻く。

よし、とハルトは自分の考えを率直に伝える事にした。

「迷惑をかけない人間なんて、いないんじゃないかな？」

「……え？」

「確かに、ミーシエは頼りがいのある、立派な『守六光』であり、隊長なんだと思うよ。でも、君はまだ15なんだよ？むしろ、ここまで立派なおかしいんだ」

「……キミに」

「？」

「キミに何が分かるっていうのよ！」

ミーシエは激昂したかと思うと、『衝』を発動させハルトの足元を打ち抜く。

あまりにも突然だった為、ハルトはほとんど反応出来なかった。

「何が立派よ！！私が！私が！ただの覚悟で『守六光』になったか、どれだけ肩の狭い思いをして王都で暮らしてきたか……キミに想像できる！？」

「……うん、分からないよ」

「……でしょうね。誰も私を最年少の『守六光』としか見てくれない。……ミーシエ……として見てくれない！……私はいつも独り」

しばらく、沈黙が周りを支配する。

やがて、ハルトはゆっくりとその口を開く。

「だろうね。『守六光』っていうのはそれだけ責任の重い役職だと思うよ」

ミーシエは再び頭に血が昇り、怒鳴ろうとする。
が、それよりも早くハルトが言葉を紡いだ。

「でも、……誰も……って事はないだろう」

「……え？」

「ピリンクさんとパラソスさんが……あの2人が君をそんな目で見てると思うかい？」

「……それは」

「それだけじゃない。多分、君を……ミーシエ……として見てくれる人間は他にもたくさんいる。だからさ」

ハルトは、少し恥ずかしそうに顔を赤らめながらもはっきりと声を放つ。

「……いつも独り……だなんて、寂しい事言わないでよ……僕もいるんだしさ」

「……」

「頼りないかもしれないけど、頼ってくれば、頑張るからさ」
「……ふえ」

その日、ミーシエは数年振りに泣いた。

ハルトはその間、ミーシエを優しく抱きしめてた。
驚いた。

自分の中に、ここまで涙があつたなんて。

誰かに頼る事が、こんなに心地いいなんて

やがて、ミーシエは泣きやみ、ハツとしたようにハルトから離れる。
その行動にハルトは軽く傷ついたのだが、態度には出さないように
した。

「…………えつと、その」

「ああ、もちろんこの事は2人に内緒にするからさ」

「あ、ありがとう」

2人の間に気まずい空気が流れる。

やがてミーシエの方から

「じゃ、じゃあ、私は先に宿に戻って、ピリンクを見てるね」

「う、うん。おやすみ、ミーシエ」

「お、おやすみ、ハルト君」

ミーシエが宿に戻るのを見届け、姿が見えなくなったあと
恥ずかしさを抑え切れなくなったハルトは顔を真っ赤にし、大きく
息を吐き出した。

翌日、ミーシエ達の前でピリンクは目覚める。
何か声をかけようと思ったのだが、目覚めて最初の一言が

「あ、あれ？おはようございます」

だったもんだから、3人は思わず笑ってしまう。

「まあ、無事で何よりよ、ピリンク」

「いや、ご迷惑をおかけしました」

「まったくだ。早く体治せ」

「はは、分かったよ……寝てる間にさ、昔の夢みてたんだ」
「昔の夢？」

「あ、はい。自分がまだ駆け出しの兵卒だった頃の時代の夢でした」

「ああ、教官とか言ってたもんな」

「げっ、何か寝言とか言っていたりした？」

そこからしばらく他愛もない話で盛り上がった。

やがて、ミーシエが本題を切り出す。

「……じゃあ、まずは昨日の…『魔人』についての情報交換よ」

そして、ミーシエとパラソスはティナから、ハルトとピリンクはデイライズから聞いた話をそれぞれ話した。

「……まさか、『貴族院』がそんな実験を」

「私も最初は信じられなかったわ。でも、今はそれどころじゃない」「そうですね。キャリアオスが封鎖されたとなると……コルザ山脈を越える事になりますね」

「そうね……ですが、魔物もいますし、今まで以上に危険な旅になると思われます」

「そうよね……ヘイジさん、大変な事に巻き込んでしまって申し訳ありません」

「いや、しょうがないさ」

「……それで、帰るなら今しかありません」

「隊長！それでは隊長が！」

「いいの。コルザ山脈を越えるなら、どう考えても2週間じゃ帰ってこれないわ……ヘイジさんの好きなようにしてもらって構いません。もちろん、お渡しした金貨は差上げます」

「……残念ながら、貰うものもらってぶっちってというのはポリシーに反するんでね」

「……本当にいいのですか？」

元々、ハルトにはハルトなりの目的があつて王都へ行く事を決意したのだ。
どんなに頼りく見えても、自分の信念は曲げない、それがハルトの信条だった。

「うん。改めて、王都までよろしく頼むよ」
「……真に感謝します」

という事で、コルザ山脈を超える事になり、一向は準備を整えることにした。

その時、宿の扉が勢いよく開いたかと思うと。

「大変だ！ギルドがこの町にやってくるぞ！」

叫んだのは町の青年だった。

その言葉を聞いた人々は声を上げて驚く。

「ギルドですつて……」

「どうしてギルドなんかがこの町に……」

「どうする？自警団で何とかなる相手なのか？」

方々から声が聞こえる。

だが、いまい状況がよくつかめていないハルトはパラソスに訊ねる。

「ギルドって？」

「ああ、カーロスにはあまり縁がありませんからね。ギルドというのは王都非公認の自治組織です。簡単に言えば、王都の許可を取らず報償を見返りに依頼を受ける組織ですね。まあ、ほとんどは有象無象の集団なので、万が一襲ってきたとしても大丈夫だと……」

その時、宿の亭主が青年に訊ねた。

「なあ、近づいてるのはなんてギルドなんだ？」

「それが……」

「どうした？」

「……『オーバーレイ超光』らしい」

「何ですって!?!」

叫んだのはミーシエだった。

当然、宿の面々から注目を集める。

「……本当に『超光』なの？」

「え、あ、ああ。軍旗を掲げていたから間違いない」

「パラソスさん。『超光』って？」

「……ギルドの中でも、かなり大規模な部類に入ります。ギルドは荒くれ者というのが民衆のイメージですが、『超光』は弱きを助け、

強気を挫く。義賊のようなギルドです」

「じゃあ、何であんなミー……マテリアさんはあんな取り乱してるの？」

「それは……」

瞬間、凄まじい轟音が宿屋内に鳴り響く。

音の方を見ると、そこには木っ端微塵となった扉の残骸と、威風堂々と仁王立ちをする女の姿だった。

……ハルトは凄まじいデジャヴを感じた。

女は高らかに声を上げる。

「マテリア！ミーシエ・マテリアはいるか！」

女の服はどこかで見た事があるかと思えば、ミーシエのそれと類似していた。

「……はあ、なんでアンタ……貴女がここにいるのよ」

「そんな堅苦しくなるな！私と貴様の仲じゃないか！」

2人の様子を見て啞然とするハルト。

「……えっと、彼女は？」

「……あの方がギルド『超光』の首領アンジェリカ・ナイトレイジ様です」

ハルトはその言い方に疑問を感じた。

ギルドは王都非公認の組織であるはずだ。

なのに、何故……様……などと敬称をつける必要があるのか。

だが、パラソスの次の言葉でその疑問は解消される事となる。

「隊長の唯一公認の好敵手ライバルであり、『守六光』第五席を務める方です」

第4話 少女ミーシェの心中（後書き）

という事で、ピリンクの安否・ミーシェの心情を軸にしてお届けしました。

そして、ギルドの存在と新たな『守六光』を出してみました。アンジェリカの正体については次回でお話するかと思います。

前回より少し間が開いてしまいましたorz
次の話ではこうならないよう頑張ります。

評価・感想・指摘等、あと質問等してもらえればありがたいです。

追記：タイトル変更と一部内容を追加しました。

第5話 首領アンジェリカの体験（前書き）

ちよつと今回は短めです。

第5話 首領アンジェリカの体験

「……『守六光』の……第五席？」

「ええ。正確に言えば五席……代理……ですが」

「どういう事？」

「元々、第五席はアンジェリカ様の祖父、ズイバルダ・ナイトレイジ様だったんですが、去年、体を壊してしまっただけで、それまでの代理をアンジェリカ様に代任なさったんですが……アンジェリカ様は既に王都でも絶大の人気を誇り、時期第五席はほぼ決まってると言っても過言ではありません」

「それはまた……でも、どうしてそんな人がギルドの首領ボスなんかやってるの？」

「ん、興味があるのか？よし、答えてやろう」

話に入ってきたのは話題の当人、アンジェリカだった。

「恥ずかしながら、私には幼き頃から鍛えてきた剣の腕以外誇れるものは何もない。だが去年、それでも祖父様は私に、ナイトレイジ家の時期頭首という役職と共に『守六光』をお任せになられたんだ」

「は、はあ……」

「私は考えた。自分に出来る事は何かと……それで、今の王都を認識を変える為に、無償で依頼を引き受けるギルドを立ち上げた」

「どうやらアンジェリカは、見た目以上の勇敢さと行動力とを持ち合わせているようだ。」

「最初は方々に反対されたさ。友人、家族、王都の重役共……だが、唯一私の考えを認めてくれた者がいてな」

「ああ、それがマテリアさんって訳ね」

「……………ふん」

「その通りだ。その後、私は少しずつギルドを大きくし、徐々にではあるが都民の信頼を得られるようになったんだ」

「でも、無償でやっているのに、ギルドの人達の給料とかはどうやって？」

「『守六光』としての給金、それと、たまにくる王都からの依頼で稼いでいる」

それを聞いたハルトは素直に感心する。

歳は17らしいが、それに見合わぬ強い芯を彼女は持っていた。

「そして、私はマテリアに戦いを挑んだのだ」

「ちょっと待って、急に話が見えなくなっただけども」

「……………コイツはこういう奴なんです」

ハルトの質問にミーシェが答える。

アンジェリカはこう続けた。

「自分の行動は正しかったのか……私を理解してくれたマテリアと

戦い、答えを見つけたかったのだ」

「……別に戦う必要はないんじゃない？」

「真剣勝負ほど相手と心を通わせる方法など存在しないだろう」

アンジェリカははっきりと言い切る。

清々しいまでに自分を突き通すタイプらしい。

だが、この2人の決闘には興味があったのでハルトはパラソスに訊ねる。

「それで、どうなったの？」

「……えっと」

「まあ、勝敗にそこまで意味はないさ」

「……そうね、気持ちのいい話でもないし」

残念ながら言葉を濁されてしまう。

が、追求はしない。

この2人を敵に回せば、例えば巨大魔獣キガントを連れてでも降参せざるを得ないからだ。

「では、遅くなったがマテリア。最初の質問に答えよう。私がここに来た理由、それは単純に皆を休ませる為さ。先ほどまで任務だったのな」

「任務って？」

「コルザ山脈のグリフォンの掃討だ」

「なっ……魔物の処理は正当防衛でない限り、余程の事が無い限り出来ないはずよ?」

「まあ、民間の依頼ならそうだろうな」

「……まさか」

「ご想像の通りさ。『貴族院』に依頼された。王都の中でもあれほどギルドを毛嫌いしていた奴らがな」

「……どうして?」

「さあな。理由は私にも分からん。だが、金も大分貰ったからな。深くは考えない事にした……じゃあ、次は私が質問する番だ」

「……答える理由はないと思うけど」

「そう言うな。部下が負傷したと聞いたぞ?何か力になれるやもしれん」

「……ハア、貴女のそういう所が苦手なのよ」

ミーシエはパラソスとハルトと共にアンジェリカを連れ、宿の自室へと案内する。

さすがと言うべきか、部屋は綺麗に片付いていた。

そして、今までの経緯をアンジェリカに話した。

『貴族院』の命を受け、ハルトを王都へ連れて行く道中である事。キャリオスが何者かに襲撃を受け全滅した事。

そこで出会った『魔人』の事。

全てを聞いたアンジェリカは、顎に手を当て考える。

「……『キメラの悪夢』、か。聞いた事もない。が、貴様の言葉を

聞く限り、あながち嘘でもないようだな」

「ええ。少なくとも、全て嘘ではないと思う」

「そうか……だが、残念ながら今コルザ山脈を超える事は不可能だぞ？」

「……え？でも、グリフォンは貴女達が討伐したんじゃない？」

「ああ。確かにグリフォンは1頭残らず掃討した。が、コルザ山脈にいた魔物はそいつらだけではなかったのだ」

「……まさか、グリフォン以外の魔物が？」

「そのまさかさ。グリフォンばかりと思っていたのだがな。最後の1頭を狩った時だった。今まで狩ったグリフォンの死体から、何か、が抜け出たのだ」

「抜け出た？」

「ああ、他に言いようがない」

「……まさか」

「どうしたの、パラソスさん？」

「あ、いえ……」

「話を続けるぞ？それで、グリフォンから抜け出た、何か、は、山脈の頂上へと集まっていった。当然、我々もそれを確認する為、頂上に向かった……思えば、それは間違いだっただろうな」

「……何があったの？」

「……頂上にいたのは伝説魔獣レジェンダの一角、風を司る魔物、ケツアルコアトルだった」

「なっ！？……この周辺に伝説魔獣がいるなんて、それこそ聞いた事もないわよ」

「私もさ。最初は目を疑ったよ。だが、何度部下に確認しても、ケツアルコアトルで間違いないらしい……部下も数人殺られたよ」

「そんな……」

「……やはり、そうですね」

パラソスは何か分かったらしいが、その顔は優れない。

「パラソス、何か知ってるの？」

「……おそらく、『上位召還儀式』だと思われます。その昔、魔物を利用していた民族が生み出した術式だと言われています」

「どういう術式なの？」

「術式を仕掛けた場所一帯にて、属性が同じ下級の魔物がいなくなつた時、自動的に発動する術式です。その下級の魔物の魂を吸収し、それより上位の魔物が召還される……条件が難しい上に、複数の魔術師が居ないと使えない為、今では使われる事などほとんどありません」

「それって……」

「……つまり」

「私達が来る事を、グリフォンを掃討する事を知っていてその術式を仕掛けた……そういう事か」

「……おそらくは。そして、その術式を仕掛けた連中というのは状況から察するに」

「『貴族院』、で間違いないだろうな」

ハルトは絶句した。

仮にもこの国の政治を担う存在であるはずの『貴族院』が、何故王都の損失になるような事をしたのか。政争とはほど遠い世界にいたハルトにとっては、到底分かりかねない行動だった。

「『魔人』の件といい、ケツアルコアトルといい……『貴族院』はどうかしてるぞ」

「ええ……」

そこでミーシエはハルトに視線を向けた。

ハルトを呼び出したのも『貴族院』である。

つまり、ハルトにも何かしらの危険性があるという事だ。

だが、ハルトはその程度で旅をやめるつもりはなかった。

「まあ、ケツアルコアトルの方は『超光』に任せろ。ストルトや近隣の町村に危害を加える前に片付ける」

「……いくらなんでも、その人数で伝説魔獣相手は無理でしょう。」

私達も手伝」

「貴様等には任務があるのだろうか？そうやって遅延させていいものなのか？」

「……でも」

「私達なら大丈夫だ。それに、私の実力を知っているだろうか？」

「……」

「貴様等は迷わず進めばいいさ。ここから南にあるニューゼルへ向かい、海路から王都を目指せ」

「無理よ。今回は陸路のつもりだったから、乗船許可証を貰ってないの」

「何だ。それなら、私が紹介状を書こう。あの街には貸しがあるからな。きつとそれで大丈夫なはずだ」

「……ありが」

「ただし、その男……ハルト・ヘイジと言ったか？そいつの力を示してからだ。そいつに本当に守るだけの価値があるのか見せてもらおう」

「かつ、彼は関係ないでしょう！護衛対象にそんな事させられるはずないじゃない！」

「じゃあこの話はなしだ。なあに、別に強さを見るわけではないさ。言っただろ？真剣勝負は、その相手の全てを見せる」

「……そうね、貴女はそういう人だった」

「どうする？この話、乗るか？乗らないか？」

「当然、乗るよ。海路が1番安全なんですよ？」

「ヘイジさん！別に無理に話に乗る必要はないんですよ！」

「いいんだよ。それに」

「？」

「そろそろ、守られるだけの奴って思われたくもないからね」

そう言ったハルトの顔は、ミーシェが初めて見る顔だった。

「ははは！いいぞ、威勢のいい男は好みだ。よし、場所はこの町の広場、時間は明日の正午でどうだ？」

「いいよ。ピリンクさんもまだ動けないしね」

そう言うと、アンジェリカは高笑いしながら宿を出て行った。

第5話 首領アンジェリカの体験（後書き）

という事でアンジェリカの人柄と『貴族院』の陰謀を軸にしてみました。

もう少し進めたかったんですが、事情もあつて切りの悪いところで終わってしまいましたorz

次回、いよいよハルトの実力が明らかになる予定ですw

評価・感想・指摘・等してもらえれば嬉しいです。
あと、質問があれば喜んでお答えします。

第6話 格闘家ハルトの戦い方(前書き)

今回、ついに主人公がまともに戦います。

第6話 格闘家ハルトの戦い方

アンジェリカが宿を出た後、3人は彼女が壊した扉を修理していた。たまにミーシエが「アイツ今度殴る、『衝』で」と呟くのがたまに怖かった。

あと、数分に1度、冷え切った視線をハルトに向けてくるのだが、ハルトは気付かないフリを突き通した。

その日の夕方、ハルトはストルトの端にある『ツオルゼ防具店』を訪れていた。

が、店内には客どころか店主すらいなかった。すると

「お、客とは珍しい」

店の奥から髭を生やした大男が現れる。

おそらく、この男が店主なのだろう。

「兄ちゃん、何をお探しいだい？」

「ああ、ちょっとグリーンヴが欲しいんだ。できるだけ軽くて丈夫なやつ」

グリーンヴとは、いわゆる脛^{すね}当ての事だ。

「はは、グリーンヴとはまた珍しい。兄ちゃん、格闘家かなんかかい？」

「うん、よく分かったね」

「……これは驚いたな。このご時勢に、それも兄ちゃんくらいの歳の子が格闘家とは……よし、ちょっと待ってな」

そう言つと、店主は店の奥へと消える。

しばらくすると、グリーンヴを抱えた亭主が戻ってきた。

「最近は客足自体が少なくなった上に、格闘家なんて滅多に見なくなつちまったもんでな……けど、これの品質は確かだ。ちょっと型は古いが……どうだ？」

「へー……いいね、これ」

そのグリーンヴを手を取ったハルトは素直にそう答える。

素材は軽く丈夫な物で、ハルトの注文通りにできており、つくりは衝撃を拡散するように工夫が施されていた。

「うん、気に入ったよ。いくら？」

「いや、御代はいいよ。貰ってってくれ」

「え？でも」

「いいんだよ。どうせ倉庫で眠ってたやつなんだ。欲しい奴に貰われた方がそいつも喜ぶ^{グリーヴ}ってもんだ」

「…ありがとう、大事に使うよ」

「おうよ」

店主は気さくに笑う。

2人はそのまましばらく話す。

店主の名はヘベゾス・ツオルゼ、25の頃からここで防具店を始めてもう10年になるという。

「それにしても、兄ちゃん今までグリーヴもつけずに旅してたのかい？」

「うん。一応、耐久ベストは着てるし、この辺は魔物とか盗賊も少ないから大丈夫だと思ってたんだけど……どうやら、これからはそうもいかないみたいだね」

「……兄ちゃん、まさかグリフオンの代わりに出てきたケツアルなんとかつてのを倒しにいくつもりか？」

「まさか！……あれ、なんでコルザ山脈の事知ってるの？」

「さつき『守六光』のナイトレイジ様が来てな。どうやら、この町の1軒1軒に説明して回ってるらしいぞ。まだお若いというのに…

…立派な方だよ」

それは素直に頷けた。

アンジェリカは、自分の1つ上には見えないほど凛々しく、強い芯を持つている。

1年後、自分もあんな風になれるかと問われれば、答えはNOだ。

「よかった、俺んとこの防具買った奴を、死ぬかもしれないような戦場にはやれないからな」

「そんな勇気ないさ。ナイトレイジさん、他に何か言ってた？」

「何でも、近々『超光』^{オーバーレイ}の選抜部隊を組んで討伐に出るらしい」

「……そうなんだ。ありがとう、そろそろ行くよ」

「おう、機会があればまた寄ってくれや」

笑いながら手を振るへべソス。

ハルトは、それに応えながら防具屋を出て行く。

なんとなくだが「また会える」、そんな気がした。

宿に戻ると、入り口にはミーシェが立っていた。

ミーシェはハルトに気付くと

「ヘイジさん、お待ちしておりました」

ミーシエは満面の笑みを浮かべていた。

……目以外は。

ハルトは前にもこの顔を見た事がある。
初めて出会った時、ミーシエ達が家を訪ねてきて、ハルトが居留守を使った時の顔だ。

「少しお話があります。立ち話もなんですから、私の部屋に来ていただけますか？」

「……えっと、ほ、ほら！グリーヴ買った（？）からさ、ちょっと試してみないと」

「来て頂けませんか？」

「いや、その」

「来て頂けませんか？」

「………はい」

もはやハルトに折れる以外の選択肢は残されていなかった。

ミーシエの部屋を訪れたハルト。
その面持ちは、さながら死刑宣告を受けた囚人のようだった。
ミーシエは相変わらず（目以外は）笑みを浮かべながら口を開く。

「何か言う事は？」
「すいませんでした」

ハルトは即刻謝罪を述べる。
彼もそこまで馬鹿ではない。
少なくとも、何故ミーシエが自分呼び出したのかは見当がついて
いた。

「えっと、ナイトレイジさんの条件を勝手に呑んだ事……だよな？」
「それ以外にも何か後ろめたい事が？」
「い、いえ」

「べつやら相当お怒りのようだ。
「まったく」とミーシエは溜め息を吐く。

「アイツの……アンジェの勝負事に一々付き合ってたら身がもたないわよ」

プライベートではアンジェと呼ぶようだ。

少し意外に思いながらも、命が惜しいので口にはしない。

「えっと、ナイトレイジさんとはどんな関係なの？」

「大体はあそこで言ってた通りよ。アイツが困ってるみたいだから、ちよつと助言したら……顔合わせる度に色々と絡んでくるようになるのだ」

あのお堅そうな令嬢にそこまで懐かれるのとは、さすがと言うべきか、お人好しと言うべきか。

「アイツはいつもそうなのよ。勝負事大好きな奴で……困った奴よ」
「でも、友達なんでしょ？」

そう言うと、ミーシエは照れ臭いのか頭を掻く。

「いやまあ友達っていうか……アイツはどう思ってるのか分からないし」

「そう？ナイトレイジさん、ミーシエに会えて凄く嬉しそうだったじゃない」

「……そう、かしら？」

ミーシエは頬を染めながらハルトに訊ねる。
その様子に、ハルトは思わずドキッとする。

「でも、アイツの方が年上なんだから、もう少しそれらしく振舞ってもらいたいんだけどね」

「……お姉ちゃんが欲しい、とか？」

「まあね。1人っ子だったし」

今の言葉でハルトはなんとなく察した。

おそらく、ミーシエは甘えられる相手が欲しいのだろう。

両親の事は聞いてないが、話題に拳がらないという事は触れたくないのかもしれない。

だったら、自分がそういう……甘えられるような存在……になれないだろうか？

「?…どうかしたの？」

「ん、何でもないよ」

まあフランク達には悪いが、まだ旅は続くのだ。

これから少しずつ一緒の時間を増やせばいい、そう思うが、その必要はなかった。

何故なら

「さて、じゃあここからはお説教タイムね」

これからたっぷりと絞られるようだったからだ。

「どうして、アンジエの要求を勝手に承諾したの？」

「……えっと、船で行く方が早く着くのかなー、って思ったんだけど……」

「確かに、現状ではそれが1番安全な方法ね」

「じゃあ」

「それで明日ケガでもしちゃったらそれこそ本末転倒でしょ！それに、私が『守六光』である事を示せば、船くらい簡単に乗れるわよ」

ミーシエは任せると言うように自分の胸を軽く叩いて見せる。

が、あの場でそれを言い出さないという事は、やはりそれは職権濫用なのだろう。

ただでさえ、一部の『守六光』以外は世間あまり良く思われていない。

そんな事をしてしまえばミーシエの評判に関わる。

それを知ってか知らずか、ハルトは

「まあ、今更ナイトレイジさんに約束を取り消してもらうのもなんだし、僕だって格闘家のはしくれだ。ケガをしにくい戦い方ってのもあるしね。旅に支障はきたさないつもりだよ」

「……分かった、私の言い方が悪かったのね」

「？」

「……わ、私は護衛対象のハルト・ヘイジにじゃなく……えつと、その、ハルト君にケガしてもらいたくないの！……あ、ゆ、友人としてね！」

ミーシエのたどたどしいその答えは、ハルトの顔を赤らめさせるには十分過ぎる威力だった。

だが、それでもハルトは折れるわけにはいかない。これでもプライドはあるのだ。

「……あ、ありがとう、でも」

「分かってるわよ。キミみたいなタイプは、一度決めた事は最後までやり切るまでやめないもの」

「……………」

「でも、条件が1つあるわ」

「？」

「絶対に勝ってきて」

「……分かった、頑張る」

2人は軽く拳を合わせる。

そもそも、ミーシエはハルトの実力に関しては心配していなかった。彼の努力は、初めてこの町に来た時既に確認している。

ピリンクの話によると、『魔人』の1人であるディライズを、実質1人の力で追い込んだともいう。

大抵の人間ならば相手にもならないはずだ。

だが、それでも不安が拭い切れないのは、相手が……あの……アンジェリカだからだろう。

そして翌日、その不安は的中する事となる。

翌日の正午、ハルト、ミーシエ、パラソスの3人は町の広場へとやって来た。

既にアンジェリカとギルドの面々は勢揃いしていた。

当然、ハルトはグリーヴを足に、籠手ガントレットを手に装着している。準備は万端だ。

「はは、やはり来たか。まあ、逃げる事はないだろうと思っていたがな」

「『守六光』にそう買ってもらえるとは嬉しいね」

「……代理……だ。貴様からは不思議な匂いがするのでな、船の事を抜きにしても実力を見たいとは思っていた」

「……あんまし買い被られてもね……で、力を示すってどうやれば？」

「簡単だ。これから『超光』のメンバー3人と戦ってもらおう。なあ

に、……全員に勝て……と言っわけではないから安心しろ」

「……それはありがたい話だね」

「じゃあ、まずはこいつからだ」

そう言うと、ギルドメンバーの中から1人が前に出てくる。

細身ではあるが、筋肉のついた引き締まった体をした男だった。

「こいつはアンマ。ウチのギルドの中でも随一の槍使いだ」

「あんたがハルト・ヘイジとやらか？あんたを倒せばボーナスが出るんでね、悪く思っなよ？」

そう言うと、アンマは槍を構える。

対するハルトは何も構えない。

「……調子に乗るなよガキが！」

アンマは槍を構えたままハルトに突っ込む。

だが、それでもハルトは構える様子はない。

やがて、槍がハルトに届くかどうかの距離に迫ったその時

ベコッ！と、鈍い音が響き渡る。

それは、ハルトの足がアンマの顔面にめり込む音だった。

そのまま蹴り飛ばされるアンマ、その目は既に白目を剥いている。意識の有無は明らかだった。

「……ある程度は予想していたが、まさかここまでとはな。ふふ、あれでは力量を測る事も出来ないじゃないか」

「3回も戦^やるんなら、出来るだけ温存しておきたいんでね」

その場にいる誰もが、ミーシエとパラソスさえもが啞然とした。平然としていたのアンジェリカくらいである。

「ふむ、貴様の言う事も^{もつと}尤もだ。じゃあ、2戦目といこうか」

そう言うと、次に現れたのは筋肉質でがっしりとし、大槌を持った大男だった。

「アツシの名はバラドー。一応、『超光』の兵長を務めさせてもらってる」

「……『魔術師潰し』のバラドー、か」

「パラソス、知ってるの？」

「ええ。魔術師相手には負けなしとも言われている男です」

「負け無し、ね。まあ、少なくともヘイジさん相手だと関係ないでしょう？」

「いえ、あの大槌からも分かるように、白兵戦でも相当強いはずですよ……ヘイジ殿、大丈夫でしょうか？」

「……………」

気がつけば、騒ぎに気付いたストルトの住民達が何事かと様子を見

にやってきていた。

が、それも構わず戦いは続行される。

バラドーは大槌を構えると、ハルトの出方を伺う。さっきのカウンターを警戒しているのだろう。

仕方なく、ハルトはバラドーに向かって走り出す。

「速い……！」

バラドーはカウンターをする間もなく、後ろに下がって間合いを取る。

だが、ハルトはそのままバラドーに突っ込む。

さすがに距離が開いたので、今度は大槌で迎え撃つ。

しかし槌は空を切り、ハルトは既にバラドーの懐に潜り込んでいた。

「なっ！？加速、したのか……！」

「正解だよ」

ズン、と拳がバラドーの腹に突き刺さる。

凄まじい衝撃が走るが、何とか意識を保つバラドー。が、2発目の拳で彼の意識は確実に途絶えた。

「ふう、さすがにタフだね」

「……バ、バラドーさんがあんなガキに」

「嘘だろ……」

「3人目はどうするんだ？」

『超光』の面々は騒ぎ立つ。

その様子を見かねたアンジェリカは

「静まれ！」

耳を塞ぎたくなるような大声で一喝する。

「……正直、3戦目は保険だったのだから」

そう言うと、アンジェリカは静かに立ち上がる。

その動きには何者にも物を言わせない、そんな迫力があつた。

「まさかバラードーさえ捻じ伏せるとは……どうやら貴様を過小評価していたようだ」

アンジェリカはそのまま前が出る。

そして、剣を抜くと

「3戦目は私がお相手しよう。さあ、かかってこい」

と、構えてみせた。

無茶言うな、ハルトは心中でそう叫ぶ。

これが『守六光』の威圧感というやつなのだろう。

ハルトの体から止め処なく汗が流れる。

「ふふ、久しぶりに楽しい闘いになりそうだ」

そう言ったアンジェリカの顔は、ご馳走を前にした子供のように、無邪気な笑みを浮かべていた。

第6話 格闘家ハルトの戦い方（後書き）

すごい微妙なところで終わってしまいました……前回短くした結果がこれだよ！

今回はミーシェの想いとハルトの実力を軸にして書いてみました。次回、ようやくストルト編完結（予定）です。

評価・感想・指摘等もらえれば嬉しいです。

あと、なにか質問があれば喜んでお答えします。

z 追記：すいません、ギリギリでストルト編終わりませんでしたor

第7話 格闘家ハルトの死闘（前書き）

前回、ストルト編完結とか言っていました、ギリギリ終わりませんでした。

申し訳ありませんorz

第7話 格闘家ハルトの死闘

「待ちなさいナイトレイジ！彼は私達の護衛対象よ。貴女と戦わせるわけにはいかないでしょう！」

「ふん。相変わらず無駄に生真面目な奴だなマテリア。仕方ないだろう？力を見るのが目的だったはずが、あの2人ですらこいつの実力を引き出す事すら出来なかったんだ。私が出るしかあるまい」「ダメよ。どうしても言うなら私が貴女の相手をするわ」

そう言うとミーシエは『衝』を体に纏わせる。

「……惜しいな。実に惜しい。確かに、また貴様と真剣勝負をしてみたい気持ちはある」

「だったら！」

「だが、それでも私はこいつの力が知りたい。それが『貴族院』の……裏……に通じているのなら尚更な」

「……だからって、ケガでもさせたらどうするのよ」

「心配ない。その時は『超光』^{オーバーレイ}が責任を持って最善を施す。驚け、うちには『治』の魔術師がいるんだ。だから安心しろ」

「……そういう事なら分かった」

「分かっちゃうの!？」

ハルトは思わずツッコミを入れる。

正直、彼としてはアンジェリカを止めて欲しかったのだ。

実力は引けを取らない自信があるが、頭の中で勝てるイメージが浮かばない。

やはりミーシエはまだ怒っているのだろうか、そう考える。もちろん、彼女としては嫌がらせのつもりではなく、『治』の力を知っているからこそ引き受けたのだが。だが、引き受けた理由はもう1つある。ここまでできたなら見てみたいのだ。

ハルトとアンジェリカ、2人の戦いを。

それはミーシエだけでなく、パラソス、ストルトの住民、『超光』の面々達にも言える事だった。

もう戦うしかないようなので、ハルトも気合を入れ直す。戦いが終わった時、十中八九無事ではいられないだろう。それでも「戦^やる時は戦^やる」、それが彼の信条だった。

「さあ、邪魔が入ったな。続けようか」

「そうだね、ちょっと震えが止まらないけど」

そう言うと、両者は構える。

間合いを詰める瞬間を探っているのだ。

2人は静かに、その時、を待つ。

少しでも速かった方がこの勝負の主導権を握るだろう。辺りに緊張の糸が張り巡らされる。

やがて、その時、は訪れる。

次の瞬間、2人はほぼ同時にスタートを切る。

そして、ガキインと何かがぶつかり合う音が響き渡った。

群集の目はようやく2人の動きに追いつく。

そこには、籠手カブトと剣をぶつけ合わせ、膠着状態じょうちゅうの2人の姿があった。鏢迫り合いつばせ、とはこの場合呼べないだろう。やがて2人は弾かれたように距離を取る。

それはまさに「互角」と呼ぶに相応しい戦いだった。

「……ふむ。その籠手、この剣で斬れないとは……どういう事だ？」
「生憎と特別製だね」

「興味深いな。それに、初めてだ。私の動きについてこれる者というのは」

「……僕もだよ。一応確認するけどさ、それって魔法使ってるわけじゃないよね？」

「ああ、私の魔法は肉体を強化するものではない」

「魔法など使えない」というのがベストな答えだったのが、やはり『守六光』はそう甘くないらしい。

「……身体能力はほとんど同じなのに、まだ魔法も使っていないとはね……嫌になるよ」

「はは、謙遜するな。僅かだが貴様の方が速かったではないか」

確かにそうだが、それが見えてるといふ事は2人の身体能力にほとんど差はない。

ならば、魔法を持っているアンジェリカが有利なのは明らかだ。

ハルトにも、奥の手、と呼べる手段はある。
が、それは体に負担をかける為、なるべく使うのは避けたい。
そもそも、ハルトの戦い方は格闘家としてはかなり異質なタイプだ。
この世界のほとんどの人間は魔法を使う事の出来ない普通の人間で
ある。

しかし、魔法の行使に必要な、魔力、は、個人差はあるが誰も
が持っている。

その魔力を戦闘に使うのが、現代の格闘家のスタイルだ。
だが、ハルトは戦闘に魔力を使った事はない。

かと言って使えないわけではないのだが、ある理由があつて、今
は、使う事が出来ない。

自分が、ここ、だと思つた場面以外では魔力を使つてはならな
い。

それが、彼の師匠が彼に伝えた最後の言葉だつた。

「とは言つたものの、この相手に魔力を使わずに勝つてるのは……
難しい話だよな」

「何をぶつぶつ言っている？ 続けようじゃないか」

「ここで降参したい所だけど……ダメだよな」

「当然だろう」

2人は再び間合いを詰める。

時折、得物のぶつかり合う音が響く。

が、両者共決定打を与えられず、もう一度距離を取る。
思わず舌を打つハルト。

対してアンジェリカは、舌を打つどころか高笑いすらしてみせる。

「はっはっは！いいぞ、いい闘いだ！ここまで素晴らしい闘いはマテリア戦以来だ！」

「……昨日から思ってたけど、ナイトレイジさんって……変人？」
「「今頃ですか」」

ミーシエとパラソスの声が綺麗に八モった。

「むっ、失礼な。私はただ戦闘^{バサカ}狂なだけだ」

「うん。自分で戦闘狂って言い切っちゃう時点で変だという事に気付けてもらいたいよ」

ハルトは軽口を叩きながらも構えを解く様子はない。
それはアンジェリカもまた然り。
緊張の糸が解れる事はない。

「ふむ。では、そろそろこの闘いに一波乱加える事にしよう」

そう言うと、アンジェリカは剣を構えたまま何かを呟く。

それが詠唱だと気付くのはそれからすぐの事だった。

瞬間、アンジェリカの剣が光ったかと思うと、見る見るうちに形を

変え、銀色の刀身は青く染まる。

「これがナイトレイジ家に代々する魔法、『鉄』だ。自分の記憶を媒介に、鉄を生成・加工する事が出来る」

「……生成も出来るの？」

「魔力の消耗は激しいがな。ああ、あとこの剣の名は神速剣『ソニックドロウ』。由来は……すぐに分かる」

ハルトが知る限り『鉄』は結構希少な魔法だ。

そして、生成できるともなれば、それだけでアンジェリカの魔法の腕が伺える。

そのアンジェリカが、僅かな時間ではあるが詠唱までして創り出した剣……その意味をハルトはまだ理解できていなかった。

アンジェリカは剣を構えると、ハルトに向かって一気に走り出す。が、そのスピードは先ほどとは比べ物にならないほど速い。

「！」

ハルトは何かその動きを目で捉え、右に避ける。

アンジェリカは一度動きを止め、ハルトの方に向き直ると、もう一度突っ込む。

流石に避けられないと悟ったのか、腕を十字に組み防御の体制を取る。

アンジェリカは激突の瞬間、ハルトに剣を振り下ろす。

籠手が激しい音を立て、ハルトは衝撃に耐え切れず吹き飛ばされ、後方の民家に激突する。

「カハッ！」

肺の中の酸素を全て吐き出した、そんな錯覚に襲われる。が、ここで倒れる訳にはいかない。さもダメージ等通っていないかのように振舞う。

「……まあ、さすがにあの速さを捉えるのはキツいね」

「まだ闘えるのか？ 驚いたな。常人ならば失禁でも済むか分からない一撃だというのに」

そう思うなら、と言いたくなる気持ちを必死で堪える。

「だが、もう一度食らえば命の保障は出来かねんぞ？」

「一度受けた技は二度食らうってのが師匠の教えでね」

「ふふ、面白い奴だな貴様は」

そう言うと、アンジェリカは加速する。

ハルトは冷静に考える。

おそらく、アンジェリカの尋常ではないスピードはあの剣がもたらす効果なのだろう。

だが、速いのであれば止めてしまえばいい。

ハルトはアンジェリカをギリギリまで引きつけると、紙一重でかわしてみせる。

当然、追撃を仕掛けるアンジェリカ。

ハルトは初撃と同じように引きつけ、そしてかわす。

それから2、3回ほど同じ行動を繰り返した所で

「よし、見切った」

そう言うと、ハルトは突撃するアンジェリカへ逆に突っ込む。

そして、激突の1歩前で下に屈むと、アンジェリカの足を払う。

「ッ！」

バランスを崩し、片手を地面に着いてしまうアンジェリカ。

その隙をハルトは逃さなかった。

アンジェリカの懐に潜り込むと、彼女の腹に肘鉄を食らわせる。

「ごめんね」

アンジェリカは声を上げる事はなかったが、さすがにダメージを受けているらしく、左手で腹を押さえていた。

そのままゆっくりと立ち上がる。

気がつけば、雨が降り始めていた。

「……まさか数回で『ソニックドロウ』のスピードを見切るとはな。想像以上どころではないな。今のは効いたぞ」

「……女の子を殴るっていうのは気が引けたんだけどね。さすがに君クラスとなるとそんな事も言っつてられないよ」

「はは、お褒めに預かり光栄だ……では続けようか」

そう言うと、アンジェリカは再び詠唱を唱える。

すると『ソニックドロウ』は大剣へと姿を変え、刀身は紅く染まった。

「剛剣『クリムゾンロード』。その昔、100人以上の人間を斬った事から『血剣』と呼ばれ、この剣の所有者が通る道は血に染まったと言われている」

「……随分と物騒な剣だね」

「物騒なのは風貌だけではないがな……行くぞ」

そこから20分は、まさに激闘と呼ぶに相応しい戦いだった。

徐々に強まる雨足と共に、戦いも熾烈を極めていく。

アンジェリカの『クリムゾンロード』の破壊力は相当のものだったが、大剣であるが故の隙の大きさをハルトは狙った。

その後、アンジェリカは様々な剣を創り出し、ハルトに攻撃を仕掛ける。

ハルトは攻撃を受けながらも、アンジェリカの剣を次々に攻略していく。

そして20分後。

両者共、もはや無事と呼べる状態ではなかった。
若干ハルトの方がダメージは大きいが、アンジェリカも魔力の消耗で息を切らしていた。

「まさかここまで追い詰められるとは……本当に面白い奴だな貴様は！」

「……正直、ここまで長くなるとは思わなかったよ。どっちが勝つにしても短期決戦だと思ってたのに」

「私もだ……負ける気はなかったがな。では、マテリアの顔が見てられないので、そろそろ決着を着けよう」

言われて、ハルトはミーシエの方を見る。

そこには、必死に歯を食いしばり、目に涙を溜めているミーシエの姿があった。

ミーシエは悔しかった。

ハルトがあんなにポロポロなのに何も出来ない。
見ることに出来ない。

だから、せめて最後まで目を背けずに見ていよう。

その顔を見たハルトは

「……戦う理由が増えたかな」

両手の拳を合わせ、アンジェリカに集中する。

「……いいな」

「え？」

「い、いや何でもない……では、終わらせようか」

アンジェリカは詠唱を始める。

それは、今日聞いた中で一番長い詠唱だった。

そして、アンジェリカの剣が光出す。

現れた剣はハルトが見た中で最も美しく、最も威圧を放つものだった。

「……これが秘剣『ナイトレイジ』。これが私の姓名ナイトレイジを冠する意味は……聞くまでもないな」

どうやら、これがアンジェリカの持つ最強の剣らしい。

「とは言っても、これはナイトレイジ家の頭首を襲名し、初めて創る事のできる剣だな。これは6、7割程度の力しか使えないレプリカに過ぎん」

レプリカでこれほどまでとは……本物でなくてよかったと心から思う。

「では……決着を着けようか！」

アンジェリカは走り出す。

ハルトは構えたままそこを動かない。

やがて、アンジェリカは『ナイトレイジ』を横一閃に振るう。
ハルトはそれを籠手で受け止める。

その光景を見て、一番驚いたのはミーシェだった。

「……ふむ、やはりその籠手は斬れんか」

そう言うとアンジェリカは『ナイトレンジ』で連撃を繰り出す。
ハルトはそれを両腕を使いながら何とか防御する。

「……ねえ。その剣の能力、もしかして」

「ん？気付いたか」

そう言うとアンジェリカは距離を取る。

「よく気付いたな、その籠手を使っていながら」

「……って事は、そつちもこの籠手の事……」

「ああ、大体は察しがついた……『無干渉』、だろう？」

「……これを僕にくれた人は『不障むしょうの籠手』って呼んでたけどね」

群集は、ミーシエを含めて、2人の会話をよく理解出来なかった。

「じゃあ、やっぱりその剣は……」

「ああ。・・・斬れ味・・・に特化した魔剣、それが『ナイトレイジ』だ」

そう言うと、アンジェリカは切っ先を下に『ナイトレイジ』を落としてみせる。

すると、『ナイトレイジ』の刀身はすっぽりと地面に埋まり、鍔の部分でようやく止まった。

雨でぬかるんでいるとは言え、さすがにハルトは息を呑む。群集にもどよめきが広まった。アンジェリカは剣を引き抜く。その刀身には泥1つ付いていなかった。

「この剣は刀身の・・・どの部分でも・・・斬る事が可能だ。泥が付着していないのは泥を斬った、それだけの事だ」

ミーシエはただ驚いていた。

彼女は『ナイトレイジ』を一度だけ見た事がる。

当然、どういふ剣かも知っている。

だからこそ、何故ハルトの籠手が斬れないのか、それが不思議でないのだ。

「……………ナイトレイジ様は、『無干渉』と言ってましたか？」

「え？ええ、確かにそんな事言ってたわね」

「じゃあ、あれが……………」

「……………どういう事？」

「……………『無干渉』というのは、魔力の影響を受けない武器、もしくは防具の事です。今では幻と言われるくらい希少なものです」

「……………それじゃあ、ヘイジさんのあの籠手が？」

「信じられません……………あの剣を受け止めたという事は、おそらくそうなのでしょう」

ハルトは拳を構える。

おそらく、次で勝負が決まるだろう。

確かに、ハルトの籠手は『ナイトレイジ』の効果を受けない。

だが、裏を返せばそれは籠手以外の部分に『ナイトレイジ』を受ければ終わりだと言う事だ。

しかし、消耗した状態であればどの剣を創り出したのだ。

アンジェリカの方も体力の限界だろう。

両者共構え、決着のその時を見極める。

やがて、唐突に両者が走り出す。

瞬間、ガキーンという鋭い音が連続して響き渡る。

まず2回、籠手と『ナイトレイジ』がぶつかり合う。
次に、ハルトは跳んだかと思えば、アンジェリカの上空から右手で狙う。
が、それも『ナイトレイジ』で防がれ、更には着地を狙われるが、何とか体の軸をずらし、『ナイトレイジ』は空を斬った。
ハルトは地面に着地すると、もう2発籠手で連発する。
再び籠手と『ナイトレイジ』がぶつかり合った。
2人の間に若干の間合いが生まれる。

「……すい」

パラソスは思わずそう呟く。

群集も皆見惚れていた。

それほどまでに、両者の動きは華麗だった。

が、やがてその戦いにも終わりが訪れる。

僅かに生まれた間合い。

その瞬間、2人は決着を悟ると、最後の1撃を構える。

最初に動いたのはアンジェリカだった。

一気に間合いを詰め、アンジェリカは渾身の力を込め、横一閃に剣を振った。

それは今まで最も鋭く、疾い1撃だった。

が、その1撃は空を斬る。

ハルトの姿は下にあった。

アンジェリカの攻撃を察し、咄嗟に屈んだのだ。

ハルトはそこから本日2回目となる足払いをかける。

攻撃を放っていた事もあり、アンジェリカは簡単に崩れた。

ハルトはそのままアンジェリカを後ろに押し倒すと、両腕を膝で塞いでマウントを取った。

決着が、着いた。

「……僕の、勝ちだね」

「……ああ」

アンジェリカは認める。

が、その顔色はいつも以上に優れていた。

「私の負けだよ、楽しかった」

その言葉を口火に、群集は湧き上がり、拍手が鳴り響く。

『超光』の者達は驚きを隠せなかったが、やがて2人の健闘を称えるように拍手をする。

が、ハルトは突然アンジェリカの上に倒れる。

「お、おお!？」

アンジェリカは驚き、珍しく顔を赤らめる。
ミーシエとパラソスは、急いでハルトに駆け寄る。

どうやら緊張の糸が切れたからか、気を失っているだけだった。

「……はあ、心配させて」

しかし、ミーシエは僅かに笑みを浮かべると

「頑張ったね」

そう言うと、ハルトの髪を優しく撫でるのだった。

第7話 格闘家ハルトの死闘（後書き）

という訳でアンジェリカとハルトの戦いを軸に書いてみました。ついでにと思つて魔力の設定や、ハルトの籠手についても触れてみました。

戦闘描写は本当に難しいですね。

上手く書けた自信がありません。

「こうすればいい」とか気軽に教えてもらえれば幸いです。

今回は番外編にしようと思つてます。

まあ、ほとんど書き上がってるんですがw

ピリンクの夢から、あの3人の過去に触れていこうと思います。

評価・感想・指摘等してもらえれば嬉しいです。

あと、質問があれば喜んでお答えします。

番外編 2 伍長ピリンクスの回想（前書き）

今回はあの3人の出会いの話です。

番外編2 伍長ピリンクの回想

ピリンクがテイナの攻撃を受け、ストルトで手術を受けている頃。

彼は昔の夢を見ていた。

2年前、自分がまだ駆け出しの兵卒だった頃。

ピリンクとパラソスは、軍の研修で同じ隊に派遣された。

思えば、それ以来パラソスとはずっとつるんでいる気がする。

その時派遣された隊の士官というのが、兵卒の間でも『鬼教官』ならぬ『赤鬼教官』というあだ名で有名な男だったのだ。

「いいか良く聞け！貴様らのような地べたを醜く這いずるだけの蛆虫がここに立つという事さえありえないのだ！貴様らはただ息をするだけの蛆虫に過ぎん！この2週間、この隊のほとんどの蛆虫が軍人の道を諦めた。無様なものだ」

当然だ、この教官の組む訓練内容は他の教官のその5倍はであると推測されている。

ちなみに、この研修には各隊に約50人の兵士が派遣されるのだが、この隊に派遣された者の中で2週間耐え抜いた者は例年10人にも満たないという。

そう考えれば、何とか15人程度は残っているピリンク達の部隊は、まだマシだったという事だろう。

そして、同時にこの訓練に耐え切った者は屈強で優秀な兵士に成長するのちもつぱらの評判だった。

「しかし！無様にも地を這いずる蛆虫ながらも、まだ残っている貴様らは、蛆虫の中では多少骨のある蛆虫らしい」

ちなみに、この前時代的な鬼軍曹風の喋り方をするような教官も、ピリンクが知る限りこの男だけである。

だが、意外にもこの教官は兵士達から人気がある、理由は

「……本当によく頑張ったな。今日は飲みに行くぞ！俺の奢りだ、光栄に思え蛆虫共！」
『おおおおおおお！』

ただ厳しいだけの教官ではなかったからだ。

それから1週間。

研修を終えたピリンクはパラソスと共に、王城に派遣され二等兵として雑務を命じられていた。

魔術を扱える者は優遇されるのだが、軍に入った最初の半年は実践任務を受けられず、階級を上げる事はできない。

貴族出身の兵士ならばコネで上等兵、実力が備わっていれば伍長や軍曹からスタートする事もある。

が、大体は研修の訓練にすら耐え切れずに逃げ出す貴族がほとんどだった。

「でさ、俺は友達に聞いてみたんだよ。『どうして処女は優遇されるのに、童貞はむしろ煙たがられるんだろっ?』ってな」

「その答えには興味があるな、それで?」

「ああ、そいつは『1度も攻められた事のない城砦と1度も攻めた事がない兵士、どっちが欲しい?』ってさ」

「……なるほど、真理だな」

2人は、毎日そんな他愛もない話をしながら雑務をこなしていた。だが、ある日その生活はこれまでと一変する事となった。

王城で半年の仕事を終え、いよいよ実践任務を受けるようになってきた2人。

だが、ピリンクの中では「このままでもいい」そういう気持ちが大きくなってきていた。

確かに、軍の研修を受けていた頃は、父のような軍人になりたいと決心を固めた。

しかし、半年という月日は思ったよりも長く、ピリンクの決心は揺らいできていたのだ。

そんな悶々とした想いを抱え、初任務としてパラソス以下数名の兵士と共に王都の下町へと繰り出す。

最近、高町に住む少年が、魔法を使い下町の住民を襲撃しているというのだ。

高町と言うのは、王都の中でも、貴族等の金持ちが住む町である。逆に下町と言うのはその逆で、言い方は悪いが貧しい者達が住む町だ。

「犯人は高町の者、か」

「ああ。目撃証言から間違いないらしい」

「それで、毎日この時間帯に下町に来るんだよな？」

「らしいな……まあ、捕まえてもすぐに釈放だろうがな」

「……金に物言わせて、か」

それが、今の王都の現状だった。

「とにかく、俺達はあまりその犯人にケガを負わせず捕まえりゃいいんだよ」

「……納得はいかないけどな」

すると、近くでドゴン！という音がしたかと思えば、音の方角から煙が立ち昇る。

「来たぞ！」

「ああ！」

2人は音のする方向へと向かう。

そこには、壊れる家屋と、その中心に立つ青年の姿があった。

おそらく、この青年が例の襲撃犯だろう。

痕跡から見るからに『衝』の魔法を使うようだ。

「……ん？あんた等、王都の兵士さん？俺を捕まえにきたの？」

「……ああ。連行させてもらう」

「アハハ！あんた等馬鹿だろ？俺はオングズ家の息子だぞ？捕まっ
たってすぐに出られるんだよ！高町に住んでるってだけでなあ」

「……………」

「そうだ。あんた等、俺を捕まえに来たって事は魔術師なんだよな
？ハハ、じゃああんた等を倒せば俺も王都軍に入れるって事だよな
あ！」

どうやら、このオングズとかいう少年は軍の研修に耐え切れずリタ
イアした1人らしい。

おそらく、下町を襲っているのも単なる憂さ晴らしだろう。

住民街や高町を襲えば、最悪『守六光』が出てくる可能性すらある
からだ。

「ハハハ！そうしよう……って事で、眠ってくれや！」

オングズは『衝』を繰り出す。

が、『赤鬼軍曹』どころか、普通の士官の研修すら成し遂げられな
かったオングズ如きに引けを取る2人ではなかった。

ピリンクは『土』で『衝』を防ぎ、パラソスは『火』を使い、火柱
でオングズを囲む。

「ヒッ……………」

「よし、拘束するぞ」

パラソスがオングズに近づく。
が、オングズはパラソスが『火』を解いた瞬間、パラソスをかわし
後ろに下がる。

「おい、悪足掻きは」

「動くなあ！」

見ると、オングズは隠れていた少女の首を腕で固めていた。
少女はびっくりしたように目をパチクリさせていた。

「っ！お前……」

「へ、へへ、動くなよ。動けばこのガキがどうなってもしらねえぞ
！」

オングズは狂ったように笑うと、『衝』で2人に攻撃を仕掛ける。

「ぐっ！」

「ガッ！」

「……ハハ、ハハハハ！なんだ、王都の魔術師つてのも大した事
ねえなあ！」

オングズはとどめを指そうとピリンクに手を向ける。
やられる、そう思った。

だが、オングズの攻撃が放たれる事はなかった。

「……もういい」

「は？」

瞬間オングズの体は吹き飛び、自身が壊した家屋の瓦礫へと突っ込んでいた。

その場に立っていたのは、もはや人質に取られていたはずの少女だけだ。

少女は不機嫌そうに口を開く。

「私達の町を壊して、私まで人質に取った上に無抵抗の兵士さん達を傷つけるなんて……最低よ。反省してるなら注意で済ませようと思ってたのに」

オングズは状況がよく出来ていなかったが、自分よりも年下の、それも女に吹き飛ばされた為、プライドが大いに傷つけられた。その怒りは当然少女に向けられる。

「……ふっざけんなクソ女ア！」

オングズは最大の威力で『衝』を放つ。
が、少女は余裕の態度を崩さない。

「……へえ、アンタも私と同じ……やつ……なんだ」
「へ？」

少女は『衝』の方に手を向けると

「でも、これじゃあダメね」

少女の手から凄まじい衝撃波が放たれたかと思うと、それは簡単にオングズの『衝』を呑み込み、彼のすぐ右隣りを貫く。
オングズは腰が抜けたように、その場に崩れる。

「よし。じゃあ、兵士さん。あとはよろしくお願いします」

ピリンクとパラソスはその場を動けなかったが、我に戻ると

「ま、待ってくれ！」

「え、え？」

少女は困惑したように立ち止まる。
ピリンクも引き止めた方がいいが、何から尋ねればいいのか分からなかった。

「えっと……き、君の名前は？」

「あ、そういうのってやっぱ大事なんですよ、すみません」

少女は照れ臭そうに頭を掻くと

「マテリア、ミーシェ・マテリアです。住所は」

「あ、いや、そういうのじゃなくて……君も襲撃犯を探してたのかい？」

「ええ。前に襲われたのが私の友人の家だったんです。それで」

「ああ、なるほど……えっと」

ピリンクは何を言えればいいか分からなかった。

が、彼女を引き止めてしまった理由は分かっている。

彼女の圧倒的な力に見惚れたのだ。

この力があれば、今の王都を変えられるかもしれない。

ミーシェを軍に引き込みたい。

ピリンクは純粹にそう思った。

「……ねえ、この下町を自分の力で守ってみたいとは思わない？」

1週間後、ミーシエは軍人となった。
研修も無しで、だ。

ピリンクに話を持ち掛けられた時、考えて欲しいと彼女は言った。
実はその頃ミーシエの家は、月の学費を払えないほど貧窮していたらしい。

ピリンクとパラススにより、上官に紹介されたミーシエは持ち前の魔法の腕を見せ、下町出身にも関わらず兵長からスタートした。

そして1年後、ミーシエは晴れて最年少の『守六光』となった。

『守六光』になったその日の午後、ミーシエは久々にパラススとピリンクに再開する。

「ピリンクさん！パラススさん！その節はどうも……」

が、2人は

「マテリア隊長！この度は『守六光』就任おめでとつございます！」

「これからはどうぞ我々を顎でお使ください」

「……え？えっと、あの何で敬語なんですか？それに隊長って……」

「貴女は今日から『守六光』就任と同時に少佐に昇進なされた。それは同時に一隊の指揮官である事を意味します。我々は、本日付けでマテリア隊に派遣される事となりました！」

「えっと……」

「隊長。我々に敬語を使う必要はありません。我々は貴女の駒であり、犬なのですから」

「で、でもお2人のおかげで私は！」

「隊長」

パラソスが静かに、しかし厳格な声でミーシエを諭す。

「我々は、1年前隊長にお会いした時からこの日をずっと待っていました……隊長もご存知でしょうが、今の王都は何かがおかしい」「……………」

「ですが我々は隊長の強さを見た時、この人なら、王都を内側から変えられる、そう思いました。ですから、その隊長が部下に対して敬語では格好がつきません」

ピリンクも頷く。

ミーシエは「うー」と頭を抱えると

「……………分かりました、いえ、分かったわ。これからもよろしくね」

「はい！」

「ええ」

3人は拳を交し合う。
そして、締め言葉をミーシェが口にする。

「ピリンク、パラソス。これから私達は、この王都を内部から改革していく。危険な目にも合うかもしれない……でも」

そこでミーシェは一拍置くと、覚悟を決めたように片目を閉じておどけてみせる。

「私と一緒に、未来までついて来てくれる？」

「もちろん！」

「お望みとあれば地獄の底まで」

これが、1年前の出来事だ。
以来、危険な事も何度か合ったが、その度にミーシェは冷静な判断でその場を切り抜けてきた。
それはこれからも変わらない。
無論、目が覚めても……。

ピリンクは珍しく騒がしいパラソスの声で目が覚める。
病室にはミーシエ達3人と、町医者らしき男がいた。
さっきまで夢を見ていたピリンクは思わず

「あ、あれ？おはようございます」

と言ってしまった。

皆に笑われるが、その声にからかいの色はない。

情報交換を終え、ミーシエと2人になった時

「隊長」

「うん？どうしたのピリンク？」

「……実は自分、昔の夢を見ていました」

「昔の？へー、いつの？」

「隊長に初めて会ってから、マテリア小隊が結成した時までです。

覚えていますか？」

「当たり前でしょう。懐かしいなあ」

「……正直、あの時我々は隊長に頼りっぱなしでした……ですが、今はヘイジ殿がいます。正直、あの方ならば隊長のお力になれると思うのです。だから」

「何言ってるの？今の私があるのは貴方とパラソスのおかげよ。『守六光』になって、苦しかった事もあったけど、私は後悔していな

い……言える内に言っておくわね」

ミーシエは照れ臭そうに頭を掻く。

その仕草は、出会った時と何も変わらない、可愛らしい少女の姿だった。

「いつもありがとう。感謝してるわ。これからもよろしく」

その言葉で、ピリンクの胸は一杯になる。

この人に一生ついていこう、改めてそう思った。

番外編2 伍長ピリンクの回想（後書き）

と言う事で、ピリンクの昔の夢を軸にして書いて見ました。

ミーシェは昔から強かったです、はいw
ついでに、ピリンクの軍での階級も明らかにしました、タイトルだけですがw

次回からは本編に戻ります。

ようやくハルト達の旅が再開されます。
そして、ハルト達一行に新たな仲間が？
そんな感じにしようと思ってます。

（今度こそ）次回でストルト編完結です！

評価・感想・指摘等もらえれば嬉しいです。
あと、質問をもらえれば喜んでお答えします。

第8話 乙女アンジェリカの激白（前書き）

ようやくストルト編の完結。

そして、ミーシェ達一行に新たな仲間が……。

第8話 乙女アンジェリカの激白

ハルトとアンジェリカの戦いから2日。

皆が見守る中、宿屋のベッドでようやくハルトは目を覚ます。

あまりの人の多さに思わず驚く。

「ハル……ヘイジさん！よかった……」

「ようやくお目覚めか。負けた私が軽傷で勝った貴様が寝込むというもおおかしな話だな」

「えっと……」

ハルトは記憶を辿る。

そして、ようやく2日前の激闘を思い出した。

が、余韻に浸る暇もなくアンジェリカは

「では、早速だが本題に入ろうか」

「……ねえ、ヘイジさんは起きたばかりなのよ。そんないきなり」

「ただでさえ貴様等の予定は押しているのだから？ならば話だけでもしておくのが最善だ」

「……悔しいけど、その通りね。ヘイジさん、長話になるかもしれませんが大丈夫ですか？」

「うん、問題ないよ」

「それでは始めようか。まずはマテリア、これを受け取れ」

そう言うと、アンジェリカは王都発行の乗船許可証をミーシェに渡

す。

「ん、確かに」

「言い忘れていたが、ヘイジの力は文句なしで合格だ」

「え？あ、ああ、ありがとう」

「うむ。あと……はあ、トリシア。隠れてないで出て来い」

「ひっ」

すると、部屋の隅から茶髪の少女が現れる。

「紹介しよう。ヘイジの治療を施した『治』の魔術師、トリシア・ランゼスだ」

「えっと……よ、よろしくお、お願いします……」

トリシアはそれだけ告げると、そそくさとアンジェリカの影に隠れる。

「……ご覧の通り、トリシアはかなりの人見知りでな。最近はおまわり外にも出ない為か、それが酷くなっている……今年20歳になる婦人がそれだと、な？」

「……何となく予想が出来るんだけど……それで？」

「ああ。貴様等の旅にこいつを連れて行ってもらいたいのだ。『治』の魔術師だ、悪くないだろう？」

「ア、アンジェリカ様！？それ初耳なんですが！」

「ん？ああ、言っていないからな」

「む、無理です！知らない人といきなり旅だなんて……絶対に無理ですって！」

「大丈夫だ。皆いい奴ばかりさ。それに、そう言っと思ってな。もう1人同行させる事にしたんだが……是非自分が、と聞かない奴がいてな。おい、入って来い」

そう言っつと、見覚えのある巨体の男が部屋に入っつて来た。

「よろしくお願いしやす」

「……えつと、バラドーさん、だっけ？」

ハルトがそう言っつと、バラドーと呼ばれたはパアつと目を輝かせる。

「覚えていてくれやしたか、アニキ！」

「ア、アニキ？」

バラドーとは『オーバーレイ超光』の兵長を務め、『ウィザードフレイカー魔術師潰し』の異名を持つ男だ。

「はい！一昨日の戦い、お見事でした！あそこまで完膚無きまでにぶちのめされると……逆に清々しかったです！」

「ど、どうも」

「ですから、自分もアニキと共に旅をし、色々学びたいんです！よろしく願います！」

こういう状況は初めてだが、ハルトは人に持ち上げられるのが少々苦手だった。

「いや、買い被り過ぎですって。それに、敬語はやめてくださいよ。バラドーさんの方が年上なんだから……ちなみに、おいくつで？」

「いえ！尊敬する方には敬語というのがアツシの流儀なので！あと、今年で25になります」

25歳の若さで大ギルド『超光』の實質ナンバー2とは……『魔術師潰し』は伊達じゃないらしい。

確かに戦力にはなるだろうが、ハルトとしては出来れば遠慮したかった。

ミーシエをチラリと見ると

「……よし、分かったわ。この2人、連れて行くわね」

ミーシエさああああん！

ハルトは絶叫した、心の中でだが。

「そ、そんな！うう……」

「よっしゃー！ありがとっございますー！……ん？どうしたトリシア、

そんな顔して」

「だって……知らない人と一緒に旅だなんて……」

「アニキと旅出来るんだ、これ以上幸せな事はないだろ？それに、マテリア…様がいるんだ。女友達欲しいって言ってたじゃねえか」

「……そうよ、そうだよね。ポ、ポジティブに考えないと！」

どうやら、トリシアはギルドメンバーとは普通に接する事が出来るようだ。

そして、彼女はミーシエに前に出ると

「……よ、よよよよろしく、お、お願いしまひゅ！」

舌を嚙んだようだ。

結構痛かったらしく、口元を押さえ涙ぐむトリシア。

が、『治』を使う様子はない。

『治』は普通の魔法より大幅に魔力を消費する。

そう簡単に使えるものではないのだ。

ハルトの時も、限界まで『治』を使ってくれたのだが、負い目を感じさせる必要はないと判断し、ハルトには告げていない。

「……ええ、こちらこそよろしくね。期待してるわよ」

「は、はい！精一杯頑張りましたっ！」

舌を嚙んだようだった。

ついに痛みに耐え切れず、目から涙をこぼすトリシア。

それを慌ててあやすバラドー。
そんな2人を尻目に、ミーシエはアンジェリカを呼び、部屋から出ると、隅の方で話始める。

「で、どういっつもり？」

「何のことだ？」

「聞いたわよ。近々『超光』で選抜隊を組んで、ケツアルコアトルを討伐しに行くんですってね」

「ああ。情報が早いな」

「なのに、どうして主戦力のあの2人を手放すような真似をするの？」

「……………」

「1人で行くつもりね」

「……………さすがだなマテリア。相変わらず頭がよく回る奴だ」

「馬鹿じゃないの！1人で伝説魔獣レジェンドに勝てるはずないでしょ！？」

「だろうな。だが、原因となったグリフォン討伐は私が引き受けた依頼だ。私がケジメを着けねばなるまいさ」

「だからって！」

「当然、私だつて死ぬつもりはないさ。すぐに行くつもりはない。

最低でも……………そうだな、2週間は必要だ。そうすれば、そこそこの勝算が生まれる」

「……………信じていいのね？」

「無論だ。私が嘘を吐かない事は貴様もよく知っているだろう？それに、本当に必要ならば貴様の力を借りるさ」

「……………分かった、こっちは任せる。死んだら殺すわよ」

「任せておけ」

2人は拳をコツンとぶつけ合う。

「……そうだ、選別という訳ではないが、1つだけ貰いたいものがある」

「何？私に用意出来るものならば何でも言って」

「そうか」

そう言うと、アンジェリカは部屋の中へと入っていくと

「……ん？どうしたのナイトレイジさん？」

「アンジェリカでいい」

「え、でも」

「アンジェリカでいい」

「……はい」

この有無を言わせない物言いをハルトは知っている。

「？なによアン……ナイトレイジ。もらいたいものって」

「あ、ああ」

アンジェリカはぎこちない動きでハルトの腕を掴むと

「こいつだ」
「は？」

そう言うとアンジェリカはハルトに向き直り

「ヘイジ……いや、ハ、ハルト」

ハルトは驚いた。

ファーストネームで呼ばれたのもそうだが、あのアンジェリカの表情が、僅かであるが変化したのだ。

若干頬が染まっていた事には気付かなかったが。

「その……だ」

「な、なに？」

「……私の婿になれ！」

「……………は？」

その場にいた誰もが呆気にとられる。

開いた口が塞がらない。

すると最初に言葉を発したのは

「ふ、ふざけてんじゃないわよアンジェ！何言ってるの!？」

いつもは冷静なミーシェが、皆の前だと言うのにプライベートの物言いでアンジェリカに叫ぶ。

「う、五月蠅いぞマテリア！何でもいいと言ったではないか！」

「無理に決まってんでしようが！」

「もちろん、今すぐという訳ではない。王都への旅が終わった後だ。それならいいだろ？」

「そ、そう言われると……って違うでしょ！大体それは私じゃなくてハル：ヘイジさんの意思で決める事じゃない！」

「そ、そうか。それもそうだな。という事でハルト、婿に来ないか？」

「いやいやいやいやいやいや！」

ようやくハルトは自分が置かれている状況を理解する。
どうやらプロポーズ(?) されているらしい。

「ちょっと待って！僕まだ16だし、ナイトレイジさんも」

「アンジェリカでいい」

「分かったから剣に手をかけるのはやめようか。アンジェリカさんも17でしょ？ほら、結婚とかはまだ早いんじゃない……」

「わ、私のところに婿へ来ると、色々いい事尽くめだぞ!？」

「聞いちゃいないね！」

そう言うと、アンジェリカは皆が見る中、大胆にもアプローチを始

めた。

皆は相変わらずポカンとして2人のやり取りを見ていた。
ミーシエは怒りに震えていたが。

「ま、まずだな……そう、家は金持ちだぞ！」

「いきなり最悪な紹介だよ！」

「……仕方ないだろう。男子にアプローチなど初めてなのだから
「だろうね」

これは予想通りだった。

アンジェリカの容姿からして、言い寄ってくる男は多そうだが、それら全てを斬り伏せてきたに違いない。
しかし、ハルトにはある疑問が残る。

「……でも、どうして僕なの？」

「貴様……いや、お前と闘っている時、感じたんだ。『こいつしかない』とな。一目惚れってやつだろう」

「一目惚れって……」

「言っただろう？人の本質は闘いの中で見えてくるものだ」と

「いや、言っただけど……えっと、ごめんなさい」

「……おイトリシア、私は今フられたのか？」

「え、え？お、おそらく……」

「何故だ！私の何が不満なのだ！」

アンジェリカは叫ぶ。

驚く事に、目には涙が溜められていた。

ハルトは、慌てて取り繕おうと言葉を探す。

「い、いや、別にアンジェリカさんが悪いんじゃないだよ！でもほら、僕達って会ったばかりだし……だから、その」

「……なるほど、つまりこういえばいいのか」

「え？」

「……お、お友達から始めましょう」

抜群の破壊力だった。

アンジェリカのその言動に思わずハルトは

「こ、こちらこそ……い、いや！友達としてだからね！とりあえず婿云々は抜きで」

「むう……分かった。旅が終わった後にでも、カーロスへ出向いて口説くとするか」

「は、はは」

「……………」

その時、ハルトはこれまでにない殺気を隣りから感じた。見れば、ミーシェがこれまで見た事のない目で睨んでいた。

「……………えっと、マテリア、さん？」

「さあ、早速出発しましょうか」

「え？でもヘイジ殿は今起きたばかりで」

「行くわよ？」

「……は、はい」

実際、トリシアの施した『治』のおかげで、ハルトの体には傷どころか痛みすら残っていなかった。

が、今日目を覚ました怪我人をいきなり旅に連れて行くというのは、いくらなんでも横暴である。

しかし、裏を返せばミーシエはそれほど怒っているという事だ。

ハルトはミーシエの怒りの理由が分からず必死に考えるが、鈍感な彼がその理由に気付く事はなかった。

30分後、一行は準備を終え、ストルトの入り口に集まっていた。ピリンクもトリシアの『治』によってすっかり動けるようになったらしく、パラソスと共にやって来る。

ミーシエはまだ怒りが収まっていないらしく、ハルトと目が合つと不機嫌そうにそっぽを向いた。

「あとで謝った方がいいですよ」とパラソスに耳打ちされる。

バラドーとトリシアも『超光』の面々に挨拶を済ませて来たらしい。トリシアは寂しさからか涙さえ流していた。時刻は12時に差し掛かる。

ニューゼルには日暮れ頃に到着するだろうとパラソスが言った。一同は進路を南に取り、ストルトを出ようとす。だが

「待て」

と、アンジェリカが引き止めた。

「?どうしたの?」

「すまない、少し気になった事があったな。マテリア。貴様は確か、キヤリオスで襲撃された人々の死因が、切断や刺殺によるものだと言っていたな?」

「ええ、それが?」

「そして、その致命傷となった傷口はどれも焼かれていたと」

「……そうよ」

「血の臭いさえししないと、よほどの熱で焼き切られたのだからな。襲撃者の腕は大したものだ」

「……何が言いたいのか?」

「貴様も薄々気付いているのだろうか?少なくとも、私はそのような芸当の出来る魔術師はほとんど知らない」

「……」

「まあ、まだ決まった訳ではないので大きい事は言えんがな。まあ、そいつ等にも確証が持てるようになったら話してやれ」

「……分かった。じゃあ、ケツアルコアトルは任せたわよ」

「ああ。私の部下も頼む」

そう言うと、2人は片手でハイタッチを交わす。

「そうそう」とアンジェリカは意地悪そうに微笑むと、ミーシエにしか聞こえないような声で

「別にハルトは悪くないんだ、許してやれ。あと、いずれ私が婿としてもらうが、それまではハンデとしておいてやる。精々頑張れ」

「ッ！？わ、私は別に！」

「じゃあな。船旅は大変だろうから、あまり潮風に当たらないように気をつける」

そう言うと、アンジェリカはストルトの宿へと戻っていった。

ミーシエの顔が妙に赤かったのが気にかかり、ハルトは恐る恐る声をかける。

「えっと……大丈夫？」

「……はい……先ほどは失礼な態度を取ってしまい、すみませんでした」

「えっ！？あ、いや、別に」

いきなり謝られ、ハルトは思わず困惑する。

益々、ミーシエとアンジェリカの会話の内容が気になった。

そして、今度こそ6人は南へと出発する。

しばらく寝込んでいてからか、ピリンクは張り切っていた。

「さあ、長旅になりますよ！」

「そう思うならそんなに張り切んなよ、バテるぞ？」

「バラドーの言う通りだ。近場とは言え油断しないようにな」

「そ、そうです、よ？私の『治』にも限度がありますので……」

「そんなに気張らなくても大丈夫よ。楽にいきましょう、ランゼスさん」

「……なんか、予想以上に皆の順応力が高いんだけど」

ハルトの言葉を他所に、和気藹々とした雰囲気の中、一行はニューゼルへと歩を進める。

だが、ニューゼルで彼等を待っていたのは、これから起きる大きな
、、事変、の発端となる事件だった。

第8話 乙女アンジェリカの激白（後書き）

という事で、ストルト編完結です！

アンジェリカの告白ならぬ激白と決意と、新たな仲間の加入を軸にして書いてみました。

ストルト編だけで気が付けば5話も……メインより長くなってしまいましたorz

バラドールとトリシアにも活躍の場をあげたいです。

多分あると思いますがw

今回はついにニューゼルから船に乗り込みます。

そこで彼等を待つものとは…。

といった感じにする予定です。

評価・感想・指摘等頂ければ幸いです。

あと、質問も頂ければお答えします。

第9話 淑女トリシアの憂鬱（前書き）

今回は久しぶりにあの人達&新キャラの登場ですが、説明回となります。

第9話 淑女トリシアの憂鬱

ハルト達がストルトを出発して数時間後。
日も傾き始め、太陽が赤く染まっっていく。
そして、ようやく港町ニューゼルが見えてきた。

「お、予想より早く見えてきましたね」

「そうね。このペースだと、ギリギリ今日の便にも乗れそう」

「……船っていいですね。気持ちいいし」

「アツシも海は好きだぜ。自分の小ささが馬鹿らしくなる」

「……ありきたりだな。その通りだとは思うが」

「海……か。そういえば久しぶりだな。5年振りくらいか」

「私は結構見慣れていますが、大抵は任務で船を利用するくらいですからね。その内プライベートで行きたいものですよ」

ミーシエは苦笑してみせる。

皆で行きたい、ハルトはそう思った。

ニューゼルに着いた一行は宿にも行かず、波止場へ向かう。
何とか最終便に間に合い、そのまま船へと乗り込んだ。
アンジェリカのくれた乗船許可証は、そこそこ大きな客船のもので、
他の乗客も多かった。

「無事に船には乗れたけど、王都までは3日ほどかかるわ。各自、
それまでは自由行動という事で」

『異議なし』

「それでは部屋の鍵を配ります。2人で1部屋だけど問題ないわね
？」

『異議なし』

「そう。じゃあ部屋割りには、パラソスとピリンク、私とランゼスさ
ん、ヘイジさんとバラドーさんで」

「異議なし！」

「異議あり！」

ハルトとバラドーの声が綺麗に重なる。

「が、自分だけ我が侘を言うのも心苦しくハルトは「何でもない」と
手を下げる。」

「じゃあ、解散。あまり羽目を外し過ぎないようにね。特にピリン
クとパラソス。下の方には修練場もあるから、そこを利用するよう
に」

「うへえ……………」

「……………分かりました」

2人は嫌々というように頷く。

ハルトはそそくさと甲板に向かう。

が、予想通りと言っべきか、バラドーが目の前に回ると

「アニキ！稽古つけてください！」

傍から見ればどう考えてもハルトがバラドーに言っような言葉と共に、バラドーは深々と頭を下げる。

ハルトは溜め息を吐くと

「……分かったよ。修練場でいいかな」

「あ、ありがとうございます！」

嬉々とするバラドーと共にハルトは修練場に向かった。

トリシアは甲板で海を眺めていた。船に乗れば、甲板に出て潮風を浴びるのが彼女の楽しみだ。が、トリシアの顔色は優れない。ミーシエ達とうまくやって行けるのかが不安で仕方ないのである。ニューゼルへの道中、ミーシエはトリシアに何度も言葉をくれた。しかし、トリシアは何一つ言葉を返す事が出来なかった。言葉をくれたのは嬉しかったのだが、何と答えればいいのか分からなかったのだ。何である時……と自己嫌悪に陥る。すると

「あ、いたいた」

後ろから声をかけられる。振り返ると、そこにはミーシエがいた。

「探したわよ。部屋にも居ないんだもの」

「え……あ……」

「隣りいい？」

「あ……は、はい」

トリシアは、ようやくミーシエの言葉に返事を返す。ミーシエはホットしたように

「……よかった」

「え？」

「私、ランゼスさんに嫌われてるのかと思ってたからさ」「
「そ、そんな事、ないです！」

トリシアの大声に思わずたじろぐミーシエ。
トリシアは我に帰ると

「す、すみません……」

「あ、いや、別に怒ってないんだけどね」

「……マテリア様が声をかけてくれて、私、すごく嬉しかったんです。でも、何て答えればいいか分からなくて……」

「……じゃあ、まずは呼び方から変えないとね」

「え？」

「ミーシエでいいわよ。私もトリシアさんって呼ぶから」

「……あ、ありがとうございます……ミミミ、ミーシエ……さん」

「ミーシエで言いつてば」とミーシエが笑う。
その時だった。

「あー!!」

「……どうしたの? そんな大声出して」

と、2人の後方から声が響く。
ミーシエは何事かと振り返る。
そこには

「ッ！アンタは……！」

「え、え？」

ハルト達は第一修練場へやって来た。

中は意外に広かったが、利用している者は1人もいない。

「うーん。1人ぐらい居て欲しかったんだけどな……まあ、しょうがないか」

「よろしく願います！」

バラドローは再び頭を下げる。

「そうされると何か照れ臭いな……よし、じゃあ、始めようか。どこからでもかかって来ていいよ。あ、武器は使ってもいいからね」「では、遠慮なく！」

そう言うとバラドーは、背中に担いでいた大槌を持つと、ハルトに向かつて行くと、そのまま大槌を振り下ろす。

ハルトはそれを緩慢な動作でかわすと、バラドーの腕を掴み、そのままぶん投げる。

それは柔道や合気道などではなく、まさに『ぶん投げた』と言うに相応しい光景だった。

バラドーは地面に叩きつけられ、短く悲鳴をもらす。背中をさするバラドーに、ハルトは言った。

「バラドーさん、何で今投げられたか分かる？」

「え？そりゃあアニキの怪力で」

「違うよ。確かに腕力はそこそこいるけど、今はバラドーさんの力をそのまま利用しただけさ」

「と、言うത്？」

「確かに、バラドーさんの大槌に当たればひとたまりのないだろうね。でも、一撃が強力な分、避けたら隙だらけなんだ。避けてしまえば、あとはバラドーさんが突っ込んでくるだけだから、その力に合わせて投げる事で、威力も倍増！ってわけさ」

「な、なるほど。盲点でした……」

バラドーは納得し、腕を組みながら考える。

見た目より呑み込みは早いようだ。

「じゃあ、次は他の誰かとやってもらいたいんだけど……ちょっと、隣の修練場を見て来ようか」

「オス！」

ハルト達は隣りの第二修練場へ向かう。
灯りは点いており、物音も聞こえるので誰かいるのだろう。
2人は扉を開け、中に入る。
すると、中には1人の男の姿があった。

「すみません、少し手合わせをお願い……え？」
「手合わせ？……悪いが、俺は1人で……ん？」

ハルトはその男に見覚えがあった。
男もまたハルトに見覚えがあった。

やがて、両者が同時に相手の名を口にする。

「……ハルト・ヘイジ、だったか」
「……デイルイズ・ゼグラード、だよな？」

2人は睨み合う。
事情を知らないバラードは何事かと目を白黒させる。
両者の間に一触即発の雰囲気漂う。
が、デイルイズはミーシエから受けた傷がまだ完治していないらしく、「チツ」と舌を打つと

「……何故お前がこんなところに居る？」

「王都に向かう予定だったんだけど、君のお仲間によられた連れの傷が酷くてさ。コルザ山脈も行けないみたいだし、海路しかなくてさ」

「なるほど……丁度いい、か。少し話がある……ここではなんだ、甲板でいいか？」

「……いきなり不意打ちって事はないよね？」

「この体でお前に勝てると思うほど自惚れていないさ」

2人は上に上がっていく。

すっかり取り残されたバラドーは慌てて後を追う。

ハルト達3人が甲板に戻ると、ミーシエが2人の男女と揉めていた。1人はティナ・フェイトス。デイルイズと共にキヤリオスでハルト達を襲撃してきた『魔人』だ。もう1人は見覚えのない少年だった。

「だ・か・らー！アタシ達は別に何も企んでなんかいないんだって

！」

「ええ、本当なんですよお嬢さん、信じてください」

「信用できるわけじゃないでしょう？可愛い顔して私の部下を傷つけた貴女の言葉なんか……！」

「……ティナちゃん、それは信用されないのも無理ないよ」

「うっ……それは……ゴメン。でも！アタシの言ってる事は本当なんだって！アタシ達は逃げてきただけで……！」

「……何やってんだ、ティナ」

デイライズが声をかけると、ティナは目を輝かせる。

「デイライズ！……あれ？そっちのお兄ちゃんは……」

「ああ……話があったんだが、この人数だと目立つな……お前らの部屋でいいか？」

「……どういう事ですか、ヘイジさん？」

「いや、どうやら彼らにも事情があるみたいでさ……話だけでも聞いて上げようよ」

「……」

ミーシエは渋々頷くと、トリシアと共に自室へ戻る。

事情を聞いたパラソスとピリンクも話に加わる。
部屋は中々広かったのだが、さすがに9人も入れれば狭くなった。

「ああ、そう言えば紹介が遅れたな。こいつはザグロ・ペテイス。
俺達の仲間、『魔人』だ」

「えっと、ザグロです。よろしくお願いします」

ザグロはペコリと頭を下げる。

そして、ハルトは早速本題に入る。

「……………で、話の前に聞こうか。えっと……………」

「……………好きに呼べ」

「じゃあ、ディライズ達はどうしてこの船に？」

「お前達と戦り合った後、取り敢えず俺の傷を治療する為に近くの
町へ行った。ザグロともそこで合流したんだ。それで昨日、依頼人
がご丁寧にもその町に来てな。依頼金の受け渡しかと思ってたんだ
が……………」

「だが？」

「奴ら、裏で『貴族院』と繋がっていやがったんだ。数十人の部隊
連れて俺達を……………連れ戻し……………に来たのさ」

「……………また『貴族院』か。それで？」

「ティナとザグロのおかげで何とか町から脱出、あとは俺達のボスから受け取っていた乗船券でこの船に乗ったという訳だ」

「……事情は大体分かったよ。それで1つ聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

「君達の依頼人って？」

「……話とはまさにその事だ」

「という事は……その依頼人がキャリオスを？」

「ああ。そいつが1人で殺った」

その返答を聞いたミーシエは、その依頼人が誰かを悟った。

たった1人でそんな事を出来る人物を、ミーシエは1人だけ知っている。

「俺達に依頼を頼んだのは、ジバルド・ベイグバン……『守六光』
第二席だ」

「なっ!？」

「……………」

ミーシエは何も言わなかった。

「それで、おそらく俺達がこの船に乗っている事はとっくに割れているはずだ。攻めてくるのも時間の問題だろう……お前達には、俺達と共同戦線を張ってもらいたい」

「……私達は軍人よ？ 犯罪者である貴方達の頼みを聞き入れる訳な

いでしょう?。」

「だろつな。もちろん、それなりの代償は払う」

そう言うと、デイライズは懐からスクラップ帳を取り出す。

「この2年間、『貴族院』の汚職をまとめた代物だ。どう使うかはお前達に任せる」

「デイ、デイライズ!それはアタシ達3人の……!」

「分かつてる。だが、俺達でこの場を切り抜けるのは難しい。こんな物で命が助かるのなら安いもんだ」

「……悔しいけど、その通りだね。お姉ちゃん達が居てくれれば心強いし」

「……分かりました。あなたがそこまで言うのなら僕は何も言いません」

「すまないな、ティナ、ザグロ」

「……どうする?マテリアさん」

「……分かったわ。その話、引き受ける」

ハルトは少し驚く。

ミーシエがこんな事を引き受けるタイプには見えなかったからだ。

ミーシエも、数分前なら断っていただろう。

だが『貴族院』が、ジバルド・ベイグハンが関わっているのなら話は別だ。

ミーシエは『貴族院』に立ち向かう決意をした。

その時だった。

甲板の方から人々のざわめき声が上がる

「……何かあったのかな？」

「行ってみましょう。ピリンクとパラソスはここにいて。ディライズの護衛をお願い」

甲板へ繋がる廊下を進む中、トリシアはミーシェに話しかける。

「あ、あの」

「……どうしたの？」

「え、えっと……さっきの話、私にはよく分からなかったけど……何か、国が関わるような大事だっというのは分かりました」

「……」

「だから、その、えっと」

トリシアは言葉に詰まる。

やがて、意を決すると

「つ、辛かったら、そ、相談してください！……その、私じゃ頼りないかもしれませんが……」

口下手なトリシアがここまでストレートに言う事に驚くミーシェ。
やがて彼女は表情を緩め

「……ありがとう。頼りにしてるわね」
「は、はい！」

そんな2人の会話を聞いた一行は思わず笑ってしまう。
6人は甲板へと向かった。

甲板に出ると、既に船首に人が集まっていた。
何事かと思ったミーシェ達は、人混みを掻き分け船首に出る。
そこに居たのは1人の少女だった。
が、船首の上ではない。

少女は海の上に立っていた。

ミーシェは他に言葉を探すが、立っているとしか言い様がなかった。
船が進むスピードに合わせて少女も動いている。
すると、少女がこちらに気付き、ミーシェと目が合った。

その時、少女は外見に見合わぬ邪悪な笑みを浮かべた。

突然、少女の体が光り出したかと思うと、その姿を変える。そこにいたのは、大きなハーブを持った美しい女性だった。その顔には先ほどの少女のものである。しかし、その足は人間のものではなく、代わりに魚のヒレのようなものが生えていた。

その姿はまるで人魚の様だった。

全く状況の掴めていないミーシェ達を嘲笑うかのように少女はハーブを弾き鳴らす。

そして、その綺麗な声で歌い出した。

すると、さっきまで快晴だった空が、急に曇り始めた。

それが何を意味するのか。

この後、一行は嫌と言うほど知る事になる。

第9話 淑女トリシアの憂鬱（後書き）

という事で、『魔人』との再会とキャリアオス襲撃の真実を軸にして書いてみました。

新キャラとしてザグロ君を投入しましたが、ほとんど空気でしたw
まあ、彼には後にそこそこの重要な役回りが与えられるのでその時に活躍してもらいたいです。

最後に登場した少女は何だったのか、物知りな方はピンと来られた
かもしれません。

では、次回は（多分）戦闘回です。

7話よりはうまく書きたいものです。

評価・感想・指摘等もらえると嬉しいです。

質問ももらえればお答えします。

第10話 海霊セイレーンの呪歌（前書き）

今回は前半が説明パート、後半が戦闘パートとなっています。

第10話 海霊セイレーンの呪歌

海に立つ少女は、ハーブを弾きながら歌い続ける。
それに続く様に、空を雲が覆っていく。

「……あの子は『魔人』?」

「……違う、と思う。あんな子、見た事ないもん」

すると、ザグロが口を開く。

「……あんな『魔人』は見た事ありませんが、あの姿には覚えがありません」

「?」

「もし、あれが僕の想像するものなら、あれは『魔人』でも魔物でもない」

「……じゃあ何だって言うの?」

「……、精霊……をご存知ですか?」

「えつと……人魔戦争の影響で絶滅したっていう種族?」

「ええ。戦闘能力は魔物を超え、その知能は人間をも凌駕する、まさに最強の種族と言っても過言ではないでしょう」

「確か、周りの魔力に存在が大きく影響されるから、人魔戦争で起きる魔力の消耗に耐え切れなくて滅んだんだよね?」

「はい。よくご存知ですね?」

「ああ、知り合いに精霊マニアがいてね。よく話を聞かされたもん

さ……それで、あれは精霊だって言うの？」

「それはまだ分かりませんが……あの風貌にハープ、僕が見た文献に記されていたセイレーンの特徴と一致します」

「……もしあれが『貴族院』の差し金なら、その可能性もあり得るわね」

すると、急に雨が降り出した。

乗客達は慌てて船内へと戻っていく。

さっきまでは晴天だったのに、突然のこの雨はいくらなんでも自然過ぎる。

ミーシエは嫌な予感がした。

「……ねえ。参考までに聞くけど、そのセイレーンって、どんな精霊なの？」

「……一説によると、船に乗る男を歌声で誘惑し、その船を沈めてしまうとか」

ならば、この突然の雨はあの少女とは関係無いのだろうか。

不安を拭いきれないミーシエ。

段々と雨足が激しくなり、雷まで鳴り出す。

一行も船内へと戻って行った。

ミーシエ達は自室に戻ると、3人に甲板での出来事を話す。

「……精霊に酷似した、何か……か……確かにこの雨は不自然だな」

「で、でも、その、セイレーンというのは、こ、こついった効果を持ってないんですよね？」

「ええ、私も聞いた事がない」

この時、ミーシエはある可能性に辿りつく。

「……ねえ」

「はい？」

「もし、あれが『貴族院』による刺客だとしたら……」

その時、ズズズと奇妙な音が響いたかと思うと、船内が小さく揺れる。

「おつとつと……」

「……甲板に行ってみましょう」

「え、でも外は」

「嫌な予感がするんです……」
「……分かった。行ってみよう」
「じゃあ、ヘイジさんと『魔人』の2人は着いて来て。残りはここで待っててね」
「俺もアニキと一緒します！」
「……分かった。バラドーさんも来て。トリシアさんはそこについてね」
「は、はい」
「隊長、お気をつけて」

ミーシエは頷くと、4人を連れ甲板へと向かう。

酷くなる雨の中、甲板へ行くと、そこには異様な光景が広がっていた。

船の前方にいくつもの水柱が湧き上がっているのだ。

荒れ狂う海の中、あの少女の姿はあった。

雨音で聞こえはしないが、おそらくまだ歌っているのだろう。

「……やはり、あの子が関係してるとしか思えないわね」

「でも、どうやって……」

「……こつは考えられない？」

そう言うと、ミーシエは仮説を語りだす。

「セイレーンって、歌声で船乗りの男を誘惑し、その船を沈ませる精霊、よね？」

「え？ええ」

「つまりセイレーンの魔法は『歌』って事になるのかしら？」

「……さあ。『歌』という魔法も聞いた事ありませんが……」

言いながらザグロはふと思いついたように

「なるほど、『互換』ですか」

「？ごかん？」

「そう。あの子は最初、普通の女の子の姿をしていたでしょう？つまり、『魔人』ではないけれど、『魔人』の技術を応用したものである事が分かるわ」

「じゃあ、魔物の代わりに精霊を？」

「おそらく。どうやって精霊を召還したのかは分からないけど……」

「でもさー、あれがセイレーンとかいう精霊だとしても、この現象とどう関係があるの？」

「そこで『互換』よ。セイレーンの魔法が『歌』だと仮定すれば全て説明がつく」
「？」

「つまり、人間と精霊を合成する段階で、『歌』の効果を改竄かいざんしたのよ。……男を誘惑する歌……から……船に災いをもたらす歌……とか、そんな感じの効果にね」

「……そんな事が出来るの？」

「それが出来るんですよ、ヘイジさん。例えば『水』だと、自分で水を生成する魔術師もいれば、川や湖などの水を操る魔術師もいます……まあ『守六光』にはどちらも出来る魔術師がいるんですが……。それで、『互換』というのは『水』のように複数の効果を持つ魔法の効果を入れ替えられるんですよ。技術都市ベリオスで生まれた技術で、大金もかかるのであまり流通はしていませんが」

「……そうか。『魔人』が生まれたのもベリオスってところだったよね」

「はい……まあ、あくまで仮説ですが、用心に越した事はありません」

「……よく分からねえが、つまりあの海に立ってる化物をぶっ飛ばせばいいんだな？」

「そういう事よ」

そう言うとミーシエは、海に立つ少女へと手を向け『衝』を放つ。それはセイレーンに直撃し、歌うのやめ、呻き声を上げる。

「……相変わらず容赦ないね、お姉ちゃん」

「先手必勝、戦いにおいて最も重要な事の1つよ」

「いや、思いつきり後手に回ってるよね」

そうこう言っている内に、再び少女が立ち（？）上がる。
すると、満面の笑みを浮かべ

「うふふ、あなた、中々やるわね。私が精霊って気付いたの？」

「……喋れるのね」

「当たり前でしょ？精霊だもの」

その言い方に、ミーシエは違和感を感じた。

「……まるで人間じゃない様な物言いね」

「あはは！当たり前じゃない！あなた達みたいな下等な人間と一緒にしないでくれる？」

「……精霊と合成されたキメラもどきの分際で、よくそんな事が言えるわね」

ミーシエは挑発し、相手の出方を伺う。

が、少女はきよんとすると、やがて納得したかのように手を叩く。

「ああ、なるほど。あなた、勘違いしてるのね」

「……………」

「私は精霊と合成された人間じゃない……そうね、人間と合成された精霊と言ったところでしょうか？」

「……人間と……合成された？」

「正確には……人間の死体に憑依した……というのが正しいわね」

「……つまり、貴女は自分が精霊だとも言っの？」

「だから最初からそう言ってるじゃない。私は精霊、海霊セイレーン」

どうも2人の話が食い違う。

ミーシエは考える。

どうやらこの少女は自身そのものがセイレーンだと言っているらしい。

「……仮にそうだとしても、精霊は10年前絶滅した筈でしょう？」

「……ああ、なるほど。そこから知らなかった訳ね。いいわ、説明してあげる」

少女……セイレーンは楽しそうにクスクスと笑う。

「10年前の人魔戦争。あれが全ての始まりだった。戦場で大量の魔力が消耗され、私達は存在が維持出来なくなったわ。人間も魔物のおかげでね。まあ、所詮はどちらも下等生物って事ね」

「そして、精霊達の体は消滅した。だけど、私の様な一部の上級精霊は、魂だけ残す事に成功したの」

「……魂を？」

「そう。ご存知の通り、魂は魔力を生成する、言わば動力炉ね。私達精霊は魔力によって存在を左右される分、魂がより重要視されるのよ……私達は9年もの間、魂のまま浮遊していた。でも去年、『貴族院』の連中に協力する事を条件に、新たな体を手に入れたってわけ。まあ、人間の体っていうのが気に食わないけどね」

「……それで、貴女は『貴族院』に何を頼まれたの？」

「デライズ・ゼグラード、ティナ・フェイトス、ザグロ・ペティスの3人の捕縛、もしくは抹殺。あとは痕跡の消去よ」

「痕跡の消去……まさか」

「この船を沈めろ、って事」

「……させると思う？」

「まあ、簡単にはいかないかもね」

そう言うと、セイレーンは再び歌い出す。

ミーシエがそれを許す筈もなく、瞬時に『衝』を放つ。

が、セイレーンはそれをかわし、歌い続け、歌い終わる。

その時、海から船が上がっていく無数の影が見えた。

そして、その影はミーシエ達の前に姿を現す。

それは無数の骸骨達だった。

骸骨は武器を持っていたり、魔物の形をしていたりと、形は様々である。

「……これは」

「うふふ、驚いた？私の能力はあなたの言う通り『歌』。効果は、

「海の災いを自在に操る……よ。その辺は少し予想と違ったわね」

「……予想より厄介になっただけじゃない」

「あはは、そうね。ちなみに、この屍達は人魔戦争における戦死者よ、魔物もいるけど。この辺で大規模な海戦があったらしいから、その犠牲者達でしょうね」

「……死者を冒流するつもり？」

「下等種族が、死にながらも私の役に立てるなんて光栄じゃない」

この言葉に、ミーシエの中の……何か……が切れた。

それが堪忍袋の緒だとセイレーンが気付くのに長くはかからなかった。

瞬間、ミーシエの『衝』が屍達に放たれる。

骨が砕け、再び海の藻屑となる屍達。

ミーシエは静かに「ごめんね」と呟く。

「……中々やるじゃない。だけど、まだ屍達は残っていてよ？」

その間にも、海から屍が沸き上がる。

「……じゃあ、全部壊した後」

「？」

「貴女の顔をぶん殴る。『衝』で」

そう言うと、ミーシエは『衝』を連発させ屍を屠っていく。

ハルト達もそれぞれが戦いを始め、次々と屍をなぎ倒す。

「ハアツ！」

ザグロが威勢よく声を上げると、彼の両腕が茶色く変色し、石の様に形を歪める。

「……ザグロ君って、何の『魔人』なの？」

「ゴーレムですよ、魔法は『岩』です。元々は岩のように硬くなるだけだったんですが……『魔人』になってからは本物の岩より硬くなってしまいました」

ザグロは苦笑してみせる。

そして、その腕で屍を攻撃する。

屍の骨は一瞬で粉々に砕け散った。

が、それでもセイレーンは余裕の態度を崩さず、悠々と歌い始める。

どうやら屍は『歌』の発動を邪魔させない為の足止めらしい。

「……ヘイジさん、ここを頼めますか？」

「いや、正直僕ってこんな1対多の戦いは向いてないんだけど……」

「お姉ちゃん、アイツはアタシに任せて！」

そう言うと、ティナは『魔人』である特性を利用し、グリフォンの翼を背中から展開させ、セイレーンへと飛んで行く。

セイレーンは驚きながらも歌い続ける。

ティナは剣を抜くと、そのままセイレーンに斬りかかった。

セイレーンはそれをかわし、『歌』により発生した水柱でティナに攻撃を仕掛ける。

ティナもそれをかわすと、セイレーンとの距離を取った。

「ちょっと！貴女大丈夫なの？」

「大丈夫だよ！それに、コイツと渡り合えるのはアタシしかないだろうし、ね！」

そう言うと、ティナは再びセイレーンに向かい飛んで行く。

「マテリアさん！今はこいつらを！」

「っ！分かってます！」

ハルト達は、無尽蔵に沸き上がる屍を相手に立ち回る。

振り続ける雨が、彼等の体力を奪っていった。

それからどれほどの時間が経っただろうか。

4人の体力は大分磨り減らされていた。

ハルトとバラドーもそうだが、魔力を使う分、他の2人の消耗は更に激しい。

セイレーンの『歌』による攻撃を受け続けたティナも、限界を迎えていた。

「くっ……」

「うふふ、もう終わり？まあ、この雨じゃその自慢の翼も、水を吸って重くなるだけだものねえ」

「……ハハ、調子に乗ってんじやなわよ、ババアが」

「……どうやら自分の立場が分かっていないようね。口の利き方から教えて上げるわ！」

そう言うと、セイレーンは『歌』を使う。

ティナは最後の力を振り絞り、詠唱を始める。

セイレーンが水柱を仕掛けるのと、ティナが詠唱を終えたのはほぼ同時だった。

「『破風太刀』！」

ミーシエに敗れた後、ティナは必殺『魔風太刀』を鍛え直した。そして、身につけたのがこの『破風太刀』だ。

『魔風太刀』より威力は劣るが、スピードはそれを遙かに上回る。その速度に対応出来なかったセイレーンは、その攻撃を直撃したが、力を使い果たしたティナに迫り来る水柱を避ける術はなく、そのまま水柱を受ける。

「カハッ」

そして、そのまま海に落下するティナ。

「ティナちゃん！」

「ティナ！」

ザグロとミーシェは叫ぶが、どうやっても間に合わない。

その時だった。

突然甲板に現れた人影が、屍の群れを蹴散らし、船首から海へと跳んだ。

その人影は、そのまま空中でティナを受け止める。

「……ティ、ライズ？」

「喋るな、舌噛むぞ」

ティライズはティナを抱えたまま海へ落下する。

降り続く雨のせいで、海は大分荒れていた。
いち早く事態に頭が追いついたハルトが叫ぶ。

「バラドーさん！浮き輪持ってきて！」

「でもアニキ！それじゃあゾンビ共の相手が！」

「少しくらいなら大丈夫さ！それより早く！2人が危ない」

「……分かりました！」

バラドーは甲板を脱出し、船内へと戻る。

そして、セイレーンがダメージから立ち直ると

「……やってくれたわね。殺してやる！」

セイレーンは『歌』を使い、デイライズとティナに狙いを定める。
しかし、攻撃が発動する事はなかった。

「……ふん、運がよかったわね」

そう言うと、セイレーンは元の少女の姿に戻る。

それと同時に、雨が止み、屍達はその場に崩れた。

「やっぱり、人間の体だと使える魔力の量に制限がかかるわね……
言っておくけど、これで終わりじゃないわよ？明日も来るわ。そし

て今度こそ……」

「殺してあげるから」という言葉を最後に、セイレーンは海へと消えた。

「お待たせしました！浮き輪を……あれ？」

突然消えた屍達に戸惑うバラドーを余所に、場には重い沈黙が流れる。

ミーシエは、船が王都に到着するまで3日はかかると言った。

つまり、倒さない限り、最低でもあと2日はあの化物と戦わなければならぬ。

それを考えるだけで、全員の心は重く沈んだ。

第10話 海霊セイレーンの呪歌（後書き）

ということ、精霊とその実力、人魔戦争の事を軸にして書いてみました。

何かタイトルで思いつきりネタバレな気もしますが、気のせいだと信じて疑いません（オイ

やはり自分の中ではデリライズさんが一番かっこいいキャラですw
次回からは戦闘がさらに激化します。

果たして、ハルト達に勝機はあるのか。

次回こそは投稿ペースを上げたいですw

評価・感想・指摘等もらえれば嬉しいです。

質問も、頂ければお答えします。

第11話 行商人ハビッツの協力（前書き）

サブタイトルで分かるかもしれませんが新キャラ登場です。

第11話 行商人ハピッツの協力

セイレーンが去ったその日の夜。

甲板で戦っていた六人は、トリシアから傷の治療を受けていた。

ハルト、バラドローは外傷が少なく、ミーシエとザグロも、魔力の消耗は激しいが大きな外傷もなかった。

だが、デイライズは怪我が治りきっていないにも関わらずの無理がたたり、傷が悪化し、ミーシエも魔力が空になった上に、傷も酷く、トリシアが全力で『治』を施していた。

しかし、『治』は大量に魔力を消費する為、そう連続で使い続けられるものではない。

やがてトリシアも魔力を使い切り、その場に座り込む。

慌ててミーシエが駆け寄った。

「トリシアさん！大丈夫？」

「……これで、二人は大丈夫かと……戦えるまでには、回復していませんが……」

「……十分よ。ありがとう、トリシアさん。ゆっくり休んでね」

トリシアは満足そうに微笑むと、自室へと戻っていった。

しかし、悪化ばかりする状況にザグロが呟く。

「……ティナちゃんとデイライズさん抜きであの化物と、ですか」
「……………」

それだけではない。

魔力というのは、必ずしも一日で回復するものではない。

使用量が多ければ多いほど、回復には時間が必要となるのだ。

それも、使い切ってしまったともなれば、魔力が全快するのに二日から三日はかかるだろう。

つまり、少なくとも明日、トリシアは多くの魔力を使う事が出来ないのだ。

この事態を前に、ミーシエは

「……目的地を変更、できる？」

「変更して……どこに？」

「この辺りで一番近い港のあるのは……… 学術都市シアンテですね」

「どのくらいかかる？」

「最低でも、明日の夕方頃でしょうね」

「……… だけど、あの女の子はこの船を沈めると言ってたよ？ 僕達が行っちゃったらこの船の人達も………」

「………」

ミーシエは再び考える。

どうやってもあと二日で何かしらの決着を着けなければ、この船は沈められてしまう。

しかし、ミーシエ達に二日も戦う程の余力は残っていない。

つまり、明日が勝負所なのだ。

「……とりあえず、迎撃態勢を整えるわよ。船員の人達にも協力してもらおうわ。何が起こったのかはもう分かっているのよね？」

「ええ。ホールは大騒ぎですよ」

「対応を急がなきゃね。ピリンクとパラソスは着いてきて。残り皆は明日に備えて鋭気を養うように」

そう言うと、ミーシエ達は船長室へと向かう。

船内のホールでは大騒ぎとなっていた。

その中にいた一人の青年、ハビッツ・セイゼルは後悔していた。

彼は異国の商品を扱う行商人で、隣国ザラハから商品を輸入し、王都へ帰るところだった。

「……やっちまったな」

彼には王都で待つ、歳の離れた妹がいる。

ただでさえ予定より一週間も帰国が遅れているというのに、こんな

船に乗ってしまふなんて……少しでも早く帰ろうと一番出航時刻が早い船の乗船券を買ったのが仇となった。海に立つ少女に、動く骸骨……どう考えても自分の領分ではない。

肩を落とす彼の目に入ったのは、奥の通路を進む、ジグライオス軍の甲冑を着た三人の兵士だった。

收拾しない事態に苛立ったハビッツは、一言文句を言ってやろうと、兵士達の後を追う。

が、無駄に広い船内の中のせいか、見失ってしまった。

周りを見回すと、『船長室』と書かれた部屋から話し声が聞こえる。ドアが半開きになっていたので、ハビッツはそこから中の様子を伺う。

すると、さっきの兵士達が船長らしき人物となにやら話していた。

「……つまり、あの化物はまた明日も来るんですか？」

「ええ、そうなります」

「……何と言つ事だ」

船長は頭を抱える。

「安心してください。私が……『守六光』が責任を持って事態の收拾を約束します」

ハビッツは驚く。

その兵士は、まだ年端もいかない少女だったからだ。

「……でも、今日は無理だったんですよね？」

「……ええ。しかし、今回は来る事が分かっているので、先手の打ち様はいくらでもあります……ですが、今日の戦闘で仲間が二名、負傷してしまったので、そちらの船員の方にも助力をお願い出来ますか？」

「もちろん構いませんが……魔法を使える者は一人も……」

そこまで聞いたハビッツは、さっきまでの自分を恥じた。

どう見ても自分より年下のその少女は、明日もあの化物と戦わなければならぬのだ。

そしてハビッツはある決意をすると、ドアを開け

「話は聞かせてもらいました」

「……貴方は？」

「俺はハビッツ・セイゼル。行商人をやってます。是非、協力させてください」

「……気持ちはありがたいですが、一般の方だと逆に足を引っ張られるので」

意外にストレートに言うんだなと思い、ハビッツは苦笑する。

「まあ、それはこれを見てからでも遅くないと思いますよ？」

ハビッツは行商人特有の口先で、相手の興味を煽る。そして、バッグの中から液体の入った小さな小瓶を取り出す。

「それは？」

「これはザラハで手に入れたもので、この液体をかけたものと魔力反応が同じものの機能を停止させる事が出来ます。効果範囲は半径10メートル程度です。」

「……なるほど。それを屍の残骸にかければ……」

「はい。範囲内にいれば術者の動きも封じられるかと」

「……すごいですね。それほどのものです、とても貴重だとは思いますが……売ってはもらえないでしょうか？」

確かにこの小瓶はとても貴重で高価なものだ。

だが、生きて帰れる可能性を上げられるのならば、背に腹は変えられない。

当然代価はもらうが。

「ええ。構いませんよ。銀貨五枚でどうです？」

ちなみに、銭貨百枚で銅貨一枚、銅貨十枚で銀貨一枚、銀貨十枚で金貨一枚である。

銀貨五枚もあれば、五ヶ月から半年は食べて行けるだろう。

しかし、他に代案も浮かばないミーシエは

「……分かりました。支払いは王都に戻ってからでいいですか？」

「ええ。俺の目的地も王都ですし、大丈夫ですよ」

「じゃあ使い方を説明しますね」と、ハビッツはミーシエ達を連れ、甲板へと戻る。

これがあれば勝てるかもしれない。

ミーシエは、ようやく見えた一筋の光に思いを馳せた。

しかし翌日、この認識は甘かったと思い知る事になる。

翌日、明朝からミーシエは甲板に立っていた。

セイレーンも、昨日魔力を使い切った上に、ティナの攻撃を受けている。

そう早くは仕掛けてこない筈だ。

そんなミーシエの背後から、様子が気になったハルトが声をかける。

「やあ、おはよう。朝からご苦労様」

ハルトは船内から持ってきたコーヒをミーシェに手渡す。

「ありがとう」

「どうぞ致しまして」

甲板の中央には、昨日の屍の残骸が置いてある。

よく見れば、甲板には他にもちらほらと骨が置いてあった。

おそらく、あの骨全てにハビッツという行商人からもらった小瓶が使われているのだろう。

ミーシェに聞くと、船の至る所に同じ物が散りばめられているらしい。

「……勝算は、あるかな？」

「……勝負に絶対はないわ。仮に屍を封じる事が出来たとしても、楽に勝てる相手ではないでしょうね」

「だよね……向こうもどう仕掛けて来るか分からない訳だし」

「しんどい戦いになりそうだね」とハルトは苦笑する。

すると、再び船内の中から甲板に出る人影があった。

「あ、おはようございます、マテリアさん」

それはハルトにとっては面識のない男で、ミーシェはその男を「セ

「イゼルさん」と呼んだ。

この公私の使い分け方には、本当に關心する。

「ヘイジさん、紹介します。こちらはハビッツ・セイゼルさん。例の小瓶を我々に提供してくださった行商人の方です」

「ハビッツです。今日はよろしくお願いしますね」

「あ、うん。こちらこそよろしく」

二人は握手を交わす。

やがてミーシエは尋ねる。

「こんな朝早くからどうしたんですか？」

「あー……ちょっとお話がありました……ここで待ってようと思っ
てたんですが、マテリアさんの方が早かったみたいで」

ははは、とハビッツは頭を掻く。

「まあ今日は激戦になるでしょうからね……それで、話というのは
？」

「……俺も、戦いに参加させて頂こうと思ひまして」

「駄目です」

即答だった。

「言ったとは思いますが、今日は厳しい戦いになると思われます。戦いの心得もないような人間を戦場に立たせる訳にはいきません」「……俺も隣国に行商に出る身です。自らの死くらい、覚悟しています」

「ならその覚悟を忘れず、これからも生きてください。わざわざ戦場に赴く必要はないでしょう?」

「……ならば仕方ありません」
「分かって頂けて幸いです」

「俺がいる事を了承してくれないなら、あの小瓶は返して頂きます。当然、代金はお返ししません。もう、少し使っているようですね」

「なっ!」

「お願いです。邪魔はしません、約束します。俺はただ……」

「貴女の役に立ちたい」という言葉は、ハビッツの胸中で続けられる。

ハビッツの揺るがなき態度にミーシェは

「……分かりました。ですが、絶対に無理はしないでください」
「……ありがとうございます!」

ハビッツは目を輝かせて喜ぶ。

しかし、彼が余韻に浸る暇はなかった。

突然、雲行きが怪しくなってきたのだ。
ミーシエは空を見上げると

「……来る。ヘイジさん！急いで皆を呼んできてください！セイゼ
ルさんは船長室に行つて報告を！」

「任せて！」

「わ、分かりました！」

二人はそれぞれ言われた事を果たす為に走る。
そして、想像通り雨が降り出したかと思うと、海の方こうから少女
が歩いてくる。

「……随分と早かったわね」

「うふふ、待ちきれなくてね」

そう言つと、少女は昨日と同じ様に光り出し、水を纏つた美しき姿
へと変貌する。

「最高に美しく、最低に惨たらしく殺してあげる」

そう言つと、セイレーンは『歌』を発動させる。
戦いの幕は、下ろされた・

ハルトは客室へと急ぐ。

まずはパラソスとピリンクを呼び、次に爆睡中だったバラードーを叩き起こす。

最後にデイライズとティナの様子を見ていたザグロに声を掛け、一緒にいたトリシアに二人の看病を頼む。

「ど、どうか、お気をつけて……」

トリシアの声に頷くと、ハルト達は急いで甲板へと向かった。

ハビッツは船長室へと向かう。

一人残したミーシェの事が気にかかる。

……無事でいてくれよ。

ハビッツはそう願ひ、荒々しく船長室の扉を開ける。

船員達はもう準備が出来ている様で、各々が武器を持っていた。

ハビッツは叫ぶ。

「敵襲です！迎撃の準備をお願いします！」

「も、もうか？何か早すぎやしないか？」

「おそらく、敵も意表を突いて来たのでしょう。急いでください！」

今はマテリアさんが一人で応戦なさってます！」

「わ、分かった。総員、配置に着け！もたもたするなよ！」

船長の声を受け、船員達は甲板へ向かう。

ハビッツも急いでその後を追った。

セイレーンは驚きを隠せなかった。
どれだけ『歌』で屍を出しても、船に上陸しようとするれば、突然糸が切れた様に落下していくのだ。

原因がまるで掴めない。

そうこう考えている内にも、ミーシエは攻撃を仕掛けてくる。

既に数発の『衝』を受けており、セイレーンは息を切らしていた。

「……何をしたの？」

「さあね。船から手を引くなら教えてもいいけど？」

「……ふざけんじゃないわよ！」

セイレーンは『歌』を発動させる。

屍が使えないのなら、他の手段を使えばいいだけの事だ。

ミーシエの『衝』を避け、海でも最も注意の必要となる災害の一つ、雷を甲板に落とす。

その雷は甲板に届く事なく、虚空で突然消失する。

しかし、その現象はセイレーンに……答え……を与える事となった。

「……あはは、なるほど。ようやく読めたわ、その船のカラクリ」

「……」
「多分、そこら中に転がってる骨に宿っている私の魔力を媒介に、それと同じ魔力反応を持つものの機能を停止させた、そんなところかしら？」

「……例えそうだとしても、貴女にそれを破る手段は無いでしょう」

「？」

「まあ、十年前なら無理だったかもしれないわね……でも、この体なら出来るのよ！」

そう言うと、セイレーンの体が再び光り出す。

やがて光の中から現れたのは、幾分か人間の姿に近づいたセイレーンだった。

「その船は、私の魔力を受け付けられないんでしょう？それなら、この体……の魔力を使うだけの事よ」

「なっ！そんな事、出来る筈が……！」

「まあ、普通の人間なら無理でしょうね。でも、この娘が持っている魔力量は、常人とは比べ物にならないの。これだけあれば、十分私の魔力と併合できる。つまり、さっきの私の魔力とはまったく別物になるのよ！」

歌い出すセイレーンを、ミーシエは攻撃するが、悉くそれをかわされてしまう。

そして、セイレーンは歌い終わると、その小さな少女の顔を醜く歪めてみせた。

突然唸り出す黒雲、その時

「マテリアさん！」

ハルトが皆を連れ、甲板へと飛び出す。

「来ちゃダメ！」反射的にそう叫ぶが、間に合う筈もなかった。

瞬間、眩い閃光と共に、巨大な雷が甲板を襲った。

第11話 行商人ハビッツの協力（後書き）

ということで、行商人ハビッツ君の登場と、セイレーンへの対策を軸にして書いてみました。

戦闘パートに2話使うなんて……次回でセイレーン戦は終了（予定）です。

評価・感想・指摘等頂けたら嬉しいです。
質問も頂ければお答えします。

第12話 魔術師漬しバラドーの本質(前書き)

海路編完結です。

第12話 魔術師潰しパラドーの本質

雷が甲板に落ちる数秒前、事態に気付いたのはピリンクとパラソスだった。

ピリンクは瞬時に「土」を発動させ、甲板を覆い、その「土」の下に入ったパラソスは、「火」でその土の壁を炙り、瞬時に硬化させる。

だが、その強化された土の壁も、落雷を一瞬遅らせる事しか出来ない。

その一瞬に、甲板へと走る一人の姿があった。

その人影は、ピリンクの腰の剣を抜き、甲板の中央に立ち、剣を天に掲げる。

避雷針の役割をする為だ。

ミーシエは手を伸ばすが、瞬間、轟音が鳴り響く。

落雷の余波で甲板の床が剥がれ、粉塵を舞った。

「……何故」

呟いたのはセイレーンだ。

彼女は驚愕していた。

セイレーンが落とした雷は、人体に落ちれば命はもちろん、死体が残るかどうかも怪しい。

それほどの超高温だった。

「なのに、何故お前は立っていられる！」

粉塵の中の人影は、雷を直撃したにも関わらず、悠々とその場に立っていた。

「何故立っていられるか？それこそが、アッシが『ウィザードブレイカー魔術師潰し』と呼ばれる所以ゆえんだからだ」

人影……バラドーは、ピリンクから抜き取った剣を捨て去る。

「あ、俺の剣！」

「ああ、悪いな。もう使い物にならなくてな」

バラドーの言う通り、二人の剣は、直接雷を受けた為、叩けば折れてしまいそうな炭となっていた。

それほどの雷をその身に受け、どうして無事でいられるのか。

「……どうして？お前は魔術師でもない筈……」

「それだ」

「は？」

「『アッシが魔法を使えない』。昨日の戦いでそう判断した時点で、お前にアッシのタネが見抜ける筈がない」

「……まさか」

「ああ。アツシの魔法は『吸』って言ってな。魔力を吸収してしま
う、魔術師にとって天敵の魔法だ」

「……なら、どうして昨日屍にそれを使わなかったの？」

「それが『吸』の難点でな。この能力は生物に対しては使えないん
だ。死んでるなら、と思って試してみたんだが、効かなくてな……
だが、これでようやくアツシもアニキの役に立てるってもんだ」

「……調子に乗らないでくれる？ならば昨日と同じ状況にすればい
いだけの事！」

再び『歌』を始めるセイレーン。

パラソスの追尾炎弾なら捉えられるだろうが、この雨では『火』は
すぐに消えてしまう。

すると、バラドールが槌を構える。

「……アニキ、アツシが吸収した魔力はどうなると思います？」

「え？」

そう言うと、突然、バラドールの槌が輝き出す。

そして、そのまま槌を振り抜いた。

その時、槌から多大な魔力がセイレーンに飛んで行く。

咄嗟の出来事だった為、セイレーンは避ける事が出来ず、それを直
撃し吹き飛ばされる。

「こつこついう事です」

「……つまり、吸収した魔力を放出できるの？」

「はい。これを会得するまで結構かかりましたが」

そう言うと、バラドールは苦笑する。
しかし

「……ふざけんじゃないわよ、下等種族があ！」

激昂したセイレーンは『歌』を発動させる。

その早さは先程までとは比べ物ならず、即座に『歌』を終えると、昨日の悪夢がミーシェ達を襲う。

「屍……!!」

その時、ようやくハビッツが船員達を連れ、甲板にやって来る。

「遅れてすいま……うわ、何だこれ!!」

「ハビッツさん!あの小瓶が攻略されました、船員の皆さんは応戦願います!」

ハビッツは自分の商品が役に立たなかったショックを受ける暇もなく、沸き上がる屍達に持参して来た『聖水式短剣』を構える。

その名の通り、刀身を聖水に浸したもので、ゾンビ系の魔物等に有効な得物だ。

これは護身用の武器だが、使った事がない為、まだちゃんと効くかは分からない。
ハビッツは短剣で屍の一体を斬りつける。
すると、屍は苦しそうにもがくと、その場にただの骨として崩れていった。

「や、やった！」

が、喜びも束の間、すぐに新たな屍がハビッツを襲う。
それを間に入ったハルトが防ぎ、裏拳で屍の骨を砕く。

「セイゼルさん！ボサつとしてたら死んじゃうよ！」

「は、はい」

皆がそれぞれに屍と戦う。

セイレーンは新たに『歌』を使い始める。

それは今までで最も長い『歌』で、ミーシエは嫌な予感がしたのだが、止める手立てはなかった。

そして、『歌』が発動し、海が震える。

「……………何だ？」

ハビッツは呟く。

が、すぐにこの振動の正体に気付く事になる。

水平線に、ソレが見えた。

船員達はすぐにソレが何であるか気付く。
やがて、ソレは船との距離を縮める。

ソレは、船を簡単に飲み込んでしまうであろう、巨大な津波だった。

「……シャレになんないよね、これ」

「それを言うなら、骸骨が襲ってくる時点でシャレになってませんけどね」

ザグロの軽口に構っている場合ではなかった。

その津波を見たミーシエは

「……あれは私が何とかします！皆、ここを頼める？」

「お願いします隊長！」

「ここは我々にお任せを」

パラソスは『火』が使えないながらも、ピリンクを手伝っていた。

「……ありがとうございます。ヘイジさん！今から詠唱を始めます！護衛を頼めますか？」

「分かった！」

そう言うと、ミーシエは詠唱を始める。

ハルトは彼女に近づく屍達を片っ端から砕いていく。
ミーシエが使おうとしていたのは『巨人の咆哮』。
デイライズ達と戦った時に使った技だ。

だが、威力はあの時の比ではない。

デイライズ達に使った時は、人に撃つ分、知らず内に手心を加えていた。

さらに、今回は片手ではなく、両手だ。

当然、威力も格段に増す。

そして、津波に対して手加減をする必要もない。

「『巨人の咆哮』！」

ミーシエはありったけの音量でその魔法の名を叫ぶ。

その一撃が津波に直撃したかと思うと、津波に大穴が開き、そのまま四散した。

セイレーンは信じられないと言う様に目を見開く。

ミーシエはその隙を見逃さず、すぐさま『衝』を放った。

セイレーンはそれを避けきれず、海の上に倒れこむ。

既にダメージを受け続けたセイレーンにとって、今の一撃は重いものだった。

しかし、それでも立ち上がる。

彼女を動かしているのは、任務などではなく、その精霊故の高き自尊心だ。

「負ける筈がない……ありえないのよ。人間如きの下等種族に、精

霊が負ける筈ないのよ!」

「……哀れね」

ミーシエは言った。

「種族の上下なんて意味があるの? そんなものに縛られる貴女は、これ以上もなく可哀相だわ」

「……見下すな。人間が私を見下すなああああああああ!」

セイレーンはハーブを荒々しく弾き鳴らし、『歌』を発動させる。

瞬間、雨が益々強くなつたかと思うと、風が吹き荒れ、雷まで鳴り始めた。

セイレーンが引き起こしたのは、船乗りの天敵、嵐だった。

しかし、それでもミーシエは動かない。

「……ザグロさん。あの精霊を倒せば、その『歌』の効果は消えるのよね?」

「ええ、おそらく」

「じゃあ、少し手伝ってくれる?」

そう言うと、ミーシエはある作戦の内容をザグロに伝える。

「……それはまた随分と無茶な……大丈夫なんですか?」

「ええ。そろそろ決着着けないといけないし」

「それに」とミーシエは続ける。

「有言実行、しないかね」

そう不適に笑ってみせた。

ザグロは「分かりました」と言うと、腹の辺りを魔物化させる。

「さあ、いつでも大丈夫ですよ」

「じゃあ……行くわよ！」

ミーシエは軽く跳ぶと、ザグロの腹を足場を使う。

そして、足の裏から『衝』を発動させ、砲弾のようなスピードでセイレーンに向かって……跳んだ……。

「ッー?」

あまりのスピードにセイレーンは対応出来ない。

ミーシエはそのままセイレーンとの距離を詰め、手に『衝』を纏わせる。

「言ったわよね……『衝』で殴るって」
「あ、あ……」

セイレーンは精霊として、人間として生きた中で、初めて人間に、
恐怖……した。

そして、ミーシエの渾身の拳がセイレーンの顔面に突き刺さる。

その瞬間、嵐は止み、屍達は音を立てて崩れ去った。

すっかり元の天候に戻った空。

ミーシエは船尾で海を眺めていた。

甲板は戦いでボロボロとなった為、しばらく使用禁止らしい。

セイレーンを倒したあの後、海に落ちたミーシエはすぐに引き上げ
られた。

まだ少し体が冷えるが、潮風に当たりたかったのだ。
すると

「マテリアさん！そこにいらしたんですか」

声をかけたのはハビッツだった。

「ハビッツさん。すみません……折角の商品を無駄にしまして」「いえ、俺の商品が役に立たなかっただけです……御代もいりませんよ」

「え、でも」

「いいんです。俺が納得出来ませんから」

ハビッツの笑顔に、ミーシエも微笑む。

「それにしても、凄かったですよマテリアさん！冷静な指揮に、圧倒的な実力……さすが『守六光』と言ったところでしょうか」「い、いえ、そんな事は……皆が頑張ってくれたおかげですよ」

ミーシエは少し照れながらそう答える。

「ハビッツさんは、これからどうするんですか？」

「予定通り王都に向かう予定ですよ。時間はかかりそうなので、シアンテで少し商売していこうと思えますが」

そう、船の損傷を直す為、船は次の乗船所である、学術都市シアン

テでしばらく停留する事になったのだ。

「マテリアさん達は？」

「私達も予定通り王都へ向かいますよ。ちょうどシアンテに用事も出来たところなので、寄っていいこうと思ってます」

ミーシエが言う用事とは、『魔人』達との話し合いだった。どうやら、シアンテにも彼等の仲間がいるらしい。

「そうですか。じゃあ、もう少しは一緒になりそうですね」

ハビッツは少し頬を染めながら笑う。

「……………じゃあ、私は戻りますね」

「あ、はい。それでは……………」

ハビッツは名残惜しそうに手を振った。

ミーシエはデイライズ達のいる船室に入る。

そこには『魔人』の三人とハルト、トリシアがいた。

どうやらトリシアが『治』でハルトとザグロを回復していたらしい。

ミーシエを見たデイライズは

「……………世話になったな。報酬を渡そう」

そう言うと、デイライズはスクラップ帳と小袋をミーシエに手渡す。

「この小袋は？」

「あれだけの目に合わせたんだ。そのスクラップ帳だけでは足りない」

「いらないわ。貴方達の旅費なんかでしょ。とっておきなさい」

「しかし」

「いらないわ」

ミーシエの断固とした態度にデイライズは顔をしかめ

「……………いつもこういうのか？」

「……………大体ね」

そう答えたハルトの背中を見えない様に抓っていると

「いたた……ちくしょう、パラソスの野郎……悪い、トリシア。治療頼めるか？」

入ってきたのはバラドーだった。

『吸』に興味を持ったパラソスが、バラドーに戦いを挑んだのだ。ちなみに、ハルトはパラソスに、ピリンクはバラドーにそれぞれ銅貨一枚を賭けていた。

どうやら、賭けはハルトの勝ちのようだ。

「あ、アニキ………すいません、お見苦しい所を」

「はは、パラソスさん、強かったでしょ？」

「え、ええ………初めて首領^{ボス}以外の魔術師に負けましたよ…… 『魔術師潰し』の名が泣きますよ………」

そう言うと、ティナが起き上がり

「おじちゃん、『魔術師潰し』なの？」

「え、いやおじちゃんではないが、一応そう呼ばれて」

「じゃあ勝負しよ！噂聞いて、戦ってみたかったんだ！」

セイレーン襲撃前ならば、バラドーはこれにに応じていただろう。

だが、バラドローは既にティナの……翼……を見ている。

「いや、ほら、傷だらけだし」

「はい、治療終わりましたよバラドローさん」

バラドローは泣きそうな顔でトリシアを見つめる。

「じゃあ行くこう！ 修練場って地下だよな？」

「ちよ、助け」

そう言っつて、ティナはバラドローを引きずって行く。

数分後、轟音と共にバラドローの悲痛な叫びが聞こえてきたが、ハルトはそれを無視せざるを得なかった。

話を戻す為、ミーシエはコホン、と咳払いを入れる。

「シアンテにいる『魔人』。その人が『魔人』について一番詳しいのね？」

「ああ。精霊についても何か知ってるかもしれん」

その『魔人』に会えば、セイレーンの事が分かるかもしれない。何故『貴族院』がそのような力を手に入れようとしたのか。そして、『守六光』であるジバルド・ベイグハンの……。

兄の真意を。

ミーシエは真相を求めて、シアンテへ向かう。
いよいよ、一行の旅も終わりに近付いていた。

第12話 魔術師漬しバラドーの本質（後書き）

ということ、セイレーン戦の決着と、一行のこれからについてを軸にして書いてみました。

バラドーさんによろやく見せ場をあげられましたw

そして最後にさらっとミーシェと『守六光』ジバルドの関係を晒してみたり。

あと、最後の方にも書きましたが、一章も大詰めを迎えています。温かい目で見えて頂ければ幸いです。

評価・感想・指摘等もらえれば嬉しいです。

質問ももらえればお答えします。

第13話 研究者ケイトの研究所（前書き）

今回少しいつもより長くなってしまいました。

第13話 研究者ケイトの研究所

セイレーンとの戦いが決着したその日の夕方。
船は学術都市シアンテに到着した。
その街を見たティナは歓声を上げる。

「すっごーい！なにあのでっかい時計！」

「シアンテ名物『夜の時計塔』だろう。俺も見るのは初めてだが、夜になると時計の数字が光り出す仕組みになっているらしい」

「へー！早く見たいね！……ね、ねえ、デイルイズ。もしよかったらアタシと二人で」

「ん、そういえばザグロ。お前、確かこの近くの村に用事があるんじゃないかったか？」

「ええ」

話の腰を折られ「むー」と唸るティナ。

ザグロは自分の荷物を持ち直すと

「では、急ぎの用事があるので、僕はここでお別れです」

「大丈夫？何ならピリンクかパラソスを護衛につけさせてもいいけど？」

「いえ、お気遣いなく。平和な町ですからね……実は、僕の故郷なんです」

ザグロは恥ずかしそうにポリポリと頬を掻く。

「……そう。じゃあ、気をつけてね」

「ええ、皆さんも。それではお元気で」

そう言うと、ザグロは街の出口に向かって行った。

やがてザグロの姿が見えなくなり、ミーシエはこれからの予定を皆に伝える。

「とりあえず、船の修復には2日ほどかかるらしいから、今日はゆっくり休みましょう。皆セイレーンとの戦いで疲れているだろうし、と言う事で、この街にいる『魔人』に会いに行くのは明日でいいかしら?」

「ああ、構わん」

「うん……アタシ、あの人苦手だしね」

「決まりね。じゃあピリンク。宿を取ってきてくれる?」

「了解です」

ピリンクが宿を取りに街へと赴く。

ハルトは何となく気になっていた疑問をディライズに尋ねた。

「……そういえば、この街にいる『魔人』ってどんな人?」

「元々はベリオスで『魔人』を研究していた一人だったんだが、色々好き勝手やり過ぎたせいで、処刑代わりに魔物と合成させられたんだ。まあ、研究者の奴らも、まさか合成が成功するとは思ってなかったようだがな」

「へ、へー」

どうやら、相当風変わりな人物らしい。

「それで、やっぱり強いの？」

「いや、戦闘能力は皆無だな。頭脳派の『魔人』と言った所だ」

「……頭はいいんだけどね。その分、ネジがぶっ飛んでるっていうか……」

「ぶっ飛んでるとは失礼だねー。そんな事言っちゃってると色々しちゃうよん？」

突然現れたその女は、場違いな白衣を纏い、口には煙草たばこを銜くわえていた。

女はティナと肩を組み「にひひ」と笑う。

ティナは引きつった笑みを浮かべ

「ケ、ケイト……ひ、久しぶりだね……ちなみに、色々って？」

「改造と解剖、どっちがお好み？」

「……珍しいな。お前が街に出てくるなんて」

「お、ディライズ。おっひさー」

女は手を振り、ティナはそそくさと女から離れる。

「……えっと、ひょっとしてこの人が？」

「ああ」

「ケイト・ウエイルスだよーん。ケイトでいいよー、ケイトつちでも可ー。それでデイライズ。この見るからに面白そうな御一行は？」

「……話せば長くなる。明日、お前の家で色々話したい事がある」

「おーけー。でも、デイライズ。君は今夜家に泊まらない？最近、家に引き籠りっぱなしなもんだからご無沙汰でさー」

その言葉に、デイライズを除く未成年三人組は顔を赤くする。

バラドーに至っては「どういう意味っすか？」とハルトに尋ねてる始末。

しかし、ティナは赤くなりながらも

「だ、ダメだよ！知ってるよ！そういうの、『ふじゅんいせーこーゆー』って言うんでしょ！」

「あはは、ティナちゃん難しい言葉知ってるねー。で、意味は？」

「え？そ、それは……お、お姉ちゃん」

ティナは涙目でミーシエを見る。

どうやら詳しい意味を知らない様だった。

だが、ミーシエとしても答え辛い質問で、顔を赤らめながら俯き何も言おうとしない。

その様子を見たケイトは

「あはは。相変わらずティナちゃんは弄り甲斐があるねー、ドS心が撥くすぐられるよん」

「……そのぐらいにしてやれ。あと、俺は今日は疲れているんでな。

パスだ」

「えー。ディライズのいけずー」

「ぶーぶー」とケイトは頬を膨らます。

すると、街の方からピリンクが戻ってきた。

どうやら宿の準備が出来たらしい。

「ただいま戻り……あれ、そちらの方は？」

「変人だ」

「変人だよ」

「綺麗にハモったね」

「なぬ。変人とは失礼な。私は歴れつきとした変態だよ！」

「自覚してるんだね」

「えっと……こちらはケイト・ウェイルスさん。私達が会いに行く予定だった『魔人』よ」

「それじゃあケイト。俺達は宿に行くから、家の片付けくらいはしておけよ」

「はいはい。テーブルぐらいは片しておくよん」

そう言うと、ケイトは街の中へと消えて行く。

「……何かこう、強烈な人だったね」

「すぐに慣れる」

「いや、多分アタシは一生慣れる事はないと思っよ」

「……私も、ちょっときついかも」

ケイトの登場に衝撃を受けながらも、一行は宿に向かった。

宿に着いたピリンクは、まず皆に謝罪の言葉を告げる。

252

「すみません。どうやらこの頃は利用客が増える時期らしく、三部屋しか借りられませんでした」

「……あれ？デジャヴな上に嫌な予感がするんだけど」

どうやらハルトの嫌な予感というのは高確率で当たるらしい。

「じゃあ、部屋割りは、ピリンクとパラソス、私とトリシアさんとティナ、ヘイジさんとバラドーさんとディライズで」

「異議なし！」

「異議あり！」

「……………」

ちなみに、バラドー、ハルト、デイライズの順である。
しかし、やはりデイライズさえ何も言わないのに、自分だけ我が侷を言う訳にもいかず、「何でもない」と手を下げる。
この状況もまたデジャヴだった。

「じゃあ、まずは食事ね。時間も丁度いいし、このまま食事でもいいかしら？」

『了解』

『魔人』を含め、初めて全員の声が重なった瞬間だった。

翌日、一行は宿屋の前に集合していた。
しかし、女性陣は皆眠たそつに目を擦っていた。

「……どうしたの？」

「……ちょっと色々ありまして」

ミーシェは決して多くを語ろうとしなかった。
やがて、全員がその場に揃い、一行はケイトの家に向かった。

ケイトの家の前に来たハルトの第一声は

「……普通だね」

「……まあ、思っていたよりは」

ケイトの家はハルト達の予想に反し、その辺の民家と大して変わった様子はない。
しかしティナは

「まあ、ケイトって外面はいいしね……本人の人柄がよく出てる家だよ」

と、意味深な言葉を漏らす。

少し気になりながらも、ミーシエは扉を叩く。
しばらくして、息を切らしたケイトが扉を開く。

「はあ……はあ……いらっしやい……」

「……お前、また下に居たのか？」

「またっていつか……こここのところは、毎日、だよん」

ケイトは少し息を整えると

「まあ、とにかく入って入ってー」

昨日と同じ様にどこか裏のありそうな笑みを浮かべ、一行を招き入れる。

家の中も、普通の民家とほとんど変わらない構造だった。

部屋の中央に地下へと続く階段がある事以外は。

いかにも何かありそうな階段に、ハルトの童心は撥られる。

「……何かテンション上がるよね、こっぴつこの」

「分かります」

「分かります」

「俺もですアニキ！」

「……少し癩だが、それには同意だ」

男性陣がそれに全面的に同意する理由が分からず、女性陣はただただ不思議がっていた。

「んじゃ、八名様ごあんなーい」

ケイトが地下への階段を下り始め、一行もその後続いた。

地下は予想以上に深く、数分ほど歩きようやく地下室らしき扉の前に辿りつく。

「ふっふっふー。これが私の仕事部屋。聞いて驚け見て笑え！これが天才少女ケイト様の地下研究所なりー！」

ケイトは高らかに叫びながら扉を開く。

「少女は無理あるんじゃない……。」とさりげなく呟いたティナの頬を抓りながら。

「すごい……。」

それがミーシエの抱いた感想だった。

地下室は予想以上に広く、少なくとも上の三倍以上の広さはあった。そして研究所の名に相応しく、部屋の中には様々な機器や薬品などが並べられている。

「……よくこんな大掛かりな施設を……。」

「まーねん。ここまで掘るのに『魔人』を総動員して半年かかったからねー」

「……ディライズ、一つ聞いていいかしら？」

「何だ？」

ミーシエは顔をしかめ、ディライズに向かう。

「……忘れていたなら言っておくけど、私は軍人、それも『守六光』よ？もし私が軍に密告したら……そうは考えなかったの？」

「……その時は俺に人を見る目が無かったっただけだ。ま、お前が俺の思っている通りの人間ならば、密告など万が一にもあり得ないかな」

「……舐められたもんね」

「舐めてはいないさ……ただ」

「ただ？」

「お前達のような軍人なら、信用するだけの価値はある……そう思っただけさ。我ながら血迷っているとしたか思えないがな」

デイライズは自嘲気味に笑う。

冷酷だと思っていたデイライズの意外な一面を見たミーシエは思わず面食らった。

当然、ミーシエは最初から密告する気など無い。

ただ、デイライズの、『魔人』の真意を確かめたかっただけだ。

何故か嘘かもしれないという疑惑は浮かんでこなかった。

これこそがデイライズの真意なのだと、不思議と納得出来た。その様子を見たティナは「んー」と唸り

「……これは手強いライバル……だよな」

と呟いていたが、ミーシエには何の事だか理解出来なかった。

ケイトは青筋を浮かべながら笑みを浮かべ

「本当はもっと色々は無駄話でも挟もうと思ってたんだけど不愉快だからさっさと本題に入っちゃおうね」

と言つが、彼女を不快にさせた理由もミーシエが知る事は無かった。

ケイトは突然真面目な顔になると

「んじゃ、まずは何故君達が一緒にいるか、それから聞かせてもらおうかねん」

デイルイズとティナが今までの経緯を話す。

キヤリオスで初めて顔を合わせた事、王都行き船で出会った事、そしてその船を突然襲撃してきた精霊、セイレーンの事。

全てを聞き終えたケイトは、これまでにないような真顔で、顎に手を当て考える。

「精霊、か……確かに、二年前のベリオスでもそんな話はあったよ。精霊が魂のみで生きてるって事は判明してたしね……なるほど、元から魔力量の多い人間に憑依、か……こんなぶっ飛んだ事考えるのは……やっぱ、ハイドマンのイカれ頭しかないだろうね」

「ハイドマンって……まさか、フレクト・ハイドマン博士？」

「お、よく知ってるねー、えっと、パラソル君だっけ？」

「パラソスだ。若くしてベリオス研究所の副所長を任される天才……そのハイドマン博士が……」

「天才、ねえ……私に言わせれば天災だけだね。ちなみに、魔物と人間の合成……『魔人計画』の発案者もハイドマンだよん」

どうやらパラソスはその人物を尊敬していたらしく、珍しくショックを受けていたようだった。

「……それで、ケイトさんは何か精霊について知ってる事ってない？」

「んー。何分専門外だからねー……あ！」

ケイトは思い出したように声を上げる。

「そう言えば研究所から逃げ出す時に、現在魂のみで生き残っている精霊のリスト持ち出してたよ！」

「……何故お前はそう大事な事を先に言わないんだ」

デイライズの言葉を無視し、ケイトはそのまま奥の本棚から一束の書類を取り出す。

ミーシエはそれを受け取り、食い入るように書類に目を通す。

そのリストには精霊の名前、特徴、使用する魔法などが記されていた。

精霊の生き残りの数はセイレーンを含め十五、その中には小さい頃誰もが聞かされるような御伽話に出てくるような精霊の名もあった。一通りリストに目を通したミーシエは

「……ケイトさん。もしよければこのリスト」

「うん、勿論差し上げちゃうよー」

思いの他あっさりと了承するケイトに拍子抜けするミーシエ。だがケイトは「ただし」と言葉を続ける。

「王都までの旅路、ディライズとティナちゃんの事、くれぐれもよろしくねん」

「……分かったわ。『守六光』の名に懸けて、この二人の身柄の保護は約束する」

「……ふん」

ケイトは優しい笑顔で「にひひ」笑い、煙草を口に銜えながらリストを手渡す。

「そんじゃ、追っ手が来ないとも限らないし、足が着く前に早くこの街から出て行った方がいいよん？」

「でもまだ船が」

「はっはっはー。それは昨夜天才の名に懸けて直しといたぜー。多分、そろそろ動く頃じゃないかな？まあ、セイレーンって奴は倒してるんだから、ミーシェちゃん達の顔が割れてる事はないだろうけど」

「……色々ありがとう」

「いいのいいの。私も久々に楽しかったしねー。今度は仕事抜きで遊びに来て頂戴な」

「ええ」

二人は軽く手を叩き合う。

そして、一行は地下室を後にする。

ケイトはそれを見送った後、地下室の扉に鍵をかけた。

「……いるんでしょー、そろそろ出てきたらー？」

そう言うと、本棚の前に細身の男が立っていた。
まるで最初からそこに居たかのように。

「……気配は完全に消していた筈だが」

「残念ながら私はエルフの『魔人』でねー。姿が見えずとも、第六感ってやつで把握出来るのさ」

「なるほど。標的はあの『魔人』達だけだったからな。貴様の事をよく調べておくべきだったよ。だが、何故俺がいると気付いていながら重要な情報を漏らしたのだ？」

「あの子達には教えなきやならない事だったからねー。ちなみに聞いておくと、あんたは精霊だったり？」

「いかにも。仙霊シヴァだ……当然、名乗ったからには死んでもらうが」

そう言うと、シヴァの姿が突然消える。

「これが俺の魔法『霞』^{かすみ}だ。その名の通り、体を霞に変化することが出来る……聞けば、貴様に戦闘能力は無いらしいな。動くな。動かなければ余計な痛みを受けずに済む」

「……一応聞いとくけどさー。私を殺した後どうすんの？」

「決まっているだろう。あいつらを全員殺し、貴様が渡したリストとやらを処分する」

「それを聞いて安心したよ……これで」

ケイトは煙草をふかすと、いつも通り「にひひ」と笑って

「あんたを心置きなく拷問出来る」

「……強がりにはか聞こえんな」

「ところでさ、まだ大丈夫なの？」

「？何を訳の分からない事を……」

「だからさ、まだ呼吸してて大丈夫なの？」

その時、突然シヴァは「ぐっ」と声を漏らすと、霞は消え、体は元に戻っていた。

「き、貴様……何を……」

「はっはっはー。中々効かないから失敗かなーと思ってたんだけどね。やっぱり私ってば天才だわ」

けらけらとケイトは声を上げて笑う。

「まあ、折角だしタネ明かしくらいはしてあげるよん。これさ」

「だからこれだつてば。この煙草から出てる煙……あー、もう言葉も出せないんだね」

「……………」

「ん？『何故お前には毒が効かないのか？』そんな顔してるねー。いいよん、教えてあげる」

そう言うと、ケイトは近くにあった大きな装置を操作する。

「煙草の煙ってさー。主流煙と副流煙に別れてるんだぜー。主流煙が喫煙者が吸う煙で、副流煙が煙草から出る煙ね。ちなみに、主流煙より副流煙の方が体に有害な物質が多く含まれててね。つまり、煙草は自分だけじゃなく周りの人間にも害を与えちゃうんだよねー。まあ、それでもやめる気はないんだけど」

ケイトは笑いながら装置の操作を続ける。

「んで、私がやったのは簡単な事。この煙草の副流煙に、全身が麻痺する特殊な毒、を、主流煙に、その毒のワクチン、を仕込んだって訳さー……って、ありゃ。もうへばってるじゃんよ。まったく、人の話は最後まで聞けつての」

シヴァは意識を失い、ピクピクを体を痙攣させていた。

ケイトは気たるそうにシヴァをかつくと、動き出したその装置の中に放り込む。

「ま、まずはその辺から、教育、し直そうかねん」

そう言うと、ケイトは装置の『拷問』と書かれたボタンを押す。
その顔には、これまでとはまた違う笑みを浮かべていた。

第13話 研究者ケイトの研究所（後書き）

ということ、1章終了間際にも関わらず、新キャラのケイトさんにご登場してもらいました。

まあ、多分彼女は2章でも登場すると思うので勘弁してもらえたらありがたいですw

前書きにも書きましたが、今回はいつもよりちょっと長くなってしまいました。

というか、もつと長くなる予定だったんですが、その辺の話は次回、番外編としてお届けしようと思います。

舞台は、シアンテで一泊したそれぞれの夜にしようと思ってます。

あと、何となく思ってたんですがトリシアさん空気……まあ、それもあつての番外編なんですわ

評価・感想・指摘等頂ければ幸いです。

質問ももらえればお答えします。

番外編3 少女ティナの願い事（前書き）

早くも番外編第3弾です。

番外編3 少女ティナの願い事

シアンテで、ケイトと出会ったその日の夜。

宿で食事を終え、しばらく閑談を続ける八人。

やがて時刻が九時を回ったところでミーシェが

「じゃあ、そろそろ寝ましょうか」

「え？まだ早くないですか？」

「今日は色々あったし、皆疲れてるでしょう？明日に備えて早めに休むべきよ」

それもそうだとピリンクは納得し、全員がそれぞれの部屋へと戻って行った。

部屋に入ったピリンクとパラソスは、特に何か話すでもなくベッド

に横になる。
よくこの二人で泊まる事があったので、もう慣れているのだ。
ピリンクが灯りを消し、二人共明日に備えて目蓋を閉じる。
すると、パラソスが

「……なあ」

「うん？」

「……お前、『魔人』と旅する事についてどう思ってる？」

「……気に入らないのか？」

「そういう意味じゃないさ。ただ、あいつらが裏切る可能性だってゼロじゃないだろ？」

「……俺はそう思わないかな」

「……何故？」

「俺、デイライズやティナと話すの面白いぜ。あいつらは『貴族院』に将来を奪われただけで、実際はただの子供なんだからよ」

「……でも、お前ティナから」

「分かってる。でも、ティナが躊躇せずに俺を攻撃したのは、そういう状況で生きるしかなかったからだ」

「……」

「それに、何より隊長が許してるんだ。俺がいつまでも言ってるわけにはいかないだろう」

「……お前、この頃少し変わったな」

「お前も人に言えねえよ」

二人は声を殺して笑う。

最近、自分達の隊長に、少しずつ心の変化が起きているのは知っていた。

その原因がハルトであるという事も。

「じゃ、そろそろ寝ようぜ。明日も早いし」

「ああ、そうだな」

正直に言えば、パラスはまだ『魔人』を信用出来ていなかった。その事を言わないのは、ピリンクとの口論を避けるためではない。

ただ、親友の為にまだ怒りを鎮められていない事を知られるのが恥ずかしかっただけなのだ。

部屋に入ったデイライズは、すぐさまベッドに横になる。
対してバラドーはと言つと

「アニキ！アニキの武勇伝を聞かせてください！」

と、ハルトが答え辛いような話題を振っていた。

「ぶ、武勇伝って……大体、今まで僕は稽古ばっかで実戦はほとんど無かったし……」

「なるほど……つまり、実戦経験がほとんどない中アッシや首領を倒したって事ですよね！」

確かにその通りなのだが、改めてそう言われると小恥ずかしい。すると、それを聞いたディライズが

「……待て。ならば、俺と戦った時はほとんど初めての实戦だったって事か？」

「え？う、うん、まあ」

「なっ、手前え、アニキと戦った事があるのか！」

ディライズはバラドーを完全に無視し、舌打ちをこぼす。

「あれでほとんど初の実戦、か……自信喪失なんてレベルじゃねえぞ」

「むっ。どうやらお前がゴボコにされたみたいだな」

さすがにディライズは気分を害したのか

「まあ、お前よりは善戦しただろうがな」
「なんだとコラ」

実は、どちらもハルトに有効な攻撃は一度も与えられていなかったりする。

ハルトが何となく二人のやり取りを見てると

「アニキ！俺とこいつ、どっちが強かったですか！」

と、また面倒な質問を仕掛けてくる。

が、やはり本当の事を言うべきだと思ったのか

「……どっちが強かったかかって言われると難しい所だけど……もし二人が戦ったとしたら、デイライズが優勢だろうね」

確かに、バラドールの『吸』は魔術師にとって驚異的な魔法だろう。

しかし、『吸』は生物に対して使用出来ない。

デイライズの魔法は『重』、自分の重力を自在に操り、自身に重力の鎧を纏わせる事などが出来る。

つまり、自身に魔法を使用する為、バラドールの『吸』が効かないのだ。

更に、バラドールには言わないが、デイライズ戦での終盤、彼は……何か……をしようとした。

正直、バラドールが勝てる可能性は低いだろう。

「んなっ！」

「ぶん」

「……納得いかねえ！ディライズ表出る！白黒つけようじゃねえか！」

「いいだろう。そろそろ力の差というやつを教えてやる」

そう言うと、二人は宿の外に出る。

数分後、ゴツという音と共にバラドールの短い悲鳴が聞こえた。

更にその数分後、部屋に入ってきたのはバラドールを担いだディライズだった。

バラドールをベッドに下ろすと、ディライズは神妙な面持ちでハルトに声をかける。

「……おい、ハルト・ヘイジ」

「ハルトでいいよ」

「ん、じゃあハルト……改めて名前で呼ぶのもおかしな話だな」

「はは、かもね。それで？」

「……王都での用事を済ませたらいい。俺と戦え」

「……それはまたどういう心境の変化？君は僕と同じで面倒な事は避けるタイプだと思ってたけど」

「……ああ。どうしてこうしようと思ったかは自分でも分からん」

「……嫌いじゃないよ、そういうの。分かった、約束する。その時は全力で君の相手をさせてもらうよ」

「ぶん」

デイルाइズは不機嫌そうに鼻を鳴らすと、そのまま自分のベッドに横たわる。

ハルトはクスクスと笑い、部屋の灯りを消した。

部屋に入ったティナは、そのまま自分のベッドに飛び込んだ。

「うわ、何このベッド、ふかふかー!」

「シアンテは金回りのいい街だからね。結構、色んな施設が充実してるらしいわよ。夕食も結構豪華だったし」

「お、美味しいご飯でしたよね。つついっ食べ過ぎちゃって……」

「む! トリシアちゃんはいいじゃん! どうせその栄養は全部胸に行っちゃうんだし!」

「ティ、ティナちゃん。別に大きくてもいい事はないよ? その、肩とか凝っちゃって大変だし……」

「そんな事を言う口はこの口かー!」

「い、いふあいよふいなひゃん」

ティナはトリシアの両頬を抓り、トリシアはまともに喋る事が出来ない。

そんなやり取りの中、ミーシェは自分の胸に手を当てると

「…………別に小さくはないよね？」

と呟くのだった

やがて飽きたのか、ティナはトリシアの頬を抓るのをやめると

「あーあ。本当なら今頃はデイライズと一緒に時計塔見に行く筈だったのに…………」

「あー、『夜の時計塔』だったかしら？」

「た、確か、ちょうど夜の十二時に時計を見ながら願い事をする、それが叶う、なんていう迷信が残ってるんですよね。ちょっと、ロマンチック、ですよね」

それを聞いたティナはピクリと体を動かすと

「…………今、九時半くらいだよね？」

「え？ええ。そのくらいよ」

「じゃあ、十二時になったら三人で時計塔見に行こうよ！」

「…………ねえ、私の話聞いてた？今日は皆疲れているだろうから、早く寝ないと」

「お願いお姉ちゃん！この通り！……ダメ？」

そんな風に潤んだ瞳で頼まれると、ミーシエに断る事は出来なかった。

「……仕方無いわね」

「ホント？やたー！」

とりあえず時間を潰す為、三人は他愛もない話に花を咲かせた。

しばらく話していると、部屋の時計は十一時四十五分を指し示していた。

「……そろそろね。ほら、行くわよ」

「えー、今いい所なのにー」

「貴方が誘ったんでしようが……ごめんねトリシアさんまで付き合

「わせちゃって」

「い、いえ。私も、その、楽しかったですし……じゃあ、行つてらつしゃい、です」

「え？トリシアさん来ないの？」

「……え、来ても……いいんですか？」

「アハハ！あつたりまえじゃん！トリシアちゃんって変なの！」

「へ、変かな？」

「うん！友達なんだから当たり前じゃん！」

「……友達……」

「ええ、今更よ。だから行きましょう、トリシアさん」

「……は、はい！」

こうして、三人は夜のシアンテに繰り出した。

当然ながら夜のシアンテはほとんど無人の状態だったが、それでも時計塔の周りは観光客などで賑わっている。

「……あと五分で十二時よ」
「うー、なんかドキドキするね!」
「わ、分かります」

そして、やがて短針と長針が重なり、時計塔からは十二時を告げる鐘が鳴り響く。

その瞬間、時計塔の周りにいる人々が目を瞑り、手を組んだ。

三人も慌ててそれを真似する。

やがて一分ほど経過し、群集はそれぞれ散り散りに去っていく。

「……何かあつけないね」

「迷信なんてそんなものよ」

「み、皆さんは何をお願いしたんですか？私はギルドの安泰と、皆で無事に王都へ帰れるように……」

「あーっ！二つなんてズルいよトリシアちゃん！」

「え、え、ズルい……ですか？」

「アタシ一つしか願えなかったよ……それは」

「はいはい。どうせ、……デイズと一生一緒にいられますように……とかでしょう？」

「な、何で分かったの!？」

むしろ分からない方がおかしいのでは……とミーシエは考える。

「あ、お姉ちゃんは何てお願いしたの？」

「え？私は……まあいいじゃない。さ、戻るわよ」

「えー！」とティナは叫んでいたが、ミーシエとしては言うのが恥ずかしかった。

何故なら彼女の願いは「少しでも長く旅が続くように」だったからだ。

そんな想いを抱き、ミーシエは二人を連れ宿に戻った。

彼女は何となく幸せな気分で寢床に着いた。

不幸があったとすれば、それは二時を過ぎてもティナのお喋りが終わらなかった事か。

番外編3 少女ティナの願い事（後書き）

ということ、シアンテでのそれぞれの夜を軸にしてみました。
今回、少し恋愛要素（？）が高めとなっております。

実は、1章が完結した後に、1つ2つ番外編を書こうと思ってるのですが……書きたい番外編が結構溜まっていたりしてますw

「アンジェリカ対ケツアルコアトル」、「ミーシェとアンジェリカ
の出会い」、「その頃のカーロス（ハルトの故郷）」、「ハルト修
行時代」、「荒くれ者バラード」……とりあえず、この中から考
えています。

もし、これを読んでみたいというのがあれば、教えてもらおうと助か
ります。

評価・感想・指摘等もらえれば嬉しいです。
質問ももらえればお答えします。

第14話 少女ミーシェの想い(前書き)

今回も恋愛要素(?)が少し高めです。

第14話 少女ミーシェの想い

ケイトとシヴァの戦いに決着が着いた頃、一行はシアンテの港に訪れていた。

ケイトの言う通り、何故か昨晚の間に修復が済まされており、一、二時間もすれば出港出来るらしい。とりあえず船に乗り込み、それぞれ自由行動となった。すると、デイライズがハルトに「話がある」と、甲板に連れ出す。

「どうしたのデイライズ」

「……お前、気付いていただろ？」

「……何が？」

「とぼけるな。ケイトの地下室にいた奴の事だ」

「……何で分かったの？」

どうやら、この二人はシヴァの存在に気付いていたようだ。

「一度戦ったんだ。お前が殺気を放っていれば分かるさ」

「じゃあ、デイライズも気付いてたの？」

「ああ。と言っても、別れ際にケイトが敵襲のサインを出してようやくだが」

「……何で助けなかったの？」

ハルトのその言葉には、デイライズを責める語気はなく、ただ真意が知りたい、そんな言い方だった。

「『助けは不要』ってサインも出しやがったからな。それに、どうやらあいつは自力で何とかしたらしい」

そう言うと、デイルイズは手帳を取り出す。

その手帳には、おそらく他の仲間である『魔人』の名が記されていた。

が、よく見ると不自然に行が空いている場所がいくつかあった。

「これはケイトが作った『命簿帳』と言ってな。俺達に何らかの危険が迫ると、名前の文字が薄くなる仕組みになっている」

「……じゃあ、この空いてる行って……」

「……察しがいいな。ああ、死んだ『魔人』達の名が記されていた」

ハルトは押し黙る。

分かってはいたが、やはり『魔人』もそれなりの犠牲は払ってきたらしい。

「……そう黙るな。お前が気に病むような問題じゃない。それよりこれを見る。ケイトの名はすっかりと残っている。つまり、あいつは無事な訳だ……では、同じ質問をさせてもらおうか。お前も敵の存在に気付いていたのなら、何故ケイトに加勢しなかった？」

デイルイズの問いに、ハルトはしばらく黙り、やがて

「……サイン、かな」

「ん？」

「僕が動こうとしたら、ケイトさんがこっちを見たんだ。そして、唇だけ動かして……多分、『任せて』って言ったんだと思う」

「……はあ。どうしてあいつは戦えもしないくせに、一人で抱え込むんだらうな」

デイライズは額に手を当てながら溜め息を吐く。

しかし、その表情にはどこか安堵したような、そんな感情が伺えた。すると、新たに乗船する一人の男の姿があった。

セイレーンとの戦いで協力してくれた行商人、ハビッツだ。

ハビッツは二人に気付くと、笑顔を見せ会釈をする。

「ヘイジさん。どうやら帰りも一緒になりそうですね……そちらの方は？」

「デイライズ・ゼグラードだ」

「俺はハビッツ・セイゼル。行商人をやっています。短い付き合いですが、よろしくお願ひします」

そう言うと、ハビッツは周りをキョロキョロと見回す。

「……あの、マテリアさんは？」

「え？えっと、多分もう部屋に戻ってる頃だと思っけど……」

「そ、そうですか。では、俺はこの辺で」

そう言うと、ハビッツは船室の方へと消えて行った。
しばらく押し黙っていたデライズは、やがて口を開く。

「……いいのか？」

「何が？」

「……いや」

その言葉を濁し、自室へと戻って行く。

デライズの質問の意図に、ハルトが気付く日は来るのだろうか。

やがて、船は出港時間を迎え、王都近くの港町、バルブへと進路を
取る。

航海時間は一日程度、バルブから王都までは小一時間も歩けば辿り
付けるだろう。

旅を始めて八日目にして、ついにその終わりが見えてきた。

その夜、ミーシエは甲板で風を浴びていた。
おそらく明後日、いや、明日には王都に到着するだろう。
そして『貴族院』の用事を済ませれば、ハルトは故郷のカーロスに
帰ってしまう。
ミーシエにとって、誰かとの別れがこんなに辛い事は今までなかつた。

「……楽しかったな」

ミーシエは思わずそう呟く。
この八日間、色々な事があった。

『魔人』や精霊との戦い。

そこから知ってしまった『貴族院』の間。

そして、仲間達との出会い。

これらの出来事は、ミーシエの運命を少なからず変える事になった。
おそらく、ハルトが居なければ、ミーシエは今でもピリンクを傷つけた罪悪感に苛まれていただろう。

ハルトには言葉に出来ないほど感謝している。

同時に、自分がハルトに対して、友情とは違う、何か、を抱き
始めている事に気付いていた。

それを何と云えばいいのか、ミーシエには分からない。
しばらく色々考えた結果

「よう」

と、ミーシエは立ち上がる。

王都に着いて『貴族院』の用事を済ませたら、ハルトを自分の家に招待しよう。

他にも二人で行きたい場所がたくさんある。

彼は、自分なんかと一緒に行ってくれるだろうか？

ミーシエは夜空に想いを馳せた。

翌日の夕刻。

特に何の問題も無く、船はバルブに到着した。

「……じゃあ、このまま行きましょうか」

「えー、もう行くの？」

「我が俣を言うなティナ。それに、少し歩けば王都はすぐそこだ」

すると、それを聞いていたらしい老人が

「……あんたら、王都ゼブリオに行くつもりかい？」

「ええ」

「残念だが、この先の道は数日前に降った大雨で土砂崩れが起きて進めないよ」

数日前の大雨……もしかすると、セイレーンの影響なのかもしれない。

「土砂崩れですか……パラソス、回り道するとしたらどのルートが一番近いかしら？」

「そうですね……ここからだ、ルーバス渓谷を抜けるのが一番早いと思われます」

「あの渓谷か……どのくらいかかるの？」

「ここから渓谷を通って、王都に着くまで……半日程度でしょうか」「それじゃあ、今日はこの町に泊まりましょう。一度行った事があるけど、ルーバス渓谷には結構な頻度で魔物が出るわ。夜の魔物は凶暴性が増すから念を入れないとね。ハビッツさんはどうします？」「よければ一緒にさせてください。俺一人で魔物に襲われれば、勝ち目ないですからね」

ハビッツは苦笑する。

「決まりね。じゃあピリンク、宿を……いえ、このまま皆で行きましようか。時間も時間だしね」

『異議なし』

かくして、一行はこの旅路最後の宿へと向かった。

その夜。

ミーシエは寝付けずにいた。

何となく、初日のストルトでの夜を思い出し、くすくすと笑う。

ミーシエは夜風に当たろうと外に出る。

そこには、案の定ハルトの姿があった。

しかし、鍛錬をしている訳でもなく、ただ夜空を見上げている。

やがてミーシエに気付くと

「やあ。眠れないの？」

「ええ、そんなとこ。ハルト君はどうしたの？」

「いやね……なんとなく、この旅路を思い返してみたんだ」

そう言つと、ハルトはミーシエに向き直る。

「……思えばこの九日間、色んな事があったね。あ、明日を入れればちょうど十日か」
「……後悔してる？」

ミーシエは、ずっと言えずにいた事をハルトに問いかける。
しかし、ハルトはいつも通りに笑ってみせると

「いや、全然」

と答えるのだった。

「むしろ、僕はミーシエ達に感謝してるよ」
「え？」

「確かに、この十日間で色んな事を知ったし、体験した。知らない方がいいような事も多かったと思う。それくらい『貴族院』が強大だって事も解ってる」

「……………」
「でも、それでも、僕は王都に行かなきゃならない……『貴族院』に会わなきゃいけないんだ」

「……………」
「どうして、そこまでの覚悟が出来るの？ 実際、命を落としかけた場面だってあった。それなのに……」

その言葉を聞いたハルトはしばらく考えた後

「……君がカーロスに来たあの日、僕には王都に行く理由が出来た」
「……お金？」

「違うんだ。それは金貨がどうとか言う話じゃ……いや金貨の話って言えば金貨の話なんだけど……」

「？」

「……王都に着いたら、全部話すよ」

ハルトは苦笑しながらそう言うと、宿に向かって歩き出した。
と思うと、ふと何か思い出したように立ち止まり

「……ミーシエ、一つお願いがあるんだけど」

「何？」

「……フランク達には悪いんだけど、僕、王都って初めてでさ……
その、街の中とか案内してくれると嬉しいなって……駄目かな？」

ミーシエは思わず吹き出す。

昨日悩んでいた自分が馬鹿らしくなったのだ。

笑いを何とか堪え、不思議そうな顔をしたハルトをまっすぐ見つめる。

「もちろん、私でよければ」

「……あ、ありがとう」

ミーシエの笑顔に思わず顔を赤らめるハルト。

恥ずかしかったのか、そそくさと宿に戻っていった。

ミーシエはまだ戻らない。
何となく、夜空を眺めていたかった。

翌朝、新たにハビッツが加わり九人となった一行は、進路を南西に取り、ルーバス渓谷へと向かう。
数時間後、一行は渓谷に辿りつく。
しかし、その渓谷にミーシエは違和感を感じた。

魔物の気配が感じられないのだ。

が、ミーシエは特に気に留めず、一行を連れそのまま渓谷に入る。
昼に一度休憩を取り、再び渓谷を進んで行く。
そこで、ミーシエは違和感がどんどん大きくなっていくのを感じた。
パラソスも同じ事を思ったのか、ミーシエに小声で話しかける。

「……いくらなんでも、ここまで魔物がいないのはおかしいですよ
ね」

「ええ。前に来た時は、少なくとも三回は襲われたわ」

「……『貴族院』の刺客でしょうか？」

「……可能性は十分にあるわね。用心する必要があるわね」

一時間後、パラソスの提示した可能性は的中する事になる。

しかし、その敵の正体は、誰もが予想だにしていなかった。

空が徐々に赤く染まり、一行はようやく溪谷の出口付近の橋に差し掛かる。

橋は幅十メートル、長さは五十メートルと、結構大掛かりなものだった。

「結構大きいんだね」

「元々、この辺は断崖で通れなかったんですが、数年前に移動手段を増やす為、王都が大枚はたいて造ったそうですよ」

「へー……確かに、ここは通れないね」

ハルトは三十メートル下にある急流の川を見ると、ブルリと体を震わせる。

すると、橋の向こう岸に、二人の人影あるのを見つけた。

ミーシェ達軍人は二人に、それ以外はその内の一人に見覚えがあった。

デイライズは怪訝そうに目を細め、ミーシェは信じられないと言うように目を見開き

「……ザグロ？何故お前がここにいる」

「ズイバルダさん……？どうしてここに……」

二人組の内一人は、シアンテで別れ故郷の村に向かった筈の『魔人』、ザグロ・ペテイスだった。

もう一人、ミーシェがズイバルダと呼んだのは、六十歳前後の老人だった。

ハルトはその名前に聞き覚えがあった。

そして思い出す。

その名前は、アンジェリカの祖父、体を壊したという、現『守六光』第五席の名の筈だ。

ズイバルダは黙したまま剣を抜くと、そのまま振り抜く。

瞬間、剣の軌道通りの衝撃波がミーシェ達を襲う。

対応が遅れながらも、ピリンクが『土』を作動させ、それを防ぐ。

「ズイバルダさん！何のつもりですか！」

「……すまん、ミーシェちゃん」

ズイバルダはミーシエ達に向かって走り出す。
ミーシエはやむなく『衝』を使おうとする。

が、その『衝』は発動しない。

「ッ!？」

ミーシエは『衝』を発動出来ない理由が解らず困惑する。
ズイバルダは躊躇無く剣を振り下ろす。

ハルトは両者の間に入り、その剣を籠手で受け止める。
口を開いたのはザグロだった。

295

「無駄ですよ。この辺一帯には『衝』の封印術式が施されている」

「封印……術式……?」

「ええ。ベリオスで研究さえれている技術ですよ。全ての魔法の封印はさすがに無理ですが……先日、特定の魔法のみを封じる術式が完成したんです」

「……ザグロ。何故お前がそんな事を……」

「……それは貴方達が必要のない事です」

そう言うと、ザグロは体の『岩』で硬化させる。

「……ザグロ、お前」

「……無駄話は終わりです……行きます」

こうして、困惑のまま戦いが始まった。
空には虚しく鴉からすの鳴声が木霊していた。

第14話 少女ミーシェの想い（後書き）

ということ、ミーシェの想いと、1章最後の敵について書いて見ました。

おそらく、次回で1章完結です。

長かったようで短かったようで結構長かったこの一ヶ月。何とか節目を迎えられそうです。

いつも読んでくださる皆様本当にありがとうございます。これからもお付き合い願えたらと思います。

評価・感想・指摘等、頂ければ嬉しいです。
質問ももらえればお答えします。

第15話 少年ハルトの微笑(前書き)

一章完結です。

あと投稿時間が遅くなってしまい、申し訳ありませんorz

第15話 少年ハルトの微笑

ズイバルダが次々と繰り返す斬撃を、ハルトは何とか籠手で捌く。
キーン！と甲高い音が連続で響き渡り、ハルトの籠手ガントレットとズイバルダの剣がぶつかり合う。

数回の打ち合いの後、二人は弾かれたように後ろに下がる。

「……どうやら、アンジェリカさんのお祖父さんっていうのは本当
みたいだね。太刀筋って言うんだっけ？そっくりだよ」

「……お前さんもな」

「え？」

「その目……フォルスの奴によく似ておる」

それを聞いたハルトは体をピクリと動かす。

「……どうして祖父の名を？」

「……古い知り合いだった、それだけだ」

一方で、襲い掛かるザグロを、デイライズは『重』の鎧で受け止める。

「……どうしても、戦わなければいけないのか？」
「……くどいですよ、あなたらしくもない」

ザグロは一度距離を取る。

「今の状況を見れば分かるでしょう？僕はあなたの敵で、あなたは僕の敵です。戦う理由などそれで十分じゃないですか」

「……ああ。そうだな。そう考えるのが妥当だろう」

「だが」とデイライズは続ける。

「……あいつらといる内に、俺も甘くなっちまったようだ」
「……それはつまりませんね。そんなあなたを倒した所で何の自慢にもなりません」

そう言うと、ザグロはズィバルダに声をかける。

「ナイトレイジ氏……相手を交換してもらいたいんですが」
「……ああ、構わん。こいつと戦っていると思ひ出したくもない昔
が目に浮かぶ」

ズイバルダはハルトから離れ、代わりにザグロが立ち塞がる。

「……君は仲間を裏切るようなタイプに見えなかったんだけどね」
「たった二日しか一緒にいなかったというのに、僕の何が分かる
と言うんですか」

その時、ズイバルダが剣に手を当て、剣が見る見る内に姿を変えて
いく。

どうやら、アンジェリカと同じく使用する魔法は『鉄』らしい。
しかし、その剣は見たところ、普通のものあまり変わった風には
見えない。

「壁剣『ラインウォール』……使い方はこうだ」

ズイバルダは自分とザグロの間にその剣を振るう。
すると、その斬跡から突然高さ五メートルほどの壁が現れる。
ズイバルダは橋の幅いっぱいその壁を出現させる。

「見た目は薄いけど、こいつの強度は岩をも凌ぐ」

パラソスは試しにその壁に『火』を放つ。が、壁には少しの傷が付いただけだった。

これで戦いはハルトとザグロ、それ以外の八人対ズイバルダに分けられた。

ズイバルダは『鉄』で剣を元に戻す。

「……たとえ『守六光』とは言え、我々八人に勝てるだけでも？」

「八人？ どう見ても一般人のガキに、ミーシエ……マテリアは『衝』が使えない。ああ、そっちの女は補助系の魔術師のようだな……どうやらまともに戦えるのは五人のようだが」

「……五人なら勝てる、と？」

「ああ、前言撤回だ。五人でも八人でも大差は無い」

その言葉を口火に、デイライズは『重』の鎧で、ティナは剣でズイバルダを襲う。

しかし、ズイバルダはティナの剣をいなし、ズイバルダの腹に蹴りを叩き込む。

「ぐっ」

デイライズは短く呻き声を上げる。

が、バラドはその隙を逃さず、ズイバルダの脇腹を大槌で狙う。しかし、ズイバルダは跳躍しながら体を横転させ、そのままバラド

―を斬り付ける。

「カハッ！」

バラド―の体から鮮血が飛び散る。

「バラド―さん！」

すぐさまトリシアがバラド―に駆け寄り、そのまま『治』を施す。だが、そんな隙をズイバルダが見逃すはずも無く

「敵に背を向けたらいかんよ」

剣を振り下ろそうとするが、そこにミーシエが立ち塞がる。

「させない！」

ミーシエは自分が戦えない事が悔しかった。

その想いが彼女を突き動かす。

ズイバルダは一瞬躊躇うが、ミーシエの体の横からトリシアを狙った。

そこに間一髪でピリンクが『土』を発動させ、壁がズイバルダの剣

を防ぐ。

更に、パラソスが『火』の玉を仕掛けた。すると、ズイバルダは『鉄』を使用し、剣の刀身が水色に変わる。そのまま剣を『火』の玉に当てると、それらは全て消え去ってしまう。

「水剣『ズプレッド』……詠唱も無しではこの程度か」

「……このお爺ちゃん、強い」

テイナの言う通り、ズイバルダの動きはとて六十を過ぎているようには思えなかった。

パラソスが拳を握り締めながら口を開く。

「……、剣豪ズイバルダ……。人魔戦争でも活躍した英傑だ……」

だからこそ解せない。何故貴方が我々を襲う必要があるのですか！

「……分からぬか？」

「何がです！」

「現在、お前さん方を襲う理由があるのは……『貴族院』、だろう？」

「……まさか貴方までもが！」

「……口が過ぎたな。さあ、続けようか」

ズイバルダが詠唱を唱え、剣が形を変え、その刀身が大きく、そして紅く染まる。

パラソスはあれを見た事があつた。
ハルトと戦つた時、アンジェリカも使つたもの、剛剣『クリムゾン
ロード』だ。

「行くぞ」

ズイバルダは一行に向かって走り出す。
パラソスは歯を食いしばり、目の前の……敵……に『火』を放つた。

パラソス達がズイバルダと戦いを繰り広げる中、ハルトとザグロも
また、互いの拳で打ち合つていた。
が、徐々にハルトがザグロを押し始める。

「……何故」

ザグロが息を切らしながら口を開く。

「何故、僕の『岩』と何度もぶつかり合っていないながら、あなたの拳は無事でいられるんですか？」
「ああ。セイレーンとの戦いでは、これ意味無かったみたいだからね」

ハルトは籠手をこんこん叩いて見せる。

「これは『不障ふしょうの籠手こて』って言うてね。魔力の影響を受けないんだ」
「……『無干涉』シリーズ、ですか。まだ残っていたとは」
「良く知ってたね……ところで、さっき壁の向こうからチラツと聞こえてきたけど、君とあのお爺さん、『貴族院』の回し者なんだってね」

「……だったら何だと言うんです？」
「『貴族院』は君達にとって敵意外の何物でもないでしょ？何で手を貸すのか、色々考えてみたんだけど、結局一つしか思いつかなかったよ」

「……」
「シアンテで僕達と別れた後、君の故郷で何かあったんだよね？」

「……」
「詳しくは分からないけど、家族が人質に取られたとか……もしかくは村ごと、とかね」

「……大した名探偵ぶりですね。何故そう思ったんですか？」
「……そう言われるとね」

ハルトは少し言葉を濁すが、やがて顔を上げ

「……あの二日間君と一緒にいて」
「？」

「君が理由も無しにそんな事する奴には思えなくてさ」

「……大したお人好しですね」
「よく言われるよ」

ハルトは苦笑してみせる。

「僕を相手に選んだのも、単にデイライズと戦いたくなかっただけなんじゃないの？」

「……仮にそうだとして、僕があなたの敵だという事には変わりありませんよ？」

「だろうね。その辺も色々考えたんだけど……結局、君を打ちのめす以外に方法が思い付かなかったよ」

「……あなたも中々面白い人だ。もし、会つのが早ければ友人になれたかもしれません」

「何言ってるのさ。とっくに友達だろ」

ここで初めてザグロが笑った。

「だったら話は早い。友人らしく、派手に殴り合いと行きましようか。とは言え、このままであなたに勝てるとは正直思っていないので……奥の手を使わせて頂きます」

そう言うと、ザグロは目を閉じ、しばらくして開く。

その時、ハルトはゾクリと、悪寒にも似た何か走った。

ハルトは前にも同じ体験をした事がある。

ディライズと戦った際、追い詰められたディライズが放ったものと同じのもだった。

直後、ザグロの体に異変が起きる。

ザグロの体が、彼の右腕のように変貌したのだ。

やがて、ザグロの体は完全に魔物のものとなった。

ザグロは……ザグロだったものは口を開く。

「……これが僕達『魔人』の奥の手、『魔物化』です。脳以外の全てを魔物に変えるという、まさに離れ業と言って過言では無いでしょう」

これにはさすがのハルトも驚きを隠せなかった。

「とは言っても、その辺のゴーレムと一緒にしないで下さい。『岩』の魔法もあって、僕の能力はゴーレムを遥かに凌駕します」

「……そんな事まで出来るなんて……ベリオスの技術って凄いなだね。人道的かどうかはともかく」

「変わったのは見た目だけでは無い事を……お見せします！」

そう言うと、ザグロはハルトに襲い掛かる。

ハルトはそれをかわし、ザグロの腹に拳を叩き込む。

が、その感触は硬く、ザグロは全く動じずに右腕でハルトを殴り飛ばした。

「ッ……！」

ハルトは倒れない、が、ダメージは確かに通ったらしく、口からは血が流れていた。

「驚きましたか？確かに『無干渉』は魔力の影響を受けませんが、今僕の体は見ての通り魔物そのものだ。つまり、いくら殴った所で僕にダメージは通らないんですよ」

「……厄介だね、それ。でも」

ハルトは口元の血を拭い去り

「やりようが無いって訳じゃない」

「……強がって何になるんです？どうやらあなたは魔力を使わない

タイプの格闘家のような。それで僕に勝つなど不可能なんですよ」

「僕が魔力を使わないなんて、いつ言ったんだい？」

「……まさか」

「師匠には……ここぞと言う時以外使っちゃならない……って言われてるんだけどね」

「まあ」とハルトは続ける。

「友達を助けるって時って、十分……ここぞ……って時だよな」

そう言うと、ハルトは構え、魔力を溜めた。

確かにハルトは現代の格闘家のように、魔力を戦闘に活用する事が出来る。

が、それは現代の格闘家とは全く違う使い方だった。

瞬間、ハルトの姿が消えたかと思うと、ザグロの体に衝撃が走った。その衝撃がハルトに殴られたからだと分かると同時に、ザグロの体は地面に垂直に吹き飛ばされる。

ザグロの体はそのまま『ラインウォール』によって発生した壁にぶつかり、そのまま壁を突き破った。

ハルトは殴った時のまま静かに唇を動かす。

「……『流星壱式』」

魔力を拳ではなく足に集中させ、限界を超えた速度で敵を討つ。その姿、まさに流星の如く。

ハルトの唯一にして、必殺の……技……だった。

同時に、ハルトの師である人物が唯一彼に教えた技でもある。完全に気を失ったザグロの姿を見たズイバルダは

「…………『流星壱式』、か。懐かしい技だ」

ハルトは壁を超え、ミーシエ達と合流する。

「…………祖父ちゃんも使ってた、とか？」

「ああ」

ズイバルダは頷き、ハルトに向き直る。

「…………やはり、お前さんと戦わなければならないか」

「…………みただね」

ハルトは構える。

両者は睨み合いを続け、やがてズイバルダが動き出そうとした、その時

「！」

ズイバルダは突然驚いたように動きを止める。
その目はある一点を凝視していた。
ハルトとミーシエ達もその視線を追い、向こう岸に目を向ける。

そこには、ミーシエの甲冑によく似たものを着た男が立っていた。

ミーシエはその男を見ると、信じられないと言つように体を震わせる。

やがて、震えながらその口を開いた。

「に……兄さん？」

その言葉を聞いたハルトは驚いたようにミーシエを見る。

「……どういう事？」

「……ジバルド・ベイグハン。私の……腹違いの兄、です」

ハルトは必死に記憶を探る。

確か、ジバルドという男はキャリオスを襲撃した『守六光』のはずだ。

その男が、ミーシエの兄という。

ジバルドの姿を見たズイバルダは

「……………何故ここへ着た」
「……………」

ジバルドはその質問には答えず、代わりに右腕を掲げると、突然詠唱らしき言葉を呟く。

「『紫雷』」

瞬間、空が光ったかと思うと、轟音と共に橋の四隅に……何か……が落ちる。

その……何か……が雷であると気付くのに長くはかからなかった。そして、ジバルドは一同に背を向け、来た道を戻っていく。ハルトはジバルドを追おうとするが、突如起きた強い揺れに阻まれた。

ズイバルダは顔を歪め

「くっ、ジバルド……!!」

「……………!隊長!橋が崩れます!」

パラススの言葉と共に、ズイバルダは気絶しているザグロを抱えると、ジバルドが来た方向へと消えて行った。

「ズイバルダさん!……………っ!皆、急ぐわよ!」

そう言うと、一行は急いで来た方の岸へと走る。
距離はせいぜい二十メートル。

橋の崩壊のスピードも早いですが、何とか間に合う距離ではあった。

が、ここで予想外の事態が起きた。

「あっ………!!」

こういう事態に慣れていないハビッツが、足を絡ませ転んだのだ。

「ハビッツさん!!」

「っ!………足を挫いたみたいですね………俺の事はいいです、早く逃げて下さい!!」

「そんな事!!」

「マテリアさん!!ここは僕に任せて!!」

「で、でも」

ミーシエの言葉を聞かず、ハルトはハビッツに駆け寄り肩を貸す。

「す、すみません」

「気にしないでください」

全員が向こう岸に辿りつき、ハルトも急いで岸へと向かう。

が、ここでザグロから受けた傷がハルトの足を鈍らせた。

不運にもその時、橋が一気に崩れたのだ。

落ちていく風景の中、ハルトは精一杯の力でハビッツを投げる。

ハビッツの体は岸に辿り着き、ピリンクががっしりと受け止める。

「ハルト君！」

ミーシエは手を伸ばし、ハルトもまた手を伸ばすが、距離が足りない。

そして落下の瞬間、ハルトはミーシエに微笑みを見せた。

「ダメ！」

「チツ！」

共に落ちそうになるミーシエを後ろに押しやり、代わりにディライズが川に飛び込む。

「ディライズ！」

ティナの悲痛な叫びも届かず、ハルトとディライズ、二人の姿が急流の川に消えた。

啞然とするパラソス達。
重い沈黙が流れる中、川の音だけがやけに大きく、そして虚しく響き渡った。

数時間後、王都に佇むとある豪邸。
そこには、四十前半の女と、それに傳かく若い女の姿があつた。

「……………そうですか。事は順調に運んでいるようですね」
「はい。ハルト・ヘイジ、デイライズ・ゼグラード、共に川へ落下した模様です」
「……………そのヘイジという少年には気の毒ですが……………これで奴の目論見は破綻した訳ですね。……………奴はこの少年に何の用があつたんでしようか？今となつては分からず仕舞いです」
「……………そうですね。洗い直して見ましようか？」
「まあ、気に止めるほどの事では無いでしょう。それより、我々も事を急がねばなりません」
「ではシャルロット様、ここは私めに……………」
「ええ、お任せしますよソロン」

ソロンと呼ばれた女は「御意に」とその部屋を後にする。
一人になり、沈黙が続く中、シャルロットと呼ばれた女は立ち上がる。

「……時は来ました。『勇者の遺産』……必ずものにしてみせましょう」

そう言ったシャルロットの顔には、歪んだ微笑が浮かんでいた。
女の名はシャルロット・C・ブロンドウェイ。

職業・『貴族院』議員。

今、王都を舞台に新たな波乱が起きようとしていた。

第15話 少年ハルトの微笑（後書き）

ということ、一章完結です！

ようやく節目を迎える事が出来ました。

それもこれも全て、読んで下さる読者様のおかげでございます。

本当にありがとうございます！

2章ではこれまでに以上に頑張りたい所存です。

今回のラストに登場したシャルロットという『貴族院』の議員。

そして、彼女の言う『勇者の遺産』とは？

その辺が2章の根幹になると思います。

ハルトはどうなった？という方もいるかもしれませんが、2章に彼の出番はありません！

……はい、嘘ですw

ハルトとデイライズの安否等も、2章で明らかにするので、期待してもらえれば幸いです。

今回は番外編の予定です。

いや、あんな終わり方してふざけんなやという声もあるかもしれませんが、申し訳ないですorz

番外編の内容はアンジェリカ対ケツアルコアトルの予定です。

ストルトでハルト達と別れたアンジェリカのその後の話ですね。

ひょっとしたら次々回も番外編かもしれませんが……その辺はまだ迷っている所です。

本編を進めて欲しいという方がいらっしやれば、言ってもらえれば助かります。

評価・感想・指摘等頂けたら嬉しいです。

質問ももらえればお答えします。

番外編 4 首領アンジェリカの伝説（前書き）

番外編第4作です。

アンジェリカさんの活躍をお楽しみ頂ければ幸いです。

番外編4 首領アンジェリカの伝説

ここは魔法大国ジグライオスの東端にある辺境の村、カーロス。そこに小さく佇む『ベイルズ鍛冶』と書かれた民家。

そんな鍛冶屋の扉を叩く、一人の女の姿があつた。

「失礼する」

女は長い赤髪を棚引かせた美女で、どう考えてもこの場には不似合いな女だつた。

「へい、いらっ……じゃ、い」

修行中だつた鍛冶屋の息子は、女の姿に驚き目を白黒させていた。すると、店の奥にいた鍛冶屋の店主らしき男がやって来る。店主の年齢は六十過ぎくらいだろうか。

「おいフランク！お客さんが来た時は大声で迎えるっていつも言うて……ん？」

店主は女の姿に気付くと、その顔を食い入るよう見つめる。やがて、短く嘆息すると

「……おいフランク、お前ちょっと外行ってる」
「え？でも祖父ちゃん、親父が旅に出たから忙しいって」
「いいから行ってる。このお客さんは特別なんだよ」
「わ、分かった」

フランクと呼ばれたその少年は、鍛冶場を片付けると、外へと出て行った。

店主は近くの椅子に座ると、持っていたキセルをふかす。

「悪いね、話を聞かない馬鹿孫で」
「いえ……ご子息、旅に出てらっしゃるんですか？」
「ああ。六日前からな。ったく、俺は引退したっつってんのに……」

店主は悪態をつくくと、女に向き直り

「……で？お客さん、何の用だい？」
「高名なジョニー・ベイルズ氏に、私の剣を打って頂きたい」

「……じゃあ、やっぱあんた、ナイトレイジの人間か」

「……ええ。アンジェリカ・ナイトレイジと言います。どうしてお分かりに？」

「その目、昔のズイバルダの奴にそっくりだよ。髪の色が違うんで最初見た時は目を疑ったがな」

「この髪は染めていまして……祖父とは面識が？」

「ああ。俺はあいつの剣を打った事があってな。懐かしい話だよ」

「祖父から貴方の話は伺っております。人魔戦争では、名工ジヨニー……と呼ばれ、ジグライオスに名を轟かせる剣士の多くが、貴方の打った剣を使っていると」

「人魔戦争、か。酷いもんだつたよ、あれは。あの戦争からもうどれくらい経つ？」

「今年で十年です」

「そうか……ラーヴィスの奴が死んで、もうそんなに、か」

「……父をご存知なのですか？」

「ああ。ズイバルダは一人息子のあいつを可愛がっていたよ……それだけに、あいつが死んだ時のズイバルダは……本当に見てられなかった」

「……………」

「ああ、すまない。仕事の話だったな。どんな剣が欲しいんだ？」

「ベイルド氏にお任せします。あと、ご存知かもしれませんが、ナイトレイジの魔法は『鉄』。出来た剣を一日ほど見せて頂ければ、あとはお返ししますので」

それを聞いたジヨニーは溜め息をこぼす。

「ズイバルダもラーヴィスも同じような事言いやがったよ。まあ、その度に俺は、絶対に『鉄』で創り出せないような剣……を打つてやったんだ」

それを聞いたアンジェリカは意味が分からないというように首を傾げる。

その様子を見たジョニーは「カカツ」と笑いながらキセルをふかす。

「それじゃあ明日まで待っていてくれ。それまでには出来てるだろうよ」

「分かりました。御代はいかほど？」

「ああ、いらんよ。そんなもん」

「え？」

「ラーヴイスに剣を打ってやったって言っただろ？結局、それを渡す前にあいつが逝っちまってな。代金はもらってったのによ」

「……分かりました。ありがとうございます」

「お礼なら父ちゃんに言っっちゃんな」

「はい……ところで、一つお伺いしたい事があるのですが……」

「？」

「ハル……へ、ヘイジさんのお宅は……その、どちらにあるんでしょうか？」

翌日、アンジェリカは再び『ベイルズ鍛冶』へと向かう。その顔色は、いつもより数段に優れている。

ちなみに、彼女が昨日宿泊した場所についてだが、それは乙女の事情で伏せさせてもらう。

一つ言えるとするれば、彼女の調子と宿泊した場所は少なからず関係がある、という事だ。

『ベイルズ鍛冶』に入ると、既にキセルをふかしているジョニーの姿があった。

「おう、来たな。もう出来てるぞ」

「ありがとうございます」

ジョニーは傍に置いていた包みをアンジェリカに渡す。それを開けたアンジェリカは信じられないと言うように目を見開く。

「……これは」

「気に入らなかったか？まあ、それはそうだろうな」

「カカツ」とジョニーは笑う。

その剣は……いや、それは剣とも呼べないだろう。

何故なら、包みの中にあつたのは剣の……柄……だけだったからだ。

「……………」

「うん？意外だな。てっきり何か言ってくるかと思ったんだが」

「祖父が言っていました。……もしお前がジョニーに剣を作つてもらう事があれば、その剣に対して何も不平不満を言つてはならない。後で恥をかくだけだ……と」

「カカツ。体験談だろうなそりゃあ」

「なので、私は何も言いません。ちなみにこれは鉄を？」

「いや、使つちやいない。この柄自体はただの柄だ。見た目はな」

鉄を使つていない、つまり『鉄』で生成するのは不可能という事だ。

「ま、そのくらいなら荷物にもならんだろ」

「はい……これの名は？」

「ああ、名前はあんたに任せるよ」

「?どういう……」

「俺は打った剣に名前は付けないんだ。使い手が付けるのが一番つて思ってるんでな」

「……分かりました。ありがとうございます。これから大きな仕事があるので、それが片付いたら改めて御礼に参りますので」

「……その仕事つてのは、ケツアルコアトル討伐、か？」

「……」

「図星みたいだな。まあ、止めはしない。だが」

「?」

「ズイバルダより先に死ぬなんて親不孝……いや、爺不幸はしちやならんぞ？」

「……では」

アンジェリカは会釈をすると、『ベイルズ鍛冶』を後にする。
一人になったジョニーはキセルをふかし

「……血は争えないな、ズイバルダ」

と、古い友人の名を呼ぶのだった。

アンジェリカはそのままカーロスを後にし、その日の夕方、ストルトに到着する。

『オーバーレイ超光』の面々には何も言わずに出て行った為、大袈裟に心配されてしまった。

事情を説明し、アンジェリカは

「決戦は明後日だ。選抜部隊の十一人は十分に備えるように！」

こう言うが、アンジェリカはミーシエに告げたように、一人で行く

つもりだった。
それが彼女なりのケジメだったのだ。

次の日の明朝、アンジェリカは仕度を始める。
懐にジョニーから受け取った柄を忍ばせ、一人、宿を抜ける。
生きて帰るのは難しいかもしれない。
それでも、彼女は部下に挨拶する事なく宿を出た。
するとそこには

「お待ちしましたよ、^{ボス}首領」

ケツアルコアトル討伐部隊、総勢十一名が揃っていた。
その中から代表として、槍使いのアンマが前に出る。

「貴様達……」

「まあ、こんな事だろうとは思ってたんだけどね」

「首領、水臭いじゃないですか。俺達も連れてって下さいよ」

「そうそう。伝説魔獣相手に一戦かますなんて滅多に出来ることじゃないですし」

「それに、逝つちまつたあいつらにも面目ねえしな」

「……死ぬかもしれないのだぞ？」

『それがなにか？』

アンジェリカは思わず微笑む。

「私はいい部下を持つて幸せだよ」

「我々は困つた首領を抱えて大変ですけどね」

「なあ。もっと頼つてもらいたいもんだよ」

「……ふふ、ならば、存分に頼らせてもらおう。だが、着いて来るにあたり、一つ条件がある」

アンジェリカは歩き出す。

「誰一人、死ぬ事は許さんぞ」

こうして、アンジェリカを含めた十二人はコルザ山脈へと向かった。伝説を、殺す為に。

数時間後、一行はコルザ山脈の頂に辿りつく。
見たところ、その場にケツアルコアトルの姿は見えない。
しばらく周りを見回してみると、突然、強い風が辺りを吹き抜けた。

「……来たか」

そして、空から巨大な影が落ちてくる。

背には大きな翼を生やし、胴体は蛇のような形態をしており、全長は約三十メートル。

それが風を操る伝説魔獣^{レジンダ}、ケツアルコアトルの姿だった。

「……私が前線を請け負う。貴様達は、隙あらば攻撃を頼む」

「そんな一人で！」

「任せた」

そう言うと、アンジェリカは詠唱を始める。

詠唱を終えると、剣は銀色に輝き出す。

秘剣『ナイトレイジ』、アンジェリカは最初から全力で戦いに臨んだ。

ケツアルコアトルとの距離を一気に詰めると、そのまま斬りかかるが、その一撃は簡単に弾き飛ばされる。

「……斬れ味……に特化した『ナイトレイジ』が、だ。

それはケツアルコアトルの体が『ナイトレイジ』でも斬れないほど硬いわけではない。

ケツアルコアトルの体を覆う『風』の装甲の強度が『ナイトレイジ』の斬れ味を上回るからだ。

レプリカではなく、オリジナルの『ナイトレイジ』ならば、或いは斬る事が出来たかもしれない。

それでも無いものは仕方なく、アンジェリカは態勢を整える。あれだけの巨体を覆うのだ、魔力の消耗は激しい筈。

アンジェリカはケツアルコアトルの魔力切れを狙っていた。

しかし、その認識は甘かったと思い知る事となる。

ケツアルコアトルの爪が、アンジェリカを襲う。

アンジェリカは『ナイトレイジ』で受け止めるが、やはり爪も斬る事は出来ず、アンジェリカの体はそのまま吹き飛ばされる。

何とか受身を取り、立ち上がる。

ケツアルコアトルは追撃を仕掛けようとするが、選抜部隊の攻撃によりそれは阻まれる。

すると、突然ケツアルコアトルは上を向くと、その口に魔力が集まっっていく。

「皆逃げろ！来るぞ！」

そして、ケツアルコアトルの口から巨大な竜巻が放出される。選抜部隊は突然の事に対応出来ず、動く事が出来ない。アンジェリカは歯を食いしばると、『鉄』を発動させる。

が、剣はただの鉄塊としてアンジェリカの前に出現する。

それが、瞬時に出来た最も効率のいい防御手段だった。

だが、伝説魔獣の一撃が鉄塊で止められるはずもなく、アンジェリカの体は吹き飛ばされる。

アンジェリカの甲冑は既にボロボロとなっており、彼女のダメージもまた少なくとも無い。

後ろを見ると、選抜部隊の面々も無傷ではいらなかったらしく、立ち上がれる者はいなかった。

剣は鉄塊のまま碎け、アンジェリカに攻撃の手は残されていない。これまでか、とアンジェリカは腹を括る。

その時だった。

「『飛影槍』！」

アンマの声と共に槍の突きが魔力となってケツアルコアトルに直撃する。

「アンマ！」

「首領！早く逃げて下さい！時間は稼ぎます！」

「馬鹿を言うな！」

「……首領を守れなかったら、バラドーの奴に合わせる顔がねえ……

…早く！」

当然、アンマの攻撃にビクともしないケツアルコアトル。
だが、その矛先は確実にアンマへと向けられる。
アンジェリカは立ち上がる。
そして、懐からあの、柄、を取り出す。

「私の仲間に……手を出すな！」

その瞬間、柄、が光りだしたかと思うと、柄の鏝から一筋の光が伸びる。

それはただの光では無く、魔力の籠もった、光の刀身だった。
アンジェリカもその剣に驚き目を見開くと、その剣の、特性、をすぐさま理解する。。

「……、ジヨニー・ベイルズの仕事にケチをつけるな、か」

アンジェリカはその、柄、に更に魔力を籠める。
すると、刀身は更に伸び、アンジェリカの背丈を大きく上回った。
が、重さはほとんど感じられず、アンジェリカは刀身を見つめる。

「……どうやら、魔力の消耗は激しいようだな。信じられない速さで魔力が減っていくのが分かる」

「ならば」と、アンジェリカは構える。

「一気に決めるしかないようだな」

そう言うと、アンジェリカは一気にケツアルコアトルとの間合いを詰める。

ケツアルコアトルはアンジェリカを爪で狙う。
だが

「ハアッ！」

アンマは『飛影槍』でその爪の軌道をずらした。

「後は頼みます、首領！」

「うおおおおおおおおお」

アンジェリカはそのままケツアルコアトルの下に潜り込むと、その胴体に、柄を振り上げた。

一瞬の間の後、ドパツと大量の鮮血と共に、ケツアルコアトルの胴体は真っ二つに分断される。

ケツアルコアトルは二、三度ほど体を痙攣させると、やがて動かな

くなくなった。

その様子を、倒れながらも見ていた選抜部隊は、やがて糸を切ったように歓声を上げる。

アンジェリカは静かに微笑むと、光が消えた……柄……を見つめる。

「……そう言えば、名前を付けるようベイルズ氏に言われていたな」

アンジェリカはそう呟くと、さっきまでボロボロだったにも関わらず騒ぐ仲間達を見た。

そして、その光景を見たアンジェリカは、その……柄……の名前を決めた。

「光剣『オーバーレイ』……それがお前の名だ」

アンジェリカは珍しく年頃の女の子のようにニッと笑つと、一同に撤収を呼びかけた。

こうして、アンジェリカは伝説魔獣、ケツアルコアトルの討伐に成功した。

これをきっかけに、彼女は後に『ソードオブレジエント伝説剣士』と呼ばれる事になるのだが、それはまた別の話だ。

番外編 4 首領アンジェリカの伝説（後書き）

という事で、アンジェリカさん一行対ケツアルコアトルの対決でした。

前半では久々の登場フランク君w

その祖父は実はズィバルダさんの旧友だと。

最近、人魔戦争というワードを多く出していますが、いつかその辺について外伝とか書いたらいいなー、と思います。

さて、今回、何とかケツアルコアトル相手に勝利を収めたアンジェリカさんですが、あれは『オーバーレイ』がたまたま相性がよかつたというだけで、実際、伝説魔獣というのはめっさ強いんです。

何とか勝利したアンジェリカですが、この後王都に戻った彼女はハルトが行方不明になったと知る事に……。

あと、『オーバーレイ』の特性についてですが、それはいずれ本編の方で語っていこうと思います。

ちよつと今回グロかったかなーと思うんですが、「残酷描写あり」にした方がいいんでしょうか？

どの辺からが残酷描写なのかいまいちよく分からなくて……。

今回は、2章を開始するかもう1本番外編をやるかで、まだ悩んでる次第であります。

どうしたものか……。

同時進行しながら決めようと思ってるんですが、中々決まらないところですよ。

ちなみに、番外編になる場合は「その頃のカーロス」にする予定です。

ハルトの行方不明の報せを受けたフランク、ヨウコ、アンナは……。

2章の場合は、ハルト達が行方不明となった二週間後の王都を舞台にしようと思います。

あと、ようやくずっと出したかった新キャラを登場させられます。

2章『勇者再臨』、1章以上に頑張りたいです。

評価・感想・指摘等頂ければ嬉しいです。

あと、質問も頂ければお答えします。

第16話 学生ラズマの受難（前書き）

2章第1話です。

第16話 学生ラズマの受難

王都ゼブリオ。

魔法大国ジグライオスの中枢である大都市。

そんなゼブリオの中心に位置する王城のテラスに、早朝にも関わらず、ある少女の姿があった。

少女は何をするでも無く、ただテラスから見える王都の風景を眺めていた。

少女の名はミーシエ・マテリア。

実質王国最強の六人である『守六光』の一角を務める少女である。

「……………」

ミーシエは、ただただ広がる広大な王都を眺めていた。
そこに、彼女のよく知る赤髪の女が現れる。

「……………また、ここにいたのか」

「……………アンジエ」

赤髪の女、アンジエリカは嘆息を吐く。
彼女はミーシエの隣りに立つと

「……………」

「……………何か、言ってよ」

「そのつもりで来たのだが……気の利いた言葉が見付からない」
「……あんたらしいわ」

ミーシエは僅かに微笑みを浮かべた。

だが、その笑顔にはどこか無理をしている気色が伺える。

ハルトとディライズが川に落下して、早くも二週間が経過した。

その後、暴れるティナを取り押さえ、一行はバルブに引き返した。

その夜は誰も口を開こうとはせず、バラドールは手から血を流すほど拳を握り締めていた。

そして翌日、土砂崩れの撤去が終わったと聞き、一行は王都に辿り着いた。

ミーシエは『貴族院』に真実を聞くため、謁見を申し出たが、……
搜索は行く……と言うだけで、議員に会う事すら阻まれた。

「……ハルトが行方不明、か。今でも信じられないよ」

口ではこう言うアンジェリカだが、その事を知った時の彼女の荒れ様は酷かった。

ミーシエに掴み掛かり、彼女を罵詈雑言で責め立て、止める部下を蹴散らした。

ケツアルコアトル討伐により、祝勝ムード一色の『超光』^{オーバーレイ}だったが、一気にそれどころでは無くなった。

きっと、今でも内心ではやるせない想いが渦巻いているのだろう。

そんなアンジェリカに、ズイ^{祖父}バルダの襲撃など、告げられる筈も無かった。

「……それで、何の用なの？」
「何の用とはご挨拶だな。友人を気遣って来てはいけないのか？」
「あんたがそんな奴じゃないから言ってるの」
「……失礼な奴だな。まあ、その通りなので何も言えんが」

アンジェリカは顔をしかめると、ミーシエの耳に顔を近付け

「……『貴族院』の議員が何やら動いているらしい」

「……何やらって……何？」

「さあな。詳しくは分からんが、ある物を探し回っているようだ」
「……議員……って事は、そいつが個人で動いてるのよね？」
「だろうな……問題なのは」
「問題なのは？」

「その議員が『十人議員』の一人であると言う事だ」

「！」

ミーシエは、驚きを隠せなかった。

『貴族院』というのは、その名の通り貴族が集まり国王の行政に助力する組織なのだが、自尊心の高い貴族同士が集まり、話がまとまる筈もない。

そこで結成されたのが『十人議員』というもので、『貴族院』の中でも権力・政治力の高い十人が選出され、『貴族院』の最終的な決

定を担う存在である。
ミーシエは顎に手を当て考えると

「……ねえ。前から考えていたんだけど、キャリアオスを襲わせたの
つて、ひよつとして『十人議員』の誰かじゃないかしら?」

「……また随分な事を考えるな貴様は。だが、現状から見てもそうと
しか思えないのも確かだ。『守六光』をも動かすとなると、普通の
議員では無理があるだろう」

「……これはチャンスかもしれないわ」

「?どういう事だ」

「その『十人議員』が探しているものを、私達が先に手に入れるの
よ」

「……達?」

「達」

「……分かった、手伝えばいいのだろうか?まったく。貴様は本当に
私を飽きさせないな」

「これが、一番ハル……ヘイジさんを助ける近道よ。奴らの権力を
利用して、必ず見つけ出す」

「……もし、手遅れだったら?」

「あんたは、川に落ちたくらいで彼が死ぬとでも?」

「思わんな」

アンジェリカは笑う。

「そうだな。そろそろ『貴族院』に一泡吹かせてやるわ」

「一泡くらいじゃ足りないけどね……それで、『十人議員』が探してる物って?」

「ああ……どうやら王都内にあるらしいのだが」

アンジェリカは腕を組む。

「『勇者の遺産』、というものらしい」

王都の下町。

生活に貧困した者が多く暮らす町だ。

ミーシエはここで生まれ、ここで育った。

五年前、母が病気で急死してから軍に入るまで、ずっと一人でこの町を生きてきた。

ミーシエは、今もそのままにしている自分の家に入る。

真昼間にも関わらず、部屋の中は薄暗かった。

「……カーテンくらい、明けなさいよ」

ミーシエは部屋の隅にうずくまる人影に話しかける。
その人影は目を腫らし、頬には涙の跡がくつきりと残っていた。

「……ねえ。いつまでそうしているつもり、ティナ」
「……………」

ティナはうずくまり、何も喋ろうとしない。
この二週間、ずっとこんな調子だ。
デイライズが消えてしまった事が、よほどショックだったのだろう。
そんなティナに、ミーシエは一筋の希望を与える。

「………… 『貴族院』 を追い詰める方法を見つけたわ。成功すれば、二人を探し出せるかもしれない」

「!………… ホント？」
「ええ。だから、ティナも協力してくれる？」

ティナは力強く頷く。

その目からは、確かな意思が宿っていた。

「ありがとう………… じゃあまずは」

ミーシエは部屋のカーテンを開ける

「ご飯、食べましょうか」

所変わって、ここは商業の盛んな王都の北東部。
そんな大通りに、夏休みの朝にも関わらず、学校の制服姿の少年の
姿があった。

「……ようやく、今日で補習も終わりか」

少年は呟く。
短かく切ったその髪は金色に染まっており、服装はだらしなく乱れ
ている。

それがこの少年、ラズマ・エイジスの風貌だった。

ラズマは、前学期の成績が悪過ぎた為、夏休みの間も補習を受ける
羽目になったのだ。

だが、その補習も今日の午前中で終わる。
残り少ない休みではあるが、精一杯楽しむところに決意する。
すると、浮き足立つラズマの横に、いつの間にか同じ学校の制服を
着た少女が共に歩いていった。
ブロンドの長い髪に、眠たそうな眼、そしてすらっとした体躯。
少女は何事も無かったように歩き続ける。

「……………」

「……………マリイ、いつからそこに居やがった」

「お早う」

「お早う、じゃねえよ。大体、何でお前が学校行ってんだよ？補習
無いだろうが」

「いつって……………ラズマが、鼻歌を歌い始めた頃かしら」

「何で質問の答えが一つ前なんだよ」

「手紙が来て呼ばれたの、担任のビツレ先生に」

「無視かよ」

「質問の答えを遅らせてるのは、言うまでも無くわざとよ」

「ふざけんな」

マリイと呼ばれた少女は「冗談は置いといて」と話を仕切り直す。

「ねえ、ラズマ。確か今日で終わりだったよね、補習」

「ああ。ようやく地獄から開放されるぜ」

「でも、宿題はちゃんとやってるの？」

「……………」

「宿題はちゃんとやってるの？」

「何で二回聞くんだよ。ええ、補習が大変ですっかり忘れてました

よ

「やっぱりね。仕方が無いから写させてあげる」

「頼んでねえけどありがとな」

そうこう言っている内に、二人の通う学校、カザリア魔法学校が視界に入る。

王都ゼブリオには、三つの、魔法学校、が存在する。

言うまでもなく、生徒は全員魔術師、及び魔法の素養がある者達だ。教師もまた然り。

入学は十二に、卒業は十八になる歳に行われ、七年間、学校に通う。カザリア魔法学院はその三つの中でも最低ランクで、落ちこぼれの巣窟、とさえ呼ばれていた。

ラズマはマリイの方をチラリと見やる。

マリイ・レウズ。

二年前、ラズマ宅近所に引っ越してきた、大商人の一人娘だ。その魔法の素養の高さから、当初は三つの魔法学校の中でも最難関である、ゼブリオ魔法学園の編入試験を見事合格してみせたのだが、優秀な彼女を妬む輩は多く、それに耐え切れなかった彼女はある、事件、を起こし、ラズマもそれに加担した。

結果、マリイはカザリアに転入する事になり、ラズマもその、事件、がきっかけで、学校側から問題児扱いを受け始めた。

ラズマは、マリイに協力した事を後悔はしていない。

だが、マリイがその事に対し、ラズマに罪悪感を抱いている事を、彼は知っている。

果たしてこのままでいいのか？

そんな事を考えていると、マリイがラズマの顔を覗き込んできた。

「……………」

「な、何だよ」

「ラズマ」

「ん」

「変な顔してる」

「……………考え事してたんだよ馬鹿野郎」

そう言っていると、ラズマはふて腐れたように学校の校門をくぐった。

ようやく昼となり、ラズマは補習と言う名の地獄を終え、その開放感に浸っていた。

マリイには玄関で「多分昼までには終わるからちょっと待っていて」と言われており、ラズマは「いつ一緒に帰る事になったんだ」とツッコミながらも、教室にて彼女の帰りを待った。

だが、三十分以上待っても一向にマリイは現れない。

不審に思ったラズマは、教員の集う職員室へと向かう。しかし、担任のビツレに聞いても

「レウズに手紙？俺がか？いや、出した覚えは無いが……」

ラズマの不安は益々増徴する。

いても立つてもいられず、ラズマは学校中を探し回った。

警備員によると、今日学校から出た生徒は、補習に来ていた者達しかいないらしい。

学校の敷地内にいる事は分かったが、依然としてマリイの姿は見当たらない。

だが、これだけ探しても見付からないのだ。

迷ったラズマは、もう一度ビツレを尋ねる。

「どうしたエイジス。そんな息を切らして」

「ハア、ハア……先生、ちょっと、お願いが」

ラズマはマリイがビツレからの手紙をもらい、彼女の姿が見当たらない事をビツレに伝える。

「……確かに、それは変だな」

「それで、先生に……『素』をお願いしたいんですけど」

『索』というのはビツレの魔法で、自身から最大半径五百メートル以内の範囲を……見る……事が出来るものだ。

「……分かった。そういう事なら仕方ないな。ちょっと待ってる」

そう言つと、ビツレは詠唱を始める。

やがて目を閉じると、『索』の発動に集中する。

その時

「……ん？これは……！ガッ、アアアアアアア！」

突然ビツレは叫び出したかと思うと、その口からは血が流れて出すラズマはとっさに、倒れるビツレの体を受け止める。

その時、職員室にいた他の教員達が、何事かとビツレに駆け寄る。

「先生！」

「……！これは……」

保険医の教員が、ビツレの机の上にある湯呑みを見て驚く。

「……どうしたんですか！？」

「……神経性の毒だ。魔力の行使に反応し、使用者の体の自由を奪

う。おそらく、それが湯呑みに……」

「そんな……助かるんですか？」

「……時間の問題だ。出来るだけ早く治療を施さねば……」

保険医がそう言つと、ビツレが咳き込みながら

「……エイ、ジス……レウズは、追われ……講堂、隠れ……」

そこまで言つた後、ビツレは意識を失つた。

弱くなっているが、脈はあるので生きてはいるだろう。

ラズマはその場の教員達にビツレを頼むと、彼の言っていた講堂へと向かった。

カザリア魔法学校には、校舎から少し離れた所に大規模な講堂が存在する。

だが、去年から講堂は閉鎖になっていた筈だ。

だが、扉の錠は破壊されており、扉は半開きになっていた。

誰かが侵入したのは明らかである。

ビヅレは、マリイが追われていると言っていた。

ラズマは慎重に講堂の中を進んでいく。

去年までの記憶が正しければ、応接間、廊下、ホールと続いていた筈だ。

ラズマは応接間を通り、廊下を進む。

すると、後ろからガタツと、何かの物音が響いた。

恐る恐る、音の方を振り向くラズマ。

そこには、黒装束に全身を包み、性別さえ不明な者の姿があった。

黒装束はラズマの姿を捉えると、姿勢を低くする。

いつの間にか、その手にはナイフが握られていた。

「……………ひょっとして、暗殺者の方、とか？」

黒装束はその質問に答えず、ラズマに襲い掛かる。

「何かそれっぽいなオイ！」

その動きは、到底ラズマの目で追えるような速さでは無い。

それを知ってか知らずか、ラズマはホールへと走り出す。

黒装束のナイフがラズマを捉える。

が、それは彼の右肩を掠めるだけに終わった。

「うおっ、危ねえ！」

そう叫んだと共に、ラズマはホールに逃げ込んだ。

ホール内は、カーテンが閉め切つてある為、昼間にも関わらず暗闇に染まっていた。

黒装束は立ち止まり、ある疑問を持つ。

今の攻撃は、確実にラズマの心臓を捉えた筈だ。
しかし、予想に反し、ナイフは右上に逸れた。

「（どういう事だ……？）」

黒装束はラズマを探しながら考える。

だがそれが、ラズマを舐め過ぎていたのが、黒装束の失敗だった。

結果として、黒装束はラズマの隠し持っていた小槌を後頭部に受け、意識を失った。

ラズマは足で黒装束を小突き、気絶した事を確認する。

「……いよいよ、やべえな」

さっきのような黒装束がもっていないとは限らない。

ラズマは黒装束の装飾品を物色する。

その際、黒装束の体に触れ、女である事が分かったが、今はそれを喜んでいる場合では無い。

その時、ラズマの肩に何者かの手が置かれた。

ラズマは、体をビクツと震わせる。

「しっ。大声、出しちゃ駄目、ラズマ」

「！……マリイか？」

「うん」

「探したぞ！どこ行ってたんだ……心配させやがって」

「……心配、してくれたんだ」

「……流れで言ったただだよ」

「ありがとう」

「相変わらず人の話は聞かねえのな……んで、この黒い奴は誰だ？」
「……分からない。ビツレ先生のところに行こうと思ったら、同じ所を何度もぐるぐるしてて……多分、幻系の魔法か何かを、かけられてたんだと思う」

「……幻系か。相手はこいつだけか？」

「ううん。あと二人くらい、いた」

ラズマは思わず舌打ちをする。

この黒装束の女には何とか勝てたが、それは運が味方しただけに過ぎない。

そんな二人に勝てると思うほど、……落ちこぼれ……と呼ばれるラズマは自惚れていない。

「よし。じゃあ、とつとと逃げるぞ」

「……出来ないの」

「何言ってるんだ。早くしないと」

「早くしないと、何だ？」

その時、ホールに明かりが生まれた。

一斉にカーテンが開いたのだ。

そして、ホールの中心に一人の女が立っていた。

その女は、黒髪をポニーテールにして束ね、夏にも関わらず分厚いコートを着ている。

「……間に合わなかったみてえだな」

「否。間に合っていた所で貴殿の運命は変わらない」

女はゆっくりと歩を進めながら腰の剣を抜く。

「死、あるのみだ」

ラズマは、これまで感じた事もないような殺気を覚えた。
何とか時間を稼ごうと、ラズマは口を開く。

「……お前は、誰だ」

「名乗る必要は無い……行かせてもらおう」

女は、ラズマとの間合いを一気に詰め、剣を一突きする。

それは黒装束の女同様、確実に彼の心臓を捉えた一撃だった。

しかし、それもまた黒装束の女のナイフ同様、右上にずれた。

ラズマは一步もその場を動いていないにも関わらず、だ。

正確に言えば、ラズマは女の動きを目で追う事すら出来なかっただけなのだが。

「ッ！」

女は後ろに下がる。

「……何をした？」

「……こっちの台詞だったの。人間の動きじゃねえぞ」

「……ソロンだ」

「？」

「貴殿が聞いたのだろうか？私の名はソロン……久々に血の疼く相手に出会えた。続けようか」

ソロンと名乗ったその女は構える。

ラズマも、マリィを下がらせ、小槌を持ち直した。

こうして、一人の男の、少女を守る為の戦いが幕を上げた。

第16話 学生ラズマの受難（後書き）

という事で、あれから二週間後のミーシエとティナ、アンジェリカさんと、新キャラであるラズマ君とマリイさんに登場して頂きました。

ラズマ君にはまだまだ目立ってもらおう予定ですw

評価・感想・指摘等頂けたら嬉しいです。

質問も、頂ければお答えします。

第17話 暗殺者ソロンの悦び（前書き）

サブタイトルに詰まってきました。

第17話 暗殺者ソロンの悦び

ホール内は、静寂に包まれる。

やがてソロンが動き出し、ラズマを突きで狙う。

が、初撃と同様にその剣は右上に逸れた。

ラズマも、またもやソロンの動きを捉えられず、一步も動けていない。

しかし、それは隙だらけのソロンを攻撃するには格好のチャンスだった。

そして、ラズマは女と言えども、この好機を逃すほど馬鹿でもお人好しでもない。

ラズマは小槌を握り直すと、ソロンの腹にそれを叩き込む。

だが、ソロンは呻き声一つ上げず、それどころか、その場を動きすらしなかった。

「……どんな腹筋してやがる」

「ふむ。この筋力では、私の目にも止まらない速度で攻撃をかわしている、という事は無さそうだな……となると、やはり魔法か」

「だったらなんだよ」

「……私は職業上、常人よりは魔法に詳しいつもりだ。だが、さっきの……現象……が魔法だとすると、私はそれを知らない。それはおかしい。幻系ならば納得も出来るが、それなら私の認識を外し、この場から逃げる事も可能だった筈だ……分かんない。貴殿は何者だ？」

「何者って……どこにでもいる善良な都民且つ、前途多望な学生だよ」

「ふっ、面白い冗談だ」

「……その冗談ってのは、善良な市民ってところか？それとも前途多望ってところなのか？」

「どっちともじゃない？」

「お前ちよつと黙ってるや」

ラズマがマリイを睨んでいると、ソロンは剣を構える。

「まあ、貴殿の魔法が何であれ、私はただ斬るだけだ」

「そう言わずにさ、平和的に行こうぜ」

「無理な相談だ」

そう言うと、ソロンは再び走り出す。

さすがに目が速さに慣れてきたラズマは、それを間一髪でかわし、もう一度小槌を腹に叩き込む。

だが、やはりダメージは受けていないようで、ラズマは慌てて距離を取る。

「……このままじゃ消耗戦だな……俺の魔力もいつまで持つか……」

「……どうするの？」

「どうするって……三十六計？」

「えっと……何だっけ？」

「お前は本当にシリアスブレイカーだな」

「ちよつと言ってる意味が分かんない」

「まあ、要するに……逃げるって事だよ！」

ラズマはマリイの手を引き、ホール入り口へと走り出す。
当然、ソロンはラズマ達を追う。

「やっぱり追うよな……けど！」

ラズマは懐に隠しておいた煙幕玉をソロンに投げつける。

それは、一度何らかの衝撃を受けると、たちまち煙が噴き出すつくりになっていた。
だが

「温い」

「げっ」

ソロンが剣を一振りすると、煙幕玉は真つ二つに切断される。
やがて、ソロンの数メートルほど後方にて、煙幕が噴き出す。
ソロンはじわじわと、ラズマ達との距離を詰めていく。

「……じゃあ、これでどうよー！」

ラズマは、もう一度ソロンに煙幕玉を投げる。

「無駄だ」と呟き、剣を振るソロン。

しかし、煙幕玉はラズマの……魔法……により、ソロンの数歩手前

で剣の上方へ消えると、そのまま彼女に当たる。

瞬間、一気に煙が噴き出した。

「ッ……！小癩な！」

ソロンは剣を振り回し、煙幕を払う。

が、煙が晴れた時、既にラズマ達の姿は無かった。

「逃げられちゃいましたね」

まるで、何時間も前からそこに居たかのように、厚いコートを着た女が呟く。

「……バンデか。目標は講堂から？」

「ええ。脱出したようです。私も『幻』で阻止しようとしたんですが……効かなかったんですよ、何故か」

「……ここに追い込む際、目標に『幻』は効いていたんだっただな？」

「ええ。つまり、考えられるとしたら」

「あの男の魔法、か」

ソロンは剣を腰の鞘に収めると、壁にもたれかかり腕を組む。

「ペレトウは？」

「気絶してるだけでした。油断したんでしょうね」

「まったく。敵を見くびるからだ……私も人に言えた口じゃないが」
「手、抜いたんですか？」

「……いや、少なくとも全力で殺しに行ったつもりだ……だが」

ソロンは顎に手を当て

「底が見えない、と言うのだろうか？少なくとも、ああいった輩を相手にしたのは初めてだ」

「……楽しそうですね、ソロンさん」

「楽しい？……そうか、楽しいのか。忘れていたよ」

「……それで、どうするんですか？」

「そうだな。とりあえず、あの男の素性を調べてくれ。確か、学校の方はまだ夏季長期休暇というやつらしい。学校に来ている者たくさん、大分絞り込める筈だ」

「了解です。それから？」

「決まってるだろう」

ソロンは、ホールへ向かい歩き出す。

「付近一帯に『部隊』を手配しろ。最低でも、二日後までに目標を捕縛する」

ラズマが謎の集団と交戦した翌日。

そんな事を知る筈もないミーシェとティナは、王都の中心街を回っていた。

昨日から、『勇者の遺産』について『オーバーレイ超光』の面々と共に調べ回っているのだが、一向に手がかりが見付からない。

「……さっぱりだね」

「そうね。まあ、『十人議員』でも見つけられないものなんだし、そう簡単にはいかないわよ」

「……ケイトなら何か知ってるかもしれないんだけど」

王都に戻った数日後、ミーシェはケイトに話を伝える為、ピリンクとパラソスを学術都市シアンテへと遣わせた。

だが、ケイトの姿は家に無く、地下の研究所ももぬけの殻だった。

「まあ、ケイトの事だし、いつかフラッと戻って来るんだろうけどさ……タイミング悪いね、ホント」

「そうね……せめて、『勇者の遺産』がどんな物か分かればいいん

「ただ……」

「さっぱりだよ……大体、勇者って誰の事？」

「勇者ね……有名な伝承で言えば、『英霊ギルガメッシュ』、『英雄王アーサー』とかが有名ね」

「英霊？」

「死亡した人の魂に敬意を込めて呼ぶ言葉よ。一説によると、ギルガメッシュは死後、ジグライオスに迫る軍勢を、たった一人で薙ぎ倒したそうよ」

「え？でも死んだんじゃ……」

「そこがギルガメッシュが英霊と呼ばれる所以よ。彼は魂のみで戦場に現れ、一晩中暴れまわったそうよ……ま、あくまで伝承だけど」

「へー……『英雄王アーサー』っていうのは？」

「えっと……確か、隣国ザピリスの伝承で、伝説の剣を手に、竜を斬ったとか、巨人を倒したとか……」

「……随分と胡散臭いね」

「伝承なんてそんなもんよ。それでアーサーは、ザピリスの英雄王として名を残したの」

「王様に？」

「巨人退治云々はともかく、王だったのは確かよ。それも、戦場では相当優秀な指揮官だったらしいわ」

「……でも、二つの伝承も、勇者……って名はついてないんだね」

「そうね……あっ！」

「な、何？」

「……あまり知られてないけど、十年前の『人魔戦争』で……、勇者……と呼ばれた男が居たらしいわ」

「そ、そんな大事な事を何で！……あまり知られてない？」

「……ええ。軍上層部が、情報が漏れないよう緘^{かん}口^{くち}令^{れい}が発せられたそうよ……今思えば、『貴族院』の命令だったのかもね」

「それはまた、きな臭いね……でも、どうして？」

「さあ……この事は口外禁止と言われるほどだから、私も詳しくは知らないわ。でも、もし緘口令を発したのが『貴族院』だとしたら……その話が『勇者の遺産』に関わってる可能性は十分にあるわ」「なるほどね……それで、その……勇者……って？」

「……その男の名は、ノヴァ。『人魔戦争』において、魔王を討ち取ったとされる者よ」

その頃、王都北東部のとある小さな民家。

玄関には、エイジス……と書かれた立札が掛けてある。

昨晚、ラズマとマリイはここで一晚を過ごした。

とは言っても、手を出す勇氣など米粒分もないミスターチキンことラズマは、床で眠る事になったのだが。

一人、ベッドで寝るのが心苦しかったのか、マリイは「一緒に寝る？」などと言い出したが、ラズマは赤くなった顔を見られないようにするので精一杯だった。

「……で、本当に奴らには心当たりが無いんだな？」

ラズマは再び両手拳を握り締める。
慌てたように、首を横に振るマリイ。
ラズマはもう一度「ったく」と呟くと

「……………んで、何て言ってたんだ？」
「よく、分からない。聞き取れたのは一言だけだったし」
「そうか……………まあ、参考になるかもしれないし、とりあえず何て言
つてたか聞かせてくれ」
「分かった。えっと……………」

マリイは頭に手を当て、昨日の事を思い出す。
やがて、手をポンと叩き

「うん、思い出せない」
「……………」
「ゴメン、悪かったからその手をしまつて」
「……………で、何て言ってたんだ？」

「『勇者の遺産』」

「ん？」
「あの人達、私の事を一度だけ、……………『勇者の遺産』の鍵……………って
呼んでた」

「鍵？『勇者の遺産』？……………分からねえな。お前は？聞いた事とか」

マリイは首を振る。

「知らない。身に覚えがないわ」

「そうか……んー、謎が深まっただけだな」

ラズマは腕を組み、「んー」と唸り続ける。

マリイもそれを真似て腕を組む。

すると、家の外からドオン！と、爆発音のような音が鳴り響く。

ラズマとマリイは顔を合わせ、急いで外へと向かう。

外に出たラズマは、破壊されている民家と、その近くに見える人影の姿を見て、ギリツと歯を食い縛る。

「もう来やがったか……！」

その人影は、昨日ラズマを襲撃した黒装束と同じものを纏っていた。黒装束は、ラズマの姿を確認すると

「…………ラズマ・エイジスか？」

それは、低い女の声だった。

「……名前も割れちまったらしいな。ああ、そうだ」
「では、そこにいる女が目標で間違いないようだな」

そう言うと、黒装束の女は右手をラズマに向けると、その手から炎弾が放たれる。

「炎系の魔術師か」と、ラズマは冷静に分析する。

炎弾は、ラズマの……魔法……により、直撃する数メートルほど手前で、上方へと軌道が逸れた。

女は右手を下ろす。

黒装束でその顔は見えないが、どうやら笑っているようだった。

「どうやら、ソロン隊長の言う通りだな。そんな魔法、見た事も無い」

「……だったら、もう分かるだろう？これ以上やってもお前の負けは明らかだ。さっさとここから出て行きやがれ」

「残念ながら、私の任務は目標と貴様を捕縛する事だな。受けた任務は最後までやるタイプだ」

そう言うと、女は詠唱を始める。

ラズマは「げっ」と小さな悲鳴を漏らすと、マリイの腕を引き、女と反対の方へと走り出す。

女は「無駄だ」と言うと、炎弾をラズマに放つ。

ラズマは自身の……魔法……で炎弾を上逸らす。

が、ラズマは女の魔法が『追尾炎弾』である事に気付けなかった。

炎弾は上空で旋回すると、もう一度ラズマに向かっていく。

ラズマは驚いたように目を見開くと

「なっ！……追尾型か！」

ラズマはもう一度、魔法……で軌道を逸らすが、炎弾は消える事無く、ラズマを狙い続ける。
このままでは埒が明かない。
そう考えていると、ラズマは足元の小石に躓いてしまう。

「しまっ……！」

「ラズマ！」

咄嗟の出来事に、ラズマの……魔法……は解け、無防備となってしまふ。

マリイはラズマの上に覆いかぶさった。
そして、二人を炎弾が狙う。
その時だった。

突然、巨大な人影が二人の前に立ち塞がった。

「！？」

ラズマは突然の出来事に困惑する。
するとその人影は、視線だけラズマに送り

「安心しろ、味方だ」

そう言うと、その人影は腕を炎弾に向ける。

「危ない！」とラズマは叫ぶが、人影は何も言わず

すると、炎弾は音も無く、その腕に、吸い込まれた。

他にも言い様はあるだろうが、その光景はまさに、吸い込まれた、という言葉が相応しかった。

黒装束の女は驚いたように目を見開く。

それは、人影の腕によつて炎弾が消し去られたからでは無く、その男の顔を見たからだつた。

「……何故、お前が……！」

女は体を震わせる。

「……ちよつと人探しをしてたんだが、思わぬ現場を目撃した、っていう話だ」

ラズマは立ち上がると、その人影の姿をまじまじと見つめる。

言うまでも無く男で、巨大な体躯に、その背には巨大な槌が担がれていた。

女は歯を食い縛ると、その男の名を口にす。

「……『ウィザードブレイカー魔術師潰し』のバラドー……！」

バラドーと呼ばれたその男は、口の端を吊り上げると、顎を撫でる。

「……お前さん、ブロンドウェイの駒だな？ 確か……名前はチエイズ、だったか？」

「………」
「無言つて事は、どうやら当たりみてえだな。そんじゃ」

バラドーは背から大槌を取り出す。

「教えてもらっぜ。ブロンドウェイの情報、知ってる限りな」

バラドーは槌を構える。

その姿を、ラズマはただ見ているしかなかった。

第17話 暗殺者ソロンの悦び（後書き）

ということ、ラズマ対ソロン、『勇者の遺産』に触れていきました。

ようやくブラドローさんの登場……トリシアさんはもう少しお待ちをW
次回、ブロンドウェイの新たな刺客が……そして、ミーシエ達は勇者ノヴァについて調べるが……という感じになると思います。

評価・感想・指摘等頂けたら嬉しいです。

質問も頂ければお答えします。

第18話 魔術師漬しバラドーの再来（前書き）

今回、ちょっと短めです。

第18話 魔術師潰しバラドールの再来

黒装束の女、チエイズは忌々しそうに舌を打つ。

彼女は、巷では『魔術師潰し』ウィザードブレイカーと呼ばれているこの男を知っていた。

一度だけこの男、バラドールの戦いを見た事があるのだ。

『オーバーレイ超光』への依頼で、王都近辺を荒らし回った魔術師を拘束した時の事とだった。

相手は『弾』の魔術師で、手から魔力の弾を撃ち出すという魔法の使い手。

しかしその魔術師は、五発ほどの『弾』を撃った後、バラドールの『吸』によって生じた魔力を一身に受け、全治三ヶ月の大怪我を負う事となった。

その光景を影から見ていたチエイズは、……この男との戦いだけは避けなければならない……と肝に銘じた。

だが、この状況ではそういうわけにもいかない。

チエイズは深呼吸をすると、目の前の敵を見据える。

その顔を見たバラドールは、ニツと笑う。

「いい顔じゃねえか。アツシに対する怯えが無くなった」

「……………」

「それじゃあ……………行くぞ！」

バラドールはチエイズに向かって突進する。

チエイズは自身の魔法、『炎』を発動させる。

『火』と『炎』、この二つの魔法の違い、それは範囲によるものだ。

性質や威力自体は、どちらもほとんど違いは無いのだが、『炎』の攻撃範囲は『火』の二倍から五倍まで拡張すると言われている。

チエイズは、即座に炎弾をバラドーに放つ。
バラドーはそれに対して『吸』は使用せず、その前に『吸』によって生じた魔力をその炎弾にぶつけ、相殺させる。

その行動は、チエイズの中で組み立てていた……ある仮説……を成り立たせた。

彼女が知りたかったのは、……『吸』で吸収出来る魔力の限界……だ。

先ほどの様子を見る限り、バラドーはチエイズの炎弾を一発までしか吸収出来ないらしい。

それさえ分かれば、少しはまともに戦える。

チエイズは、襲い掛かるバラドーの槌をかわすと、隙だらけの脇腹に炎弾を放つ。

「何度やっても無駄だ」

バラドーはそれを吸収し、もう一度槌を振るう。

チエイズは身軽な動きでそれをかわし、バラドーから距離を取る。

「……ちよこまかと動き回りやがって」

「貴方と戦い合うのなら、これくらいは当然だろう」

チエイズはそう言うと、『炎』による広域炎弾をバラドーに放つ。範囲が広く、避ける事も出来ないその炎弾に、バラドーは顔をしかめ『吸』でストックしていた魔力をその炎弾と相殺させた。チエイズはその隙を逃さず、バラドーに三発の炎弾で、追撃を仕掛ける。

直後、爆音が鳴り響き、辺りが土煙に覆われた。

だが、チエイズは追撃の手を緩めず、詠唱を始める。

『追尾炎弾』の二倍ほどの長さはある詠唱の後、チエイズの右手が『炎』で覆われた。

その名も『フレアグラブ』。

『炎』の特性を最大限にまで活かした技で、遠距離、近距離、どちらにも対応する事が出来る。

チエイズは土煙の中を進み、バラドーの姿を探す。

今の攻撃、『吸』を使っても全てを吸収する時間は無かった。

つまり、少なからずダメージは受けている筈だ。

あの巨体と言えども、手負いで『フレアグラブ』を受ければひとたまりも無い。

チエイズはそう考えた。

確かに、その推測は間違っていないだろう。

ただし、バラドーがダメージを受けていればの話だが。

突然、チエイズの左方から巨大な影が現れる。

言うまでも無く、バラドーである。

「なっ！」

驚くチエイズを尻目に、バラドールは槌を打ち込む。
チエイズは腕をクロスしてガードするが、魔力の上乗せされたその一撃に、彼女の体は宙を舞った。
受身を取れず、体が地面に叩きつけられる。

「ガッ………！」

「勝負あり、だろ？これ以上の無理は体に毒だぜ」

バラドールは、悠然と、槌を肩に担ぐ。

それは余裕綽々といった様子で、とてもダメージを受けているようには見えなかった。

チエイズはよろよろと立ち上がり、痛みに顔を歪める。

「……何故だ。『吸』によって吸収出来る魔力は……」

「お前さんの魔法一撃分しかない、ってか？」

「……！まさか」

バラドールは笑う。

「アツシが『魔術師潰し』と知って喧嘩を売る魔術師は結構多くてな。お前さんみたいな策を取ってくる奴とは腐るほど相手してんだよ。大体、お前さんの攻撃程度を一発しか吸収出来ずに、『魔術師潰し』は名乗れねえよ」

「……どうやら、アンジェリカ氏以外の魔術師相手に、負け無しという噂は本当だったようだな」

「……いや、間違いだ。この場を借りて訂正しとくぜ」
「……？」
「残念ながら、二週間くらい前に、三人の魔術師のせいで、その噂は破綻しちまったんだよ」

バラドーは憎々しげに呟く。

「一人は十三の女の子。一人は無口な青年。もう一人は……『火』の魔術師だ」
「……何？」

自分と同じ系統の魔法の名を聞いて、チエイズは怪訝な顔になる。

「……馬鹿な。『火』如きが……」
「確かに、お前さんの魔法はそいつより上だったよ。でもな、戦略はお前さんのを遥かに上回ってたぜ」
「……」

「お前さんは、魔法と自分の身体能力に頼り過ぎなんだ。戦略も悪くないが、一般レベルは抜け出せてねえ」

バラドーの言葉に、チエイズの眉間の皺はどんどん深くなる。しかし、そんなチエイズをお構いなしに、バラドーは

「ま、つまりお前さんは、裏稼業をやるには脳筋過ぎるんだよ」

バラドーが言えた台詞でも無いが、それを聞いたチエリズは激昂し、『フレアグラブ』が消えていない右手を、バラドーに向ける。前述した通り、『フレアグラブ』は近距離、遠距離共に対応する事が出来る。

近距離は言うまでも無く、殴る事によってその効果を發揮する。対して、遠距離攻撃はと言うと、『フレアグラブ』に込められた魔力を竜巻状にして放つのだ。

チエイズは、怒りに身を任せ、渾身の力でそれを撃ち出す。

「……やりゃあ出来るじゃねえか」

バラドーは槌を地面に突き立て、両手で炎の竜巻を受け止める。数秒の後、それはバラドーに吸収された。チエイズは体を震わせ、その場に崩れる。

「そん……な」

「……今度こそ終わりだ。さあ、喋ってもらおうぞ。ブロンドウェイの情報にな」

チエイズは、恐ろしい形相でバラドーを睨みつける。

「……喋るわけがない、そう言いたげだな？仕方ねえ。お前さんを拘束してから色々と聞かせてもらおう」

バラドールの言葉に、チエイズは再び怪訝な顔になる。
チエイズのスピードは、バラドールも確認している筈だ。
傷は深いものの、これほどの距離があれば、彼女にとって逃げるの
は造作も無い事だろう。
チエイズの顔を見たバラドールは、槌を担ぎながら笑ってみせる。

「まあ、アツシが拘束するとは一言も言っただねえがな」

その言葉の意味を、チエイズは後頭部に強い衝撃を受け、振り返り、
ようやく知る事が出来た。
彼女の視線の先、そこには、小槌を振り下ろしていたラズマの姿が
あった。

薄れゆく意識の中、チエイズは呟く。

「……要は使しよう、か。勉強に、なった」

チエイズを縄で縛り、ようやく一息着くラズマ。
また敵が来ないとも限らないので、マリイは家の中で休ませた。

「ふう、助かったぜ……えっと」

「バラドーだ」

「ありがとな、バラドーさん。俺はラズマ・エイジス、あいつはマリイ・レウズだ」

「礼には及ばんさ。アツシも、この女には用事があったところだしな……ところで、お前さん方、この女に襲われていたみたいだが？」
「……よく分からねえんだ」

ラズマは、昨日の出来事をバラドーに話す。

バラドーは、話が進むにつれ、眉間の皺が深くなっていった。

「……あの女、マリイだったか？そいつを襲ってきたのか？そのソロンって女が」

「え？ああ……ソロンって奴、知ってるのか？」

「……ブロンドウェイの側近だ」

「そっぴやさ、そのブロンドウェイって奴誰？」

「ああ、そうか。知らないのが普通か……シャルロット・C・ブロンドウェイ。『十人議員』の一人だ」

さすがに『十人議員』の名は知っていたのか、ラズマは「マジかよ」と息を呑む。

「……でも、『十人議員』なんてお偉いさんが、どうしてマリイを？」

「さあな……ソロンは、他に何か言っただけでなかったか？」

「あいつは別に何も言わなかったけど……マリイが、そいつらが『勇者の遺産』とか何とか言っただのを聞いたんだと」

「『勇者の遺産』……きな臭え言葉だな。とりあえず、それが鍵になりそうだな……一ついいか？」

そう言うと、バラドーはラズマに歩み寄る。

「何でも言ってくれ。俺に出来る事はやらせてもらおう」

「いや、大した事じゃないんだが……アッシは雇ってもらえねえか？用心棒として」

「……そりゃあ願ってもない話だけどよ……金なんかほとんど無いぜ？」

「報酬は刺客から剥ぎ取った戦利品と、聞き出した情報だけで構わないさ」

「そんなんでよければ喜んでお願いするぜ……で、これからどうすればいいと思う？」

「とりあえず、ここに居たら危険だからな。王都の中心部へ向かうぞ。そこに、アッシと同じ目的を持つ奴らが居る筈だ」

「……そういや、バラドーさんは何でブロンドウェイを嗅ぎ回ってるんだ？」

ラズマはふとした疑問をぶつける。

バラドーは、少し視線を落とし

「……ある人を、探し出してえんだ」

一方その頃、ミーシエ達二人は、王城の資料室に居た。
『勇者の遺産』、そして勇者ノヴァについて調べる為だ。

「勇者ノヴァ……勇者ノヴァ……うーん、こつちには見付からないよ」

「……！あつた」

ミーシエが報せる吉報に、ティナは目を輝かせて、その資料を食い入るように見つめる。
どうやら、ノヴァ本人に関するものでは無く、『人魔戦争』の資料のようだった。

「おそらく、ノヴァについての資料は残って無いんでしょうね。王

都がひた隠しにするくらいだし」

「……えっと、知らない字だよ？」

「……これは、暗号ね。情報を外部に漏らさない為の」

「……読めるの？」

「多分……えっと、……十月十五日、魔王が根城とする城に突入、」

「」

「おお！」

歓声をあげるティナ。

ミーシエはそのまま読み進める。

「……ジグライオス軍は、前線を切り込む二十人程度の部隊を編成

……二十人とは、随分と少数ね」

「そ、それで？」

「……ここに、その二十人の名を記す。『ノヴァ・ロード』、『サ
ーティス・エツジボルグ』、『バージイ・トレイト』、『ズイバル
ダ・ナイトレイジ』……ズイバルダさんも居たんだ……それに、
エツジボルグって、確か『十人議員』の筈よ」

「……やっぱり、『貴族院』が関わってたんだね」

「みたいね……続き読むわよ。……『ジヨニー・ベイルズ』、『バ
ゾル・ドウ』……！」

突然、ミーシエが読むのをやめた。

その目は、驚きによって見開かれていた。

「な、何？何が書いてあったの？」

ティナは困惑する。

ミーシエは、深呼吸をすると、その資料に書いてあった名を述べる。

「……『フォルス・ヘイジ』……」

「……え？それって確か……」

ティナは必死に記憶を辿る。

どこかで聞き覚えのある、その名前の記憶を。

そして、ようやくその答えに辿りついた。

「……ズイバルダって爺ちゃんが言った……それにヘイジって……」

「……ええ」

ミーシエは、汗を流しながら、その答えを口にす。

「おそらく、彼の……ハルト・ヘイジの祖父よ」

第18話 魔術師漬しバラドールの再来（後書き）

という事で、バラドールさんに活躍してもらいました。

『火』の上位魔法にあたる、『炎』が登場しましたが、この辺の説
明もその内説明していきたいです。

あと、お気付きの方もいらっしやるかもしれませんが、2章のタイ
トルを「勇者再臨」から「勇者の遺産」に変更させて頂きました。
やはりこっちの方が2章に合ってるかなーと思った次第です。
まことに申し訳ありませんorz

次回、いよいよブロンドウェイが動き出す予定です。

果たして彼女の取った策とは……ラズマに、最大の危機が……？
といった感じにしようと思ってます。

評価・感想・指摘等頂けたら幸いです。

質問も頂ければお答えします。

第19話 十人議員シャルロットの画策(前書き)

投稿まで大分かかってしまいましたorz

第19話 十人議員シャルロットの画策

バラドー達がチエリズを拘束し、ミーシエ達が衝撃の事実を知ったその日の夜。

王都の中心地、とある豪邸にて、跪くソロンと、不機嫌そうな女の姿があった。

女は、見た目は三十程度だが、その実、四十を超えていた。女の名はシャルロット・C・ブロンドウェイ。

ソロンの上司にして、『十人議員』の一席を務めている。

「……チエリズが捕まった、と」

「はい、おそらくは『魔術師潰し』……申し訳ございません……この責任は全て『部隊』を率いた私に……」

「……まあ、予定外の事態です。今回は大目に見ましよう……が、『魔術師潰し』が出てきたとなると、手駒で少々手こずってしまいですね」

シャルロットは茶を啜る。

「……仕方ありません。奥の手を使いましょう」

「奥の手、と言いますと？」

シャルロットは、もう一度茶を口にし、ゆっくりと立ち上がる。

「ソロン、出掛けますよ。準備なさい」

「……シャルロット様も、ですか？」

「いけませんか？」

「い、いえ」

珍しくソロンが動揺する。

このシャルロットという女は、今まで汚い仕事は全て『部隊』や部下達にやらせてきた。

外部との接触も極端に避け、『十人議員』の週間会議にも影武者を出させるほどだ。

そんな彼女が、自ら直接文を書くと言うのだ、疑うのも無理はない。

「分かりました。行き先は？」

「現在、王都の研究所を査定に来ているハルドマン氏の滞在先です」

「ハルドマン……！……まさか死神を！？」

シャルロットは何も答えない。

だが、その無言こそが、質問に対する何よりの答えだった。

「……ですが、最近ようやく実戦訓練を始めたばかりでは……」

「問題は無いでしょう。それに、『吸』は強力な魔法ですからね。

今、私が持ち得るコネで用意出来る対抗手段はあの子くらいです」

シャルロットは上着を羽織る。

「私も、直接見るのは久し振りですね」

外へと向かう自分の上司を慌てて追うソロン。
シャルロットの顔は、どこか嬉しそうな笑みを浮かべている。

「楽しみですよ……成長したあの子の力が」

数十分後、シャルロット達は、ハイドマンの宿泊先である巨大な宿の前にいた。

貴族御用達の高級宿である。

「さすがはハイドマン。僅か数日間の滞在だと言うのに……こんな高級な宿、『貴族院』の議員でも取ってもらえませんかよ」

「さすがは、世界最高の頭脳、ですね」

「おや、そんな風に呼ばれているのですか？」

そう聞くと、ソロンは少し困ったような顔色を浮かべる。

「……世界最高の頭脳、崇高なる天才、MAX+……様々な呼び方はありますが……」

「ほう。全て初耳ですね」

「……ハイドマン自身が、そう名乗っているそうですから」

シャルロットは、口元を手で押さえ、「くすくす」と笑う。

「彼らしいですね。ですが、世界最高峰、というのは……」

「少々尊大過ぎますか？」

「いえ、遠慮にも程があります」

「……え？」

「……まあ、そうでは無いと言い切れないのが彼なんです」

そう言うと、シャルロットは宿へと入り、ソロンもそれに続いた。

宿の従業員に話を通し、二十台前半程度の男がハイドマンの部屋へと案内する。

すると、従業員の男が気まずそうな顔をし

「……………こちらがハイドマン様のお部屋となります」

「そうですか。案内ご苦労様です。では」

「……………あ、あの！」

部屋をノックしようとするシャルロットを、従業員が呼び止める。

「少し、お伺いしてもよろしいでしょうか？」

「……………何か？」

「……………ブロンドウェイ様。すいません、もし私の言ってる事が間違っていたら申し訳無いんですが……」

「……………」

「貴女は……………もしや、『十人議員』の方では？」

従業員の男の体からは止め処無く汗が流れ、シャルロットは眉一つ動かさず、じっと男を見つめる。

ソロンは腰の剣にか手を伸ばす。

だが、シャルロットが「待ちなさい」と、その動きを手で制する。

「貴方、お名前は？」

「え？あ、ガ、ガーティン・ヘドウルグ、です」

「では、ガーティンさん。いつ、そう思ったんですか？」

「……お名前を拝見した時に」

シャルロットは溜め息を吐く。

迂闊だった。

外部との接触は、出来る限り避けてきたつもりだが、やはり、人の口に蓋は出来ない。

どこからか漏れてしまったのだろう。

「……偽名くらい使っておくべきでしたね。久しぶりの外なので忘れていました」

「で、では、やはり貴女が、シャ……！！！」

ガーティの言葉が最後まで紡がれる事は無かった。彼が命を奪われたから、では無い。

彼の唇が、シャルロットの唇によって塞がれたからだ。

目を白黒させるガーティンは、唇から温かい感触が離れるまでの数秒間、全く動く事が出来なかった。

シャルロットは接吻の後、ラズマの耳元に口を寄せると、甘い声で囁く。

「ガーティンさん、貴方が今日案内した者はただの女だった。そう

「ですね？」

「え……あ、え」

「当然、『十人議員』やらとも無縁で、ハイドマンとの関係者でも無い。そうですね？」

「……………はい」

「いい子です」

シャルロットは微笑むと、ガーティンの頭を撫で、一枚の紙を渡す。

「これに、私の家の住所が書かれています。もし、貴方が何か知りたいのなら、ここへ来てください」

まだ困惑しながらも、ガーティンはその紙を受け取る。

「私はいつでもお待ちしておりますよ。ガーティン・ヘドウルグさん」

満面の笑みを浮かべるシャルロット。

その顔は、とても四十路の女とは思えなかった。

やがて、ガーティンは、ふらふらとおぼつかない足取りで戻っていく。

その姿が見えなくなり、ソロンは口を開く。

「……………よかったですか？もし、あの男が情報を漏らせば」

「大丈夫。彼は裏切りませんよ。それどころか、これからは私の手

足として従順に働いてくれるでしょう」

「……………ですが、わざわざシャルロット様が、その、あんな……………せ、接吻など」

「彼が手に入ると思えば安い代償ですよ。情報収拾にも長けているようですし、殺される可能性もあるのに、私が『十人議員』を訪ねてくる辺り、肝も据わっています。それにな何より」

シャルロットは、指先で唇に触れる。

「顔が、私好みでしたので」

薄く笑いながらそう答えるシャルロットに、何故か恐怖めいたものを感じるソロン。

シャルロット・C・ブロンドウェイ、四十二歳ながらも、まだまだお盛んである。

すると、二人の目の前の部屋の扉がゆっくりと開いた。

「……………まったく、五月蠅いな……………おや、シャルロットさんじゃないか。どうした？」

「お久しぶりですね、フレクト」

ドアから出てきたのは、三十前後の男だった。

男は白衣を纏い、髪はボサボサ、口には何か銜えられている。

この男こそが、フレクト・ハイドマン。

『魔人』計画の発案者にして、技術都市ベリオス随一の研究所にて

副所長を務める人物。

「いやあ、久しぶりだな。お元気で？」

「それはもう。貴方は相変わらずですね」

「え？」

「覗いてたでしょう？さっきまでの一部始終」

「……シャルロットさんには敵わんな。まあ、立ち話もなんだ、狭い部屋だが入ってくれ」

「では、お言葉に甘えて」

部屋に入るハイドマンに、シャルロット、ソロンが続く。
が、ソロンの前にはナイフが投げつけられる。

ソロンは、ナイフを投げたハイドマンをギリリと睨む。

「……何の真似だ？」

「それはこっちの台詞だが？何許可無く我輩の領域に入ろうとしている。貴様が入る事など許可した覚えは無いぞ」

「……………」

ソロンは何も言わず、静かに剣を抜こうとする。
だが

「やめなさい、ソロン。私なら大丈夫です。そこで待っていて下さい」

「……………しかし」

ソロンは渋ったが、シャルロットを前に渋々と了解した。シャルロットが入り、部屋に鍵が掛けられる。この時、ソロンは気付かなかった。

先ほどハイドマンが投げたナイフに、自分が全く、気付けなかった、という事に。

中は思ったより片付いており、普通の部屋と変わりは無かった。

部屋の中央に、詳細不明の装置がある事以外は。

その装置は、高さ二メートルを超え、天井に届きかねないほどの大きさだった。

見れば、装置の中には薄い緑の液体で埋まり、その液体の中で一人の少女が一糸纏わぬ姿で眠っていた。

「これが中々大きくてね。運ぶのは苦勞したものだよ。ベリオスカ

「ここまでの距離だと、『送』と『受』の魔術師が、それぞれ二人ずつ必要だったからな」

「これは……培養液、ですか？」

「ご名答。コレが死神の力を最大限に発揮出来るよう、我輩が作ったものだ」

コレと言うのは、培養液の中で眠る少女の事だろう。

「なるほど……この子は、今年でいくつになるんですか？」

「ん？確か……十六、だったか。それが何か？」

「いえ……そうですか。あれからもう十年も……」

シャルロットは、どこか哀愁の漂う顔で培養液を見つめる。すると、ハイドマンがコホンと咳払いをする。

「……それで、用件は？貴女がただここに来た、という事は無いだろう」

「ああ、そうでした。少しばかりお願いがありました」

「……まさか……コレを？」

「察しが良くて助かります。ちょっとこの子をお借りしたいんです」

「……一応聞いておこう。何の為に？」

「ちょっと巷で噂の『魔術師潰し』を倒さないといけなくなりました」

「冗談だろう？確かに、コレが死神の力を発揮すれば、『魔術師潰し』如き造作も無いだろう。だが、コレはまだ実戦訓練を始めたばかりだ。勝てたとしても、手傷を負う事は避けられない」

「……どうしても貸して頂けないと？」

「貴女の頼みでも、こればかりはな」

「そうですね……仕方ありません。では」

その時、シャルロットの足が動いたかと思っただ直後、その足がハイドマンのこめかみに直撃していた。
ハイドマンは堪らず倒れる。

「力づくで奪っていく事にします」

「……どうやら、我輩は貴女の事を誤解していたようだ。ただ頭が切れるだけの女だと思っていたが、中々腕も立つ」

ハイドマンはゆっくりと立ち上がる。

しかし、その体に、ダメージを受けた様子は無い。

「……やはり、ですか。ソロンにナイフを投げた時から怪しいとは思っていたんですが……貴方、ハイドマンではありませんね？」

「半分正解だ。意識は我輩のものだよ、体は影武者のものだが」

「……見た事も無い技術ですね。さすがです。貴方はまだ進化を続けているようで」

「この世界は日進月歩、ぼさぼさしていると置いていかれるのでな」
「よく言いますね。この技術、完成するまで少なく見積もっても数十年はかかりますよ」

「こんなもの、我輩にとっては通過点に過ぎない……無駄話はそろそろ終わりにしよう」

そう言うとハイドマン……ハイドマンの影武者は構える。

「ちなみに、この影武者はとある暗殺一族の末裔でな……貴女の護身術程度では切り抜かれるものではないぞ」

「確かに、護身術では倒せないでしょうね」

シャルロットは構えを解くと、右腕をゆっくりと上げる。

「……何のつもりだ？魔法の真似事」

影武者が言い終わる前に、パンという乾いた音共に、その体に衝撃が走る。

直後、腹の辺りに激痛が伝わった

「カハッ……！」

見れば、腹に小さな穴が開いており、そこから止め処なく血が溢れている。

「おや？どうやら、痛覚は本体とリンクしているようですね」

「なっ……何、を……」

「んー、貴方が死ぬ訳では無いので余計な情報は与えたく無いのですが……まあ、ヒントくらいならあげましょう」

「特別です」と、シャルロットは痙攣する影武者に近付く。

「まず始めに。私は魔術師ですよ」

「馬鹿、な……そんな話、聞いた事も」

「誰にも言つてませんからね。十年前から。それに、偽名も使つてましたし……おや、どうやらもう事切れたようですね。では、この子は頂いていきますよ」

そう言うと、シャルロットは装置を操作する。

シャルロット・C・ブロンドウェイ。

彼女が『人魔戦争』において、「バージィ・トレイト」という名で活躍した女傑だと知る者は、もはや少ない。

シャルロットがしばらく操作していると、培養液が徐々に減つていき、やがて中身は少女だけとなった。

「おや、どうやらこの操作で合っていたようですね」
「……………」

すると、死神の少女が目を覚ました。

シャルロットはそれに気付くと、自分の上着を裸の少女に渡す。

「これを着なさい。風邪を引いてしまいますよ」

「……………誰？」

「貴女の新しい主です」

「……………マスター？」

「まあ、呼び方は何でもいでしょう。着いてきてもらえますか？」

……………そう言えば、ハイドマンから名前を聞いてませんでしたね。貴女、お名前は？」

「……………なまえって？」

「……………貴女、前のマスターからは何と呼ばれていたんですか？」

「……………検体」

シャルロットは溜め息を吐く。

「……………困りましたね。名前を考えるなど苦手なのですが……………ああ、
そう言えば」

「「タナトス」」

「…………え？」
「前のマスターに使われる前は、タナトスって、呼ばれてた…………よ
うな気がする」

それを聞いたシャルロットは、とても穏やかな表情を浮かべる。

「でも、何でマスターは、その名前を？」

「…………私は何でもお見通しですからね…………では、行きましようか、
タナトス」

「はい、マスター」

「…………簡単に着いてくるのもどうかと思いますが」

「だって私、行く所無い。それにマスター、何だかいい匂いがある
から」

「…………ふふ、そうですね」

こうして、シャルロットと死神の少女タナトスは宿を後にする。
ラズマ達に、新たな脅威が誕生した瞬間だった。

第19話 十人議員シャルロットの画策（後書き）

という事で、アグレッシブ四十路、シャルロットさんにご活躍願いました。

ようやく投稿……長かったです。

次回からはもう少し早く投稿したいです。

次回予告を少々。

シャルロットが手に入れた死神、タナトス。

果たして彼女の實力とは？

そして、ラズマ達は？

次回、「死神タナトスの剣^剣」。

頑張ります。

評価・感想・指摘等頂ければ嬉しいです。

あと、質問も頂ければお答えします。

追記：次回のタイトルは予告も無しに変更される場合があります、ご了承ください。

第20話 死神タナトスの来襲（前書き）

前回から十日ほど開いてしまいました。
温かい目で見て頂ければ幸いです。

第20話 死神タナトスの来襲

ここは貴族御用達の高級宿、『スウィート・メロディ』。その中の従業員用休憩室に佇む、一人の男の姿があった。男の名はガーティン・ヘドウルグ。

この宿で働いている、今年二十四となる青年だ。

「……はあ」

ガーティンは溜め息を吐く。

彼はつい先ほど、ある女性に唇を奪われた。

女の名はシャルロット・C・ブロンドウェイ。

『十人議員』の一角を務める女性である。

更にガーティンの調べによると、十年前の『人魔戦争』において、

「バージイ・トレイト」という名で活躍した魔術師だとも分かった。

そして、もう一つ。

彼女について知っている事がある。

それは、彼女が『人魔戦争』が終わるまで、『守六光』第二席を担っていたという事だ。

もはや知っている者が二十人といないような事実までも知っている。辺り、ガーティンの情報収集能力の高さが伺える。

そもそも、彼がここまで『十人議員』について調べるのには、ある理由があった。

シャルロットに接触したのも、その事について聞く為だったのだが

……。

ガーティンは唇を押さえて呟く。

「……四十過ぎには、見えなかったな」

実際、シャルロットは三十過ぎ、いや、二十台後半と言っても通じるほど若く見えた。

黄金色の髪に、きめ細やかな肌。

そして、端正な顔が自分の間近に近付き……。

ガーティンは赤面し、頭を振る。

時計を見ると、休憩が終了する時間だった。

ガーティンは立ち上がり、受付へと戻る。

そこには、来た時にはいなかった銀髪の少女を連れたシャルロット達の姿があった。

「!」

ガーティンは思わず『スウィート・メロディ』を飛び出し、シャルロット達を追いかける。

すると、ガーティンに気付いたシャルロットが後ろを振り返り、くすりと笑う。

「ふふ、どうしたんです？お勤め中ではないんですか？」

「あ、あの!」

威勢よく叫んだものの、何を言っているかわからない。
しどろもどろのガーティンを見て、シャルロットが微笑む。

「確か、私に聞きたい事があるんですけどよね？」

「え？あ、ああ、はい」

「私でよければお答えします……が」

シャルロットはピツ、と人差し指を立てる。

「一つ、条件があります」

「は、はあ……何でしょうか？」

ガーティンも、そう簡単に話してくれるとも思っていなかった為、その辺りは覚悟していた。

そんな彼の態度を見て、シャルロットは頬を緩める。

「そう緊張しないで下さい。何も取って食おうという訳ではありません。ただ、我々に協力して頂きたいのです」

「……具体的には、どういった風に？」

「そうですね……」

シャルロットは「うーん」と頭に手を当てる。

ガーティンは、その仕草の可愛らしさに思わずドキッとした。

すると、シャルロットは手をポンと叩き、答えを告げる。

「決めました」

「は、はい」

「今の仕事を辞めて、私の元で働いて下さい。給金は……そうですね。月給、金一でどうでしょう？」

「……………は？」

ガーティンは呆気に取られる。

仕事を辞めるといふのもそうだが、驚くべきはその給金だ。

金一、つまり金貨一枚。

それは、ガーティンにとって目にした事すらない額だ。

今の仕事が気に入ってないわけではないが、さすがにそれほどの金額ともなると、考えざるを得ない。

しかし、同時に不安も覚える。

ガーティンが知る限り、シャルロットはかなり頭の切れる人物の筈だ。

数年前に起きた、『人魔戦争』を終えて、の初めて大きな経済危機を迎えた時、シャルロットは僅か数人の部下と共に諸外国を渡り、交渉を続けた結果、この危機を乗り越えてみせたのだ。そんな人物が、金銭感覚を知らない筈がない。

つまり、協力するという事はそれなりの危険を伴う事を意味するのだ。

が、既にガーティンは答えを決めていた。

彼は顔を上げると、毅然とした表情を浮かべる。

「（あら、いい目ですね）」

シャルロットでさえそう思ってしまうほど、ガーティンの目には決意の光は宿っていた。

「……ブロンドウェイさん、いや、ブロンドウェイ様」

「決めたのですか？」

「はい……その話、謹んでお受けします」

ガーティンの答えに、シャルロットは満足した様子で笑ってみせる。

「貴方ならそう言ってくれると思っていましたよ、ガーティン・ヘドウルグさん」

「……………」

「あ、そうそう。私に聞きたい話があったんでしたね。とりあえず、概要だけでもここで聞きしますよ？」

「……ここで、ですか？」

「気に入りませんか？」

「い、いえ。ここで結構です」

ガーティンは一度息を整える。

すると、先ほどのからのやり取りを面白くなさそうに見ていたソロンが

「早くしろ。シャルロット様のお体が冷えてしまったらどうする」

と、不機嫌そうにガーティンを叱咤する。

「す、すいません」と腰を低くして謝るガーティン。

そして、コホンと一度咳払いをする。

「……二年前、自分の妹が技術都市ベリオスに連れて行かれたきり、
消息が分からなくなっただんです……」

妹を連れていった兵士達は、『貴族院』の命だと言っていました」

「二年前……シャルロット様、まさか」

「ええ、『キメラの悪夢』、ですね？」

ガーティンは重々しく頷く。

「妹の名はヒンタ・ヘドウルグ。自分は妹の失踪に納得出来ず、事
件について調べました。そして、その事件の影に『十人議員』が深
く関わっている事を知っただんです」

「……申し訳ありませんが、私は『魔人計画』には着手していません
ので、あまり詳しい事は知らないんです」

「その計画を応用した精霊についてなら話は別ですが」と、胸中で
続けられる。

「……そうですね」

「ですが、協力する事は出来ます」

「え？」

「私の『部隊』……まあ、私兵ですね。その者達を使って、『キメラの悪夢』について洗い直してみましよう」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ、部下の頼みです。断る道理はありません」

シャルロットは微笑む。

その様子を見ていたタナトスは、シャルロットを見上げる。

「……私も、それやるの？」

「いえ、タナトス。貴女には他にやって頂きたい事があります」

シャルロットは少し屈むと、タナトスの頭を優しく撫でる。

「どんな、お仕事？」

「そうですね。ついでにその話もおきますか」

「？」

「倒して頂きたい魔術師と、連れて来て貰いたい人、あと、部下の解放をお願いしたいんです」

シャルロット達の『スイート・メロディ』での騒動から一夜が明けた。

王都の中心部へと向かう筈だったラズマ達だが、運悪く『スイート・メロディ』を通るルートだった為、ハイドマン（影武者）襲撃の騒ぎで通れなかったのだ。

結局、昨日はラズマ宅から少し東に進んだところにある集落にて、宿を取ったのだ。

尚、昨日拘束したチエイズは道中に目覚めたのだが、結局口を割る事はなかった。

今は宿の一室に閉じ込めてある、
昼に差し掛かるつかという時刻に、ラズマは宿の外にいた。

「……色々あったな、ホント」

ここ数日間を、ラズマはそう振り返った。
すると、その隣りに巨体の男が現れる。

「……バラドーさん」

「おっ」

バラドーは腕を組み、町を見渡す。

「どうしたんだ？」

「ああ、そろそろ飯だったからな。お前を呼びに来たんだ。あと」

「あと？」

「そろそろ、色々聞いておこうと思ってな」

「……色々つて、例えば？」

「あの嬢ちゃんの魔法とかだ」

ラズマは押し黙った。

どうやら、昨日は偶然言えなかった、という訳では無いようだ。

「……隠してたわけじゃないんだ。ただ……あいつの魔法って、こ

う、特別なもんだからさ」

「特別？」

「ああ……あいつの魔法は『魔』。おそらく唯一無二の魔法だと思
う」

「ほづ。どういったもんなんだ？」

ラズマはしばらく黙るが、やがて意を決したようにその口を開く。

「……自分の魔力を犠牲にして、使用した魔力の量を数倍に増やす
魔法……それが『魔』だ」

「なっ！？そんな魔法が！？」

「……ああ、俺も見た事あるし、間違いねえ」

「……ブロンドウェイが欲しがるのも無理ないか」

「どついう事だ？」

「『勇者の遺産』については、昨日話したよな？」

「あ、ああ」

「どつやら、それは王都内にあるらしくてな。そして、ブロンドウェイは『索』の魔術師を保有している……つまり、だ」

「？」

「おそらく、嬢ちゃんの生み出す魔力を利用して、探索範囲を広げるんだろつな」

「なっ！だ、駄目だ！それだけは……！」

ラズマの剣幕に、バラドローは思わずたじろぐ。
やがて我に返ると、ラズマは俯く。

「……すまねえ。でも、それだけは駄目なんだ……」

「……どついう事だ？」

「……あいつは……マリイは、『魔』を使うと、肉体的にも、精神的にも、かなりのダメージを受けるんだ……前使った時は、意識不明で三日間、目を覚めなかった」

「……なるほどな。お前さんが隠したがる理由が分かったよ」

バラドローは舌を打つ。

「ブロンドウェイの野郎……そんな事分かってるだろうに……」
「……バードーさん、すぐ出発しよう。これ以上同じ場所に留まったら危険だ」

「そうだな……でも、もう一つ聞いておきたい事がある」
「え？」

「ラズマ、お前さんの魔法についてだ」

「あ、ああ。そういや言っただけだったな」

「？これは隠していたわけじゃないのか？」

「いや、言うほどの事でもないし、いつでもいいかなって思ってさ」

ラズマは笑いながら頭を掻く。

バードーは呆れたように目を細める。

「……まあいいか。とにかく、戦力を確認する意味も兼ねて、聞いておきたいんだ。アツシが知る限り、あんな魔法見た事ないからな」
「……いや、期待するほどのもんでもねえぞ？俺の魔法は……」

だが、ラズマの言葉が最後まで紡がれる事は無かった。

「……けっ、来客だ」

「え？」

バラドーは憎々しげに町の奥を見る。

すると、黒い衣を纏った銀髪の少女が、ラズマ達を見据え、向かってきていた。

「……あの子、ですか？」

「ああ、おそろくな。見た目に惑わされるなよ？おそろく、相当の使い手だ」

バラドーはゆっくりと、背中 of 槌に手をかける。

銀髪の少女はバラドー達の五メートルほど前でピタリと止まった。

「聞いた情報と、一致。これより、臨戦態勢、入ります」

「……おい、ここじゃ一般人に被害が加わる。場所を移動したい」
「却下。大丈夫、被害が出る前に、終わらせる」

そう言うと、少女は黒衣の中から一振りの剣を取り出す。

その刀身は、剣特有の輝きが一切見えないくらい黒く染まっていた。

「紹介、遅れた。私は、タナトス。この子は、魔剣『ソウルイータ
ー』」

バラドーは、その魔剣の名に聞き覚えがあった。

かつて冥界の神が使っていたと言われるほどの剣で、その刀身に触れれば魂が削られると聞く。

ある程度傷がついても回復するとは言え、魔力の動力炉とも言える魂が削られれば、まともな魔力を生成する事すら出来ない。

だが、そう言った強力な武器を持つ者には、何らかの油断が生まれる筈だ。

つまり、勝負が始まってすぐがチャンスとなる。

「……ラズマ、短期決戦だ。俺が突っ込むから、後ろから援護を頼む」

「わ、分かった」

バラドーは体勢を整え、敵の間合いに踏み込む瞬間を伺う。すると、おれよりも速くタナトスが動いた。

数秒で詠唱らしきものを唱え、剣を振るったのだ。

剣の軌跡をなぞり、衝撃波がバラドーを襲う。

「くそっ！」と叫び、右手を突き出し、『吸』を発動させる。

が、その時、不可解な出来事が起きた。

「がっ………！？」

短い呻き声と共に、バラドーの右手と胸から鮮血が溢れ出す。

「……『吸』が、発動、しない………！？」

咄嗟に引いた為、右手が真っ二つと言う事は無かったが、バラドールの傷は深かった。

「……………殺しちゃ駄目って、言われてるから、もう、動かないで」

そう言うと、タナトスは視線をラズマへと向ける。

が、ラズマはそこから動かない。

いや、動けなかったのだ。

これまでに、ソロンやチエイズとの戦いなど、死地に立たされた事は何度があったが、こんな明確な恐怖を覚えたのは初めてだった。

ラズマの額から、決して寒さが理由ではない汗が、ぽとりと落ちた。

第20話 死神タナトスの来襲（後書き）

という事で、ガーティンの決意、動き出すシャルロットについて書いてみました。

あと、マリイの常人離れた魔法とその副作用についても触れてみたい。

ラズマの魔法、そして、バラドーさんの『吸』を破ったタナトスの力については、次回で明らかにする予定です。

投稿間隔が乱れきっていますが、これから修正していければと思います。

という事で次回予告。

今回、結局前回予告したものは違うタイトルになってしまいましたが……。

立ち塞がる強敵タナトスの前に、ラズマは一か八か自分の魔法で立ち向かう。

果たして、彼は恩人を、そしてマリイを守る事が出来るのか？

次回、『少年ラズマの決意』。

頑張ります。

評価・感想・ご意見等頂けたら幸いです。

あと、質問も頂ければお答えします。

第21話 少年ラズマの決意（前書き）

ラズマ対タナトスです。

第21話 少年ラズマの決意

ラズマは震えながらも、懐から小槌を取り出す。今彼が引けば、確実にマリイは連れていかれるだろう。それだけは阻止しなければならぬ。辺りを見れば、騒ぎに気付いた人々が集まり始めていた。

「……何あれ？」

「ち、血が出てる……」

「おい、誰か警備兵呼んで来い」

タナトスは騒ぎ立てる野次馬を一瞥し、剣を振るう。野次馬の手前に衝撃波が飛び、地面が削れ、線のように広がる。野次馬達は軽く叫ぶと、嘘のように静まり返った。

「……その線を越えたら、容赦しない」

タナトスが放った言葉に、その場にいた全員が凍りつく。ラズマは息を呑み、目の前の敵を見据える。バラドローは微かに体を動かし、ラズマを見やる。

「……ラズマ、早く、逃げろ」

「バラドローさん！」

「『ソウルイーター』……甘く、見てた。一撃で、動く事も出来な

いくらいだ」

「……………」

「それに、アッシの『吸』も、効かなかった。ありゃあ、何かしらの魔術師だ……お前じゃ、無理だ」

確かに、バラドーの言う通りだろう。

ラズマも相手の力量を測れないほど馬鹿ではない。

しかし、それでも、彼は逃げるわけにはいかなかった。

逃げれば、マリイは連れ去れる。

それだけは阻止しなければならぬ。

タナトスはゆっくりと剣を構える。

「……………降伏の意思、無し。実力行使、実行」

上がり続ける心拍数。

心臓が破裂しそうだった。

だが、ラズマは引かず、迫りくるタナトスを待つ。

バラドーの『吸』が効かなかったという事は、自分の……魔法……も効果があるか分からない。

つまり、防御に使用するには拙過ぎるのだ。

ならば、使用用途は……攻撃……一つに絞られる。

タナトスはラズマの腹を目掛けて『ソウルイーター』を振るう。

ラズマはそれを後ろに下がる事でかわし、再度間合いを詰めて小槌でタナトスを狙った。

しかし、タナトスにとって、その程度の攻撃は苦ですらなかった。

それどころか、彼女の頭の中では、既にラズマを倒す算段が立てられていた。

小槌をかわし、抜き打ちでラズマの胸を斬り、行動不能にする。

それは、手持ちの戦力で取り得る事の出来る、最良の判断だった。

が、この場合において、その判断は間違いだった。

次の瞬間、ラズマの小槌はタナトスの華奢な体躯に減り込んでいた。タナトスは驚いたような表情を浮かべる、が、その場からは一歩も動かない。

「……なんつー筋力だ。バケモンかよ」

「……何故？」

「あ？」

「何故、……攻撃の軌道がずれた……の？幻系の魔法なら、『ソウルイーター』の作用で、効かない筈」

「……………」

ラズマは後ろに下がり、タナトスとの距離を取る。

「……………敵に教える事は何もねえよ」

実際、彼の……魔法……は、タネが分かれば攻略はさほど難しくはないものだ。

魔法の名は『誘』、触れたものの位置をずらす事が出来る魔法だ。

しかし、触れたもの、更には動いているものにしか効果がない上に、ずらせる距離は僅かしかない為、この魔法を授かったものの多くは、魔術師としてではなく、一般人として生きていくケースが多い。

だが、ラズマはその運命に抗ったのだ。

彼は生まれ持って授かったこの小さな才能ちからを限界まで鍛え上げた。そして使っていくうちに、『誘』の効果に触れずとも発動させられるようになったのだ。

効果は半径三メートル、詠唱をしても五メートル程にしか及ばないものの、この力を使う事が出来る『誘』の魔術師はラズマだけだろう。

つまり、ソロンやバードーのような戦闘のプロとも言えるような者達に見覚えが無かったのもそういうわけである。

彼の魔法、実力を考えれば、カザリア魔法学院に収まり切れるレベルではない。

だが彼はこの事を、マリィ以外に話した事は一度もない

なんだかんだ言いながらも、彼はカザリアでの生活が気に入っているのだ。

「……………何で今こんな事考えてんのかな」

この場を今すぐ逃げ出したい衝動に駆られながらも、ささやかな日常に戻る為、ラズマは戦う。

小槌を再度握り締め、半径三メートルに『誘』の壁を張る。

しかし、小槌が効かない事は分かっているので、ラズマは戦法を切

り替えた。

タナトスに気付かれないよう、懐から小さな玉を数個ほど取り出す。それは、ソロン戦の際にも使用した煙幕玉だった。

だが、煙幕だけでこの場を乗り切れるほどタナトスは甘くないだろう。

そこで、ラズマは考えた。

彼は煙幕玉と共に、それとほとんど同じサイズの、簡易的な爆弾を一緒に取り出したのだ。

爆発の規模は大した事ないが、それでも、一人一人の行動力を奪うには十分な威力だった。

が、折角の爆弾も当てなければ意味がない。

「……よし」

ラズマは意を決すると、タナトスに向かって煙幕玉を投げつける。

タナトスは反射的にそれをかわし、ラズマに突っ込む。

それに対し、ラズマはもう一度、煙幕玉を放つ。

が、タナトスは『ソウルイーター』でそれを両断し、後方にて煙幕が吹き荒れる。

しかし、その瞬間こそが、ラズマの狙っていた隙だった。

ラズマはタナトスに簡易爆弾を放つ。

『ソウルイーター』を振り切り、僅かな隙が出来たタナトスは、一瞬、行動の選択を迷った。

そして、彼女は『ソウルイーター』で、迫り来る球体を受け止める。ここで、彼女は間違いを犯した。

二発目の玉を斬った時、それが煙幕と分かった彼女は、……三発目

も煙幕玉が来る……と判断したのだ。

ラズマはそれを読んだからこそ、三発目に爆弾を放った。そして、ラズマの『誘』により、爆弾は『ソウルイーター』の右側に軌道が逸れる。

次の瞬間、爆音と硝煙がタナトスを包み込んだ。

「……………やったか？」

少しずつ晴れていく煙の中に、悠然と立つ人影があった。ラズマの全身から汗が噴き出す。

「（……………嘘、だよな。小規模と言っても、爆発をもろに食らって立っ
つていられる筈が……………）」

しかし、そんなラズマの予想は的中する。

煙が完全に晴れ、そこには……何か……に包まれた人影の姿があった。

その……何か……がゆっくりと解け、そこからタナトスの姿が現れる。

よく見れば、……何か……は彼女の背中から伸びていた。

ラズマはタナトスの姿を見る。

ラズマが見たその……何か……は、見たまま、……翼……と言つのが適切だろう。

「……何だよ、そりゃあ」

「……前のマスターは、『死神の翼』って、呼んでた」

「……『死神』に翼、ねえ……」

ラズマは唇を噛み締める。

あの翼で飛べるかどうかは不明だが、少なくとも、あの爆発を耐え切るほどには耐久力があるらしい。

もはや、ラズマに反撃の手段は残されていなかった。

それを悟ったのか、ラズマは戦闘の構えを解いた。

「……降伏？」

「……」

「……それじゃあ、目標の回収を、始める」

タナトスはラズマの横を通り、宿の中へと向かう。

ラズマも野次馬も、ただそれを見ているしかなかった。

「……」

ラズマは拳を握り締める。

- 最初から、無理な話だったんだ。

- 敵は『十人議員』だぞ？勝てるわけがない。

・そうだ、俺はただの学生なんだ。ここ数日の騒ぎですっかり忘れていた。

・さっさとバラドーさんに全部任せておけばよかった。そうすれば……。

・そうすれば……、何なんだろうか。

「これでよかったのか？」と、心の奥から声が聞こえてくる。

元はと言えば、何故彼はこんな危険な事に首を突っ込んでしまったのだろうか。

それこそ、バラドーに全てを任せてしまえばよかった。

それでもラズマはこの戦いに身を投じた。

単なる好奇心、それもあつたのかもしれない。

だが彼には、それ以上に大切な……守るべきもの……がある。

そして、それはまだ手放してはいない！

「う、おおおおおお！」

ラズマは咆哮と共に、タナトスに襲い掛かった。

『誘』を発動させ、渾身の力で小槌を振る。

タナトスは一瞬反応が遅れた、が、すぐに事態に追いつくと、ラズマの一撃をヒラリとかわした。

「なっ………！」

「……………」

ラズマの表情が怒りと悔しさに染まる。
タナトスは何も言わず、『ソウルイーター』を振り下ろした。

ラズマは胸から腹にかけて血を流し、地面の上に仰向けになっていた。

『ソウルイーター』の力は本当らしく、立ち上がるうとしても、体には力が入らない。

ラズマが空を仰ぐと、タナトスがその場に歩み寄る。

「……………何だよ」

「……………どうして、逃げなかったの？」

「さあな……………なあ、俺を煮るやり焼くなり好きにしていいいからよ、あいつだけは……………マリイだけは勘弁してくれねえか？」

「……………それは、出来ない。マスターの、命令だから」

「……………そうか、よ」

ラズマはふらふらと立ち上がる。

「……………何する気？」
「決まってるんだろ。お前を、止めるんだよ、ここで。お前の、意味の分からねえ魔法も、攻略してみせる」
「……………」

タナトスはしばらく黙ると、『ソウルイーター』の石突でラズマの腹を打つ。

「カツ……………！」
「……………健闘を称えて、私の魔法は、教えてあげる」

ラズマは呻きながら、地面に倒れる。

「私の魔法は、『絶』。『死神』のみが持つ、唯一無二の魔法。効果は、察しがついてるかもしれないけど、…魔法の効果を無効化する…の」
「……………んな事、どうでも、いい……………マリィに……………！」

「手を出すな」という言葉を最後に、ラズマは意識を失った。
タナトスはそれを確認すると、ゆっくりと宿の中へと入って行く。
その姿が消えた途端、糸を切ったように野次馬が騒ぎ出す。

結果、ラズマ・エイジスは、マリィ・レウズを守り切る事が出来な

かった。

静寂に包まれた部屋の中で、ラズマは目を覚ました。

辺りを見回す限り、どうやら病院の一室のようだ。

ふと隣りを見ると、バラドーがいびきをかきながら眠っている。
ラズマは、ぼうつとした様子で、天井を見つめる。

恐らく、マリイはタナトスに連れて行かれたのだろう。

彼はギュッと布団を握り締めた。

- 守れなかった。

その言葉だけが、頭の中をぐるぐると回る。

すると、病室の扉を開ける音がした。

見れば、ラズマにとって見覚えのない女が立っていた。

女はラズマが起きている事に気付くと

「あ、め、目が覚めたん、ですか」

顔を赤らめながら、「じにょじにょと呟く。

「……………アンタは？」

「あ、す、すみません。ご紹介が、その、遅れました」

女は一度、コホンと咳払いをする。

「私、ト、トリシア・ランゼスって言います。ば、バラドーさんの、その、仲間、です」

「……………アンタが俺達をここに？」

「い、いえ。ただ、たまたまこの近くに来てみたら、バラドーさんが入院してるって聞いて……………」

「そうか……………」

それならば、マリィの事など知っている筈がない。
ラズマは嘆息する。

「……………すみません」

「あ、いや、別にアン……………トリシアさんの事を悪く言ったわけじゃないんだ」

ラズマは慌てて弁明する。

「ところで、バラドーさんに何か用事が？」

「あ、はい、ちょっと」

「何なら、俺が伝えておこうか？まだ起きないみたいだし」

ひょっとしたら、新たな情報が掴めるかもしれない。

ラズマはそう考えた。

トリシアは少し困ったように俯くが、やがて

「じゃ、じゃあ、お願いしていいですか？」

トリシアは僅かに微笑む。

そして、ラズマの耳に口を近づける。

「あの、ですね」

「おう」

「ブロンドウェイが探している『勇者の遺産』という存在と、その詳細が分かった、と」

瞬間、ラズマの心臓が大きく跳ねた。

- まだ、ツキは残っている。

ラズマはもう一度拳を握り締めた。

シャルロットへの手掛かりは、まだ残っている。

- 取り戻してやる、絶対に。

そしてここから、巨大な敵に立ち向かう、平凡な一人の少年の、反撃の狼煙が静かに上がる -

第21話 少年ラズマの決意（後書き）

という事で、ラズマ対タナトスの戦いでした。

今回、ようやく判明したラズマの魔法。

そして、タナトスの圧倒的な力。

果たして、彼女に反撃する手立てはあるのか……。

あと、ようやくトリシアさん登場！

1章ではいまいち地味な彼女でしたが、2章ではそこそこ出番がある、かもしれませぬw

個人的に、ラズマは自分の好きなキャラクターを目指してみました
が……うーん。

そんなこんなで次回予告。

マリイを取り戻す決意を固めたラズマ。

彼の取る次なる行動とは？

次回『十人議員シャルロットの提案』。
頑張ります。

評価・感想・指摘等頂けたら嬉しいです。

質問も頂ければお答えします。

第22話 十人議員シャルロットの提案（前書き）

ほとんど説明回にも関わらず、いつもより長くなってしまいました。

第22話 十人議員シャルロットの提案

タナトスの襲撃があつた翌日。

退院したラズマは、宿泊していた宿を訪れていた。

当然ながらマリイの姿はなく、彼の心は深く沈んだ。

だが、感傷に浸っている暇はない。

彼は受付に向かい、目当ての人物がいる事を確認し、その部屋へとやって来た。

「……てつきり、もう逃げてるもんだと思ってたけどな」

ラズマは呆れたように呟くと、その扉を開ける。

そこには、扉の外から差し込む光に目を細める、一人の女の姿があった。

女の名はチェイズ。

シャルロットが、ラズマ達に仕向けた刺客の一人だ。

彼女の腕と足はロープで拘束しており、ベッドの上にムスっとした表情で座っている。

「……どうした。今更、貴様に喋る事など何もないぞ」

「いや、俺はてつきりあのタナトスとかいう女に連れ出されてるもんだと思ってたんだが」

「……ああ、あの『死神』か」

チエイズは嘆息する。

「どうやら、会ってはいったようだ。」

「何で出て行かなかったんだ？てか、お前ならそのくらいの拘束、苦でもなかっただろ？一応、外から鍵はかけてたけど、逃げ出すチャンスなんていくらでもあった筈だ」

「……ここまでの失態を晒しておいて、すごすごと戻れるものか」

暗い表情のまま、チエイズは俯く。

「ラズマは一度溜め息を吐くと、ここに来た理由である……本題……を切り出す。」

「……お前の身柄を開放する。代わりに、ブロンドウェイの居所を教えろ」

「……何を言っている？ひょっとしてお前は馬鹿か？馬鹿なのか？」

チエイズは呆れたと言わんばかりに顔をしかめる。

「任務に失敗し、敵の捕虜にまでされたんだ。帰れるわけがない。その上敵に居場所を教えるなど……言語道断も甚だしい」

「……じゃあ、いいんだな？」

「……？」

「昨日の騒ぎがブロンドウェイによるものだって、触れ回ってもい

「いんだな？」

「……ふん、ただの学生であるお前の言葉など、誰が信じるものか」
「まあ、ここ以外だったらそうだろうな」

そう言うと、チエイズに歩み寄るラズマ。

「けどな。俺はずっとこの辺で育ってきたんだ。当然、この辺の多くの住民とは顔見知りなわけだ。それに加えて、ここは商業の盛んな北東部……何が言いたいかわかるな？」

「……………」
「行商人の耳に入れば、たちまち王都中にブロンドウェイの黒い噂が広まるつつう寸法だ」

「……そんな信憑性に欠ける噂話、広まるわけがない」
「まあ、普通ならな。ところがどっこい、俺もまだ運に見放されてなくな」

ラズマが不適に笑い、チエイズの背筋にゾクツとする何かの流れた。その時、チエイズの腹部から「ぐうぐ」という情けない音が聞こえてきた。

「……そういえば、ここの宿って食事は用意してくれないんだっかな」

「ち、違う！これは、違う！」

「いや、別に隠さなくても……丸一日飯を抜けば誰だって腹は減るさ。あ、飯持ってこようか？ブロンドウェイの居場所を吐くならだ

けど」

「だ、誰がそんな取引に応じるか！」

チエイズは拗ねたようにそっぽを向いた。

その様子を見たラズマは、思わず笑ってしまふ。

「まあ、とりあえずは話の続きだ。えっと、ブロンドウェイの所業を暴露する方法だったか？」

「……………」

「だんまりか。まあいいさ。俺もすっかり忘れてたけど、バラドーさんは、ある組織……の幹部に当たる男でな」

「……まさか」

「ああ。多分、今考えてるそれで正解だ」

「……………」
『オーバーレイ超光』を動かすというのか……………馬鹿な、出来る筈がない！」

「それが俺のもう一つの運のよかつた所でな。偶然にも、『超光』の首領さんの目的が、俺達にも無関係ではないみてえだよ。協力し合う事で合点がいったわけ」

ここで、ラズマはハツタリをかまけた。

確かに、トリシアの話から、『超光』の首領、アンジェリカ・ナイトレイジの目的が『勇者の遺産』であると分かった為、ラズマ達との目的と合致はするだろう。

だが、昨日の今日でアンジェリカと直接話が出来る筈はない。

しかし、二日間の監禁により、精神状態が不安定だったのか、チエイズには少なからず動揺が生まれる。

「……………」
「さあ、どうする？決めるのはお前だ、俺じゃない」

ラズマは、ハツタリと虚勢でチエイズに迫る。

「恥を偲んで主人の元へ帰るか、それとも、戻らずに主人の名誉に傷をつけるか」

「……………め…を…………しろ」

「あ？」

チエイズは何かを呟いたが、ラズマに聞き取る事は出来なかった。すると、チエイズの足を拘束していたロープが突然焼き切れる。そのまま勢いよく立ち上がると、ラズマを食い殺さんばかりの勢いで睨みつけ

「飯を用意しろと言った！聞こえなかったのか、この愚図が！」

と、大声で毒を吐いたのだった。

その日の午後、所変わって、ここは王都近郊に存在するブロンドウ
エイ邸。

その一室に、シャルロットとタナトス、ソロンの姿があった。

「それで、例の彼女は？」

「……それが、頑なに『魔』の使用を拒み、食事も取るうとせず……」

「困りましたね……ただでさえ、彼女の魔法は身体への負担が大き
いらしいですからね。飲まず食わずでは、計画……に支障をきた
します」

「……ごめん、なさい。私が、あの男、連れてくればよかった」

「そうですね……ですが、あの辺りの住民には、もうタナトスの顔
が割れているでしょうし……はて」

「困りました」と、シャルロット頬をつく。

すると、突然、部屋の扉が静かに開けられた。

見ると、困ったような顔を浮かべたガーティンがそこに立っていた。

「どうしたんですか、ガーティンさん？何か分かったんですか？」

「あ、いや、そうじゃないんですが……その、来客です」

「来客？今日はそんな予定無かったと思います」

「はあ……それが……その来客というのが……」
「？一体誰だと言っんですか」「」

「その……ラズマ・エイジス、と名乗ってしまして」

「ば、馬鹿な！奴が此処を知る筈が……！」

「……彼一人、でしたか？」

「いえ、もう一人、両手を拘束された女性がいました」

「……まさか」

「チエイズ、でしょうね」

それを聞いたソロンは、わなわなと震え始める。

「チエイズ……！敵に捕まるだけに飽き足らず、此処の情報まで漏らしたというのか！」

「おそらく、そのラズマという少年に言い包められたんでしょうね。ふふ、彼女らしい」

シャルロットは、口元を手で押さえ「くすくす」と笑う。

普通ならば、とても笑える状況ではない。

だが、今は違う。

ラズマの来訪は、少なからずマリィに影響をを与えるだろう。

「通して下さい」

「……いいんですか？」

「ええ。マリィ・レウズの魔法は、『勇者の遺産』を手に入れる為

には大事なプロセスですからね。彼女の体調を整える必要があります。それに、ラズマ・エイジス……彼の魔法も気になりますしね。うまくいけば、仲間に引き込めるかもしれません」

「……分かりました」

そう言うと、ガーティンは玄関へと向かう。

数分後、ラズマとシャルロットは、初めて顔を合わせた。

「……あんたがブロンドウェイか」

ラズマの言葉に、ソロンがピクリと眉を動かす。

「……貴様、それが『十人議員』に対する口の利き方か」

「知らねえよ。俺にとっては誘拐グループの黒幕だ」

「無礼者ッ！」

ソロンは腰の剣を抜き、ラズマに斬りかかる。
ラズマはそれに対し、『誘』を発動させると、懐の小槌を取り出す。
二人が接触する、まさにその時。
両者の間に割って入った人影があった。

「シャ、シャルロット様」

「おやめなさい、ソロン。今日は争うつもりはありません。そうでしょう、ラズマさん？」

「……ああ」

ラズマは小槌をしまうと同時に、シャルロットの人並外れた何かを感じた。

「とりあえず、こいつは解放するぜ」

そう言うと、ラズマはチエイズの拘束を解いた。
チエイズはどこか怯えた表情でシャルロットに近づくと、震えながら口を開く。

「………た、ただいま戻りました、シャルロット様」

「お帰りなさい、チエイズ。よくやってくれました」

「………え？」

「貴女が彼に此処を教えなければ、状況はもう少し遅れていたでしょう。礼を言います」

シャルロットのその言葉に、チェイスは困惑したような、ホットしたような顔を浮かべていた。
そして、シャルロットはラズマに向き直る。

「……それで、今日はこういったご用件でしょうか？」

「……決まってるだろ。マリイの身柄を解放しろ」

「それは難しい相談ですね。彼女の能力は、我々の……計画……には必要なものなので」

「ふっざけんな！そんなもん、お前らで何とかしやがれ」

「何とかする為に、彼女を誘拐したんですが？」

シャルロットの屁理屈に、唇を噛み締めるラズマ。

450

「……まあいい。どうせ、こんな話じゃ解決しないと思ってたしな」

「では、どんな話なら解決すると思いで？」

「……どうせ、その辺はあんたが考えてんだろ」

「ふふ、人任せですか。まあ、貴方の言う通り、大体の筋書きは用意していましたがね」

そう言うと、ガーティンが二枚の紙をラズマに手渡す。

一枚は、いかにも高価そうな羊皮紙で、もう一枚は『隔月闘技大会・八の月』と書かれた紙だった。

「……これは？」

「一枚は、見ての通り『隔月闘技大会』の告知ポスターですよ。『隔月闘技大会』、知っているでしょう?」

「……まあな」

偶数月に一度、王都立闘技場にて行われる闘技大会、それが『隔月闘技大会』だ。

ちなみに、毎年十月には、年に一度の『闘技祭』なるものがあるのだが、これらのイベントは貴族達の政略戦争や賭けなどに使われる事が多い。

そんな大会が、一体何の関係があるというのだろうか。

「簡単な話ですよ。一週間後行われるこの大会で、白黒をつけようと言うわけです」

「……どういう意味だ?」

「つまり、貴方がこの大会で優勝すれば貴方の勝利、マリイさんは解放しましょう。しかし、敗退すれば貴方の負け、貴方は私の手駒として従順に働いてもらいます」

「……意味分かって言ってるのか?優勝なんて出来るわけねえだろうが!」

「まあ、出ないなら出ないで私は構いませんよ?こちらには『操』の魔術師がいますね。マリイさんを

操って『魔』を発動させる事は出来るんですよ……まあ、身体にかかる負担は通常の数倍でも済まないでしょうが」

「……ダメエ!」

「私としても、それは不本意なんですよ。おそらく、『操』で操った場合に発動出来る『魔』の効果は半分もないでしょうからね」

ラズマは歯を食い縛る。

つまり、マリイを助ける為には『隔月闘技大会』で優勝しなければならぬという事だ。

「……分かった。その話、呑ませてもらう」
「賢明な判断ですね」

そう微笑むと、シャルロットはラズマの持つ羊皮紙を指差す。

「では、それにサインをお願いします」

見れば、その羊皮紙には既にシャルロットの言った条件が記されていた。

しかし、「この女が普通の事をさせる筈がない」と考えたラズマは

「……これ、普通のもんじゃないやねえだろ？」
「あら、気付かれましたか？」

シャルロットは意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「その羊皮紙は『絶対の誓い』という契約書でしてね。それにサインし、書かれた内容に離反すると……」

「……どうなんだよ」
「自分が裏切った人物の、文字通り……操り人形……となります」
「……つまり、裏切れないようにする為の契約書、そういう事か」
「そういう事です。ちなみに、今回は二対二のタッグマッチらしい
ですからね。バディの決定は慎重に」

ラズマはしばらく俯くが、やがて意を決したように顔を上げると、
その羊皮紙にサインする。

それを確認したシャルロットは、自分の名前を羊皮紙に記すと、完
成した『絶対の誓い』を、ガーティンに渡した。

「……これで用は終わりだ、が……」

「マリイさんに会いたい、ですか？」

「……」

「いいですよ。まあ、そんな長い時間は了承しかねますが」

そう言うと、ソロンが「こっちだ」とラズマを案内する。

マリイのいる部屋は、ブロンドウェイ邸の一番奥にある部屋で、厳
重な鍵が施行されていた。

ソロンがその鍵を一つ一つ開けていき、やがて最後の鍵がカチャリ
と開けられる。

部屋の中心には、ポーッと佇むマリイの姿があった。

たった一日見ていないだけなのに、マリイの体は痩せ細って見えた。
やがて、マリイは開かれた扉の方を見やり、そして目を見開く。

「……ラズ、マ？」
「マリイ！」

ラズマはマリイに駆け寄ると、その華奢な体を抱きしめる。

「ごめん……本当にごめん……！」
「……痛いよ、ラズマ」

ラズマはハッと気付くと、顔を赤らめながら抱きしめる腕を解いた。

「わ、悪い」
「……別に、抱きしめるのをやめるとは言っていないんだけど」
「え？何だ？」
「何でもないよ馬鹿ラズマ……私なら、大丈夫だから、ね」
「……ごめんな。あと一週間だけ、待っててくれ」
「分かった。どうせ、ラズマはまた無茶するんでしょう、あの時みたい」
「あー……多分」

マリイはわざとらしく溜め息を吐く。

「まあ、一週間程度なら頑張れるから、ラズマは頑張って」
「任せ、ろ……」

その時、ラズマの思考は停止した。

彼の頬に、マリイの唇が押し付けられていたからだ。

マリイは唇を離すと、顔を赤らめる。

「これはお呪い。ほら、女の子に、恥じかかせないで」

そう言つと、ラズマを部屋から追い出す。

その光景を見ていたソロンは

「……青春、というやつか？私にはよく分かんが……」

数分後、ラズマはブロンドウェイ邸を後にする。

その姿を見届けたシャルロットは、僅かに微笑みながら、心中を吐

露する。

「さて。これでこの件については手が打てましたね。あとは、……
奴……がどう動くかです」

「……ですが、本当によかったのですか？タナトスは顔が割れている
ますし、もし……もしもあの男が優勝するような事があつたら……」

「いえ、問題はないでしょう」

「？」

「現在、ガーティンさんに……私が刺客を『隔月闘技大会』に出場
させる……という情報を流してもらっています」

「なっ！それは事実では……！」

「ええ。確かに、私も何人か出場させる予定ですよ。でも、ラズマ・
エイジスの実力が未知数な以上、用心に越した事はありません。私
が関わるとすれば、数日前からこそ嗅ぎ回っている、ミーシエ・
マテリアも出場する可能性が出てきます」

「……まさか」

「ええ。今回の目的は優勝ではありませんからね。ミーシエ・マテ
リアをラズマ・エイジスにぶつける事で、この問題は解決、晴れて
『魔』は私のもの、マリイ・レウズも、彼の言う事ならば聞くでし
ょう」

「……………」

その時、ソロンの背筋をゾクツとする何かが通り抜けた。

自分の仕える主人が、改めて恐ろしい女だと悟った瞬間だった。

ブロンドウェイ邸を後にしたラズマは、バラドーとトリシアのいる病院へと戻っていた。

『隔月闘技大会』、当然ながら、出場する選手達も猛者だらけだろう。

そんな猛者達がひしめく大会を、ラズマが勝ち抜ける筈もない。

一つだけ幸があったとすれば、それはタッグマッチだという事だ。

しかし、バラドーが入院している為、戦ってくれるようなパートナーは他にいない。

ラズマが心重く俯いていると

「どうしたんだい、少年？そんな人生に絶望したみたいな顔しちゃって」

と、後ろから女の声が聞こえてきた。

振り返ると、鼻につく煙草の匂いが漂う。

「……………誰だ？」

ラズマの問いに女は「ニヒヒ」と笑うと

「通りすがりの天才だよ、ラズマ・エイジス君」

第22話 十人議員シャルロットの提案（後書き）

ということ、いよいよ見えてきた2章の山場となるであろう『隔月魔法大会』。

そろそろ2章も佳境、ここからが本番（予定）です。

そして、今回のラストに登場したケイト……謎の天才。

果たして、ケイト……彼女の正体とはw

今回は久々の番外編にしようと思います。

最近全然出番がなく、主人公（笑）となってしまったハルト君の修行時代ですw

果たして、彼に拳法と教えてくれた人物とは？

そして、ハルトの過去とは？

次回、番外編『少年ハルトの修行時代』
頑張ります。

評価・感想・指摘等頂ければ幸いです。

質問も、頂ければお答えします。

番外編 5 少年ハルトの修行時代（前編）（前書き）

投稿までに時間がかかってしまいました。

番外編5 少年ハルトの修行時代（前編）

今から十年前、約半年に渡る『人魔戦争』にも終わりが近づいてきたある日、ジグライオスの東端に位置する村、カーロスでは、早朝にも関わらず、王都へと旅立つ二人の人影があった。

「……さて、この村も見納めになっちまうかもしれないだ。よく拜んどけよ、ジョニー」

「縁起でもねえ事言うんじゃねえよフォルス。俺はまだ死なねえぞ。息子に教える事が山ほど残ってたんだ」

「……そついう話する奴は真つ先に死ぬぞ、定石的に」

二人は大体、五十前後の年齢で、肩には大荷物を抱えている。すると、二人を遠巻きに見る、小さな少年の姿があった。やがて、少年はとてとてと二人の元へと駆け寄る。

「……ハルト。起こしちゃったか」

「……おじいちゃん、行っちゃうの？」

「そんな情けない顔すんじゃないよ。一ヶ月もすれば帰ってこれんだ」

「ほ、ほんと!?!」

「おう!じいちゃんが嘘ついた事あつか?」

「ない!」

「だろっ?だから、お前は安心してナッツと留守番してる。ああ、あと、母ちゃん達が戻ってきたら文句の一つは言っちゃれよ?はは」

そんな話をしていると、町の入り口から一人の男がこちらに歩いてきた。

「おっと。迎えが来たみてえだ。じゃあな、ハルト」
「フランクをよろしくな」

二人はそう言うと、男の元へと歩いていく。
ハルトはその男をよく知っていた。
よくカーロスに訪れては、ハルトと一緒に遊んでくれる男だ。
男はハルトに気が付くと、ニコツと笑いかける。

「おいおい、俺の孫に気色悪く愛想振りまいてんじゃねえぞ」
「気色悪い！？普通に笑っただけなんだけど！？」
「かーっ、これだから色男は。顔がいい男のやる事は大体気色悪いんだよ」
「それ、どう考えてもフォルスの癖みだよね！？」
「……ったく。二人とも馬鹿やってねえでそろそろ行くぞ」

ジョニーの言葉に、渋々と言った様子で従う二人。
すると、男はハルトに向き直る。

「大丈夫だよ、フォルスは絶対に死なせないからさ。ね、ハルト」
「……うん」
「いい子だ。じゃあね」

男は向き直ると、フォルス達を追う。

「いつてらっしゃい！おじいちゃん！ジョニーおじさん！」

ハルトは最後に、あの男の名を大声で叫ぶ。

「――！」

男はそれに振り返らず、代わりに右腕を高く突き上げるのだった。

あれから二ヶ月が経った。

『人魔戦争』は人間側の勝利で終結し、人々の生活に安寧と平穏が戻り始めていた。

だが、ヘイジ家は違った。

一ヶ月前、満身創痍ながらも、ジョニーはカーロスに帰還した。しかし、一緒に行った筈のフォルスの姿はなかった。

ハルトは何度もジョニーを問い詰めたが、その度にジョニーは「すまない」と言い続け、詳細を語るうとはしなかった。

だが彼の様子からして、フォルスがもう帰っては来ない事は、若いハルトでも理解出来た。

が、それを知った上で、ハルトはフォルスの帰りを待ち続けた。雨の日も、風の日も、彼は待ち続けたのだ。

最初は、それを黙って見守っていたハルトの叔父、ナッツだったが、ある日、雨でびしょ濡れになりながらも家に戻らないハルトを見て、ついに我慢出来なくなつた。

「……ハルト、家に戻ろう。風を引いてしまう」

「……………」

「……ハルトの気持ちも分かる。でも、父さんは……お祖父ちゃん
は、多分……もう帰ってこないんだ」

「……………！な、何でそんな事！」

怒りをぶつける為、ナッツを振り返るハルト。

だが、ナッツの表情を見たハルトは、たちまち言葉を失ってしまう。

ナッツの瞳から、涙が溢れていたからだ。

ナッツは温厚ながらも強い芯を持つ人物で、ハルトは祖父のフォルスと同様、彼を尊敬していた。

そんな彼が涙を流す理由、幼いハルトには、まだそれが理解出来なかった。

「……僕だつて、父さんとこんな別れはしたくなかつた！もつと教
わりたい事もたくさんあつた！それなのに……。あの時、僕が代わ
りに行っていれば……！」

「そ、そんな、ナッツおじさんのせいじゃないよ！おじさんは、村
を襲つてきた魔物もやつつけてくれた！おじいちゃんの言う通り、
僕を守ってくれてるもん！」

「ハルト……」

雨に打たれながら、ナッツはハルトの体を抱き締めた。
やがて、その腕を解くと

「……今日はもう戻ろう。お腹も空いただろう？」

「……うん」

「いい子だ」

ナッツは優しくハルトの頭を撫でると

「じゃあ戻ろう……。大事な話もあるからね」

食事を終えた後、ハルトはナッツの淹れたコーヒーを啜っていた。温かいコーヒーが、ハルトの体を、心を溶かしてくれるのを感じた。

「……おじさん、大事な話って？」

「……ハルト、知っているかもしれないが、ヘイジ家は代々……と言っても、僕のお祖父ちゃん、つまり君の曾お祖父ちゃんの代からだけど、格闘家の家系なんだ」

「う、うん。おじいちゃんから聞いたよ」

「それで……父さんが言ってたんだ。ハルトに拳法を教えるかどうかは、ハルトに決めさせろ、ってね」

「え？」

「実は、僕も昔選らばさられたんだよ。普通に生きるか、格闘家として生きるか選べってさ」

「ははは」と苦笑してみせるナッツ。

「……おじさんは、格闘家を選んだの？」

「……うん。父さんに憧れてね」

ナッツは恥ずかしそうに鼻を掻く。

「一度、盗賊に襲われた事があってね。でも、父さんは拳一つでその盗賊達を叩きのめしたんだ……それを見たのが直接のきっかけかな」

「……やる」

「え？」

「僕も格闘家……やる」

「……いいんだね？僕や父さんがやったからって、君がその運命を背負う必要はないんだよ？」

「……」

「……いい目だね、覚悟が宿ってる。本当の男って奴は、口にしないで心も心が伝わるもんだ……って、父さんの受け売りだけだね」

ナッツは立ち上がると、窓を開け放つ。

いつの間にか雨は止み、空には虹が浮かんでいた。

「まるで、君の決意を祝福してるみたいだね。って、ちょっとクサかったかな」

「……」

ハルトは無言のまま立ち上がると、ナッツに向かい、深々と頭を下げた。

「よ、よろしくお願い、します！」

その態度に、最初は目を白黒させたナッツだったが、やがてにこりと微笑むと

「ああ。こちらこそよろしく頼むよ」

翌日から、ハルトの修行は始まった。

それは一日分のメニューですら、大人の男が音を上げてしまうほどハードなものだったが、ハルトは弱音一つ吐かずに、それをこなしてみせた。

それどころか、ナッツの組んだメニューが終わった後に、自分で考えた鍛錬を毎晩欠かさずやり続けたのだ。

そして、八年の歳月が流れた。

長い時間を経て、ジグライオスは大国として進化を遂げた。

しかし、そんな中でも、全くと言っていいほど変化のなかったカーロス。

だが、そんなカーロスに、今、暗い影が歩み寄り始めていた。

夏のある昼時の事。

ヨウコ・カンバヤシとフランク・ベイルズは、丘の上に建つ友人の家に向かっていた。

「それにしても、アンナ姐が修行で遠征ねえ……マジで出るつもりなのかね、『大闘技祭』」

「みたいだよ。気まぐれらしいけど」

「気まぐれで出られちゃあ、他の参加者が可哀相だろ。アンナ姐に当たった奴は特に」

「確かにね」

「……まあ、それでもちゃんと修行とかする辺り、一応気合は入ってるみたいだけどな」

「……でも、残念だったね。折角の誕生日パーティなのに」

「ああ。ナッツさんももう四十か……おっさんって呼んでやろうか

な

「くくく」とフランクは笑う。

「もう、茶化さないの」

「悪い悪い。そういや、ハルトの奴、ちゃんとナッツさん連れ出せてっかな？」

ハルトがナッツを外に連れ出し、その間にフランクとヨウコがハイジ宅でパーティの準備を済ませる。

それが、フランク達が考えた作戦だった。

「大丈夫だよ、多分。ハルトも楽しみにしてたし」

「だな。ハルトも馬鹿じゃない……し……し……」

ふとヨウコを見たフランクは、思わず言葉を止めてしまった。

風でなびく髪に手を当てるヨウコが、堪らなく可愛らしかったからだ。

その光景に、フランクは思わずドキッとしてしまう。

「?どうかした？」

「い、いや、何でもない。そ、それより、早く行くつぜ。帰ってきてしまったら元も子もないしな」

「そうだね。早く終わらせちゃおうか」

赤くなった顔を見られなくなかったフランクは、足早にハイジ宅に駆け寄る。

いつまでも、この変わらない日常が続けばいい。

フランクはそう思った。

もちろん、それが叶わない事は分かっている。

それでも、出来るだけ長く、少しでも長く、この生活が続けば……
そう思っていた。

しかし、フランクの願いは、この後音を立てて崩れ去る事になる。

フランクは、事前にハルトから合鍵を受け取っていたのだが、玄関を見て、ある異変に気付いた。

「……あれ？」

「どうしたの？」

「いや……玄関が開いてんだ。変だな。あいつが鍵かけ忘れるなんて」

何となく不審に思いながらも、フランクは扉を開ける。

その瞬間、フランクは横から強い衝撃を頭に受けた。

意識を失い、よろめくフランクを、ヨウコが受け止める。

「フランク君！」

「……ちっ、面倒だ。その女も中に入れる」

家の中から声が聞こえると、ヨウコは玄関から伸びる手に引きずり込まれた。

十分後、フランクは激痛に目を覚ます。

体は縄で拘束されており、右にいるヨウコもまた同様だった。フランクは家の中を見渡す。

見れば、三人の男達がヘイジ宅の中を物色していた。

その内の一人がフランクに気付くと

「大きな声を出すなよ。少しでも長生きしたかったらな」

「……お前らは誰だ？」

「……どうやら自分の置かれている立場が理解出来ていないようだ
な」

そう言うと、男はフランクの腹を蹴り飛ばした。

「フランク君！」

「カツ……ゲホツゲホツ！」

「質問を許した覚えはない」

そう言うと、男は部屋の物色を再開する。

ヨウコの体は震えていた。

恐怖で目には涙さえ浮かべている。

「た……て」

震えるような声で彼女は呟く。

「た……けて……助けて、ハルト君……！」

「呼んだ？」

どこからともなく聞こえたその声と共に、ドオン！という轟音が響き渡った。

男達は音源である玄関に目を向ける。

そこには、二人の人影があった

「……人の家で何やってるの？」
「……事と次第によっては、許せる事じゃないよ、これは」

二人の人影、ハルトとナッツは、静かに、だが隠し切れない怒りを放ちながら、三人の男達を睨みつける。

「……おい、見付かっちゃったぞ、どうする？」
「どうするも何も……殺るしかないだろ」

そう言うと、男達のリーダー格である大男がナイフを構え、残りの二人も後に続く。

「……反省の色はなし、か。仕方が無い。ハルト、お願い出来るかな？」
「むしろ僕に任せてもらえなかったら、叔父さんを殴り飛ばす所だったよ」

ハルトは男の一人との距離を詰めると、その顔面に右手で強烈な一発をお見舞いした。
ぐらつく男に、ハルトはトドメと言わんばかりに、左手の裏拳を相手の顔面にめり込ませる。
男は堪らず、白目を剥いて倒れた。

「ば、馬鹿な……!」
「言い忘れていたけど、彼をただの少年だと思ってる痛い目を見るよ?」

ナッツの警告も既に遅く、ハルトはもう一人の男を沈めていた。残りには、二人を仕切っていた大男のみ。

男は怯みながらも、ナイフでハルトを突き狙う。

ハルトはそれを避けようとせず、代わりに右手の裏拳を横に振った。

すると、男のナイフの刀身は綺麗にポツキリと折れていた。

「なっ!」

「歯、食い縛った方がいいよ?」

次の瞬間、ハルトの容赦ない拳が、男の顔面に突き刺さった。

「ヨウコ、大丈夫?」

「う、うん、平気。私よりもフランク君が……」
「……大丈夫。大した怪我じゃないみたいだ」
「……ふう、大事にならなくてよかったよ」

ハルトは安堵し、縄で縛った男の一人の頬を叩き、意識を戻す。

「……ん、んん……こ、ここは……」
「君達が空き巣に入った部屋だよ」
「ひっ！」

自分をボコボコにした少年の顔を見て、男は恐怖する。

「……そんなに怯えなくても」
「いや、あそこまでされたらしょうがないと思うよ？」
「……まあいいよ。で、君達は何で僕達の家で何探してたの？」
「……」
「よし、歯を食い縛って」
「わ、分かった！言う！言うから！」

そう言うと、男は自分達の目的をハルト達に告白した。
何でも、彼らはある組織に属していて、ここに来たのもその組織からの命令らしいのだ。

「ふうん……で、何持って来いって言われたの？」

「こ、籠手だ。何でも特別な力を持つてるとか言っ……」

ハルトとナッツは、その一言でその籠手が『不障の籠手』であると察した。

「……籠手、ね。じゃあ、最後に一つだけ聞くとよ」
「な、何だ？」

「その組織っていうやつ……名前、何て言っの？」

「……いい、言えねえ。それだけは……俺があいつらに殺されちまう」
「……約束する。絶対に口外しない。それに、ここで君が喋らなかつたら……どうなるか分かるよね？」

「うっ……ぜ、絶対に誰にも言わない、んだな？」
「うん、神に誓って。誓う神なんていないけど」

「……そ、その組織の名前は……『紅の牙』……ギルドだ、裏のな」
「……裏ギルドか。何でまたそんな」

ナッツが溜め息を吐く。

裏ギルドとは、正規のギルドのような民間の依頼を受けず、貴族から受ける高給な犯罪紛いの依頼ばかり受ける、黒い噂の絶えないギルドだ。

そして『赤い牙』。

この存在が、後にハルト達の運命を大きく変える事となる。

番外編5 少年ハルトの修行時代（前編）（後書き）

ということで、ハルトが格闘家を目指す事になったきっかけと、彼の叔父にして師匠、ナッツについての話です。

あと、番外編なのに、伏線がもりだくさんw

まあ、番外編は見なくても大丈夫なように書くので、そんなに支障はありません。

そして、謝罪が一つ。

タイトルでお気付きになったかもしれませんが、今回は前後編に別れます。

いや、すいません……たださえ、投稿するのに、こんなに時間がかかったのに前後編って……orz

23話は出来るだけ早く投稿するので、了承して頂けたら幸いです。

次回予告

裏ギルド『赤の牙』。

果たして、彼らの目的とは？

そして、ハルトの過去とは？

次回、番外編5『少年ハルトの修行時代（後編）』
頑張ります。

評価・感想・指摘等頂けたら幸いです。

質問も、頂けたらお答えします。

第23話 十人議員サーティスの真実（前書き）

大分久しぶりなので、前回までのあらすじ。

マリイをタナトスに奪われ、消沈するラズマだったが、トリシアから受けた情報を武器に、シャルロットに交渉を持ちかける。

それは、一週間後に行われる『隔月闘技大会』で、ラズマが優勝すればマリイを開放し、敗退すればシャルロットの部下にならなければならぬという、どう考えても不利なものだった。

が、それでもそれを呑むしかないラズマは、途方にくれる。そんな彼に近づく、ある一人の人影があった。

第23話 十人議員サーティスの真実

ラズマとシャルロットの、交渉、が行われてから二日が経った。当然ながら、そんな事を知る筈も無いミーシェ達は、この二日間、ある人物について調べていた。

そして、今日。

ミーシェの『守六光』という立場を利用して、その人物と会う約束を取り付けた二人は、王都の中央区に佇む、一軒の家の前にいた。その家は、どこにでもあるような普通の民家に見える。

が、これを見た二人は、驚愕せざるを得なかった。驚きのあまり、ティナはミーシェへと確認を取る。

「…………お姉ちゃん。本当にここなの？」

「…………ええ。渡された封書に載っていた住所は、確かにここよ」

尚も疑いながら、ティナは恐る恐る家の扉を叩く。すると、数秒としない内に扉が開かれ、黒い燕尾服を着た老人が立っていた。

「ミーシェ・マテリア様と、ご友人の方ですね？」

「は、はい」

「お待ちしておりました。こちらへ」

老紳士の案内で、家の中へと招かれる二人。家の中も、外見に変わらず極普通に見えた。

奥に進むと、突き当たりの部屋の前で老人は立ち止まる。

「ここが旦那様の書斎になります」

「……あ、ありがとうございます」

老人は頭を下げると、元来た方向に戻っていく。

ミーシエは一度深呼吸すると、覚悟を決めたように、扉をノックする。

すると中から「どうぞ」という声が聞こえ、二人は恐る恐る扉を開け、中に入る。

書斎と呼ばれた部屋の中は、机と椅子、やたらと存在感のある観葉植物以外何も置かれていなかった。

そして、その椅子に座る一人の男が居た。

この男こそが、二人が会う約束を取り付けた男だった。

「わざわざそちらから出向いてもらってすまない」

「い、いえ！ 会って頂けただけで十分です……エッジボルグ卿」

「卿だなんて恥ずかしいな。我が国の守護を司る『守六光』の話だと言っのなら、聞かない訳にはいくまい」

男……『十人議員』の一人、サーティス・エッジボルグは微笑んだ。

「それで？ 私に話とは？」

「……失礼ですが、カーロスという村をご存知ですか？」

「……この国の東端にある村だな。それが？」

「先日まで、私は『貴族院』からカーロスのとある少年を王都に連行せよという命を受けていました」

「……………」
「……………結果としてその命を果たす事は出来なかつたのですが、『貴族院』から何の咎めもありませんでした。『貴族院』直々の命にも関わらず、です」

「……………なるほど。ここまで辿り着いた、という訳か」

サーティスは深々と溜め息を吐く。

その反応から、ミーシエは自分の仮説が間違っていないかつた事を確信した。

「……………そうだ。その命を下したのは私だ」

「……………理由を聞いてもよろしいでしょうか？」

「ああ。その前に、何故私だと思ったか、聞いてもいいかな？」

「……………これです」

ミーシエは懐から、書類の束を取り出す。

それは、王都の書庫から見つけた、『人魔戦争』の記録だった。

「これは……………なるほど、フォルスさんの名前に気付いたという訳か
「はい。それで、『二十人部隊』の中から『貴族院』に入った貴方が、ブロンドウェイ卿に絞る事が出来ました」
「……………それで私の所へ来たという事は、ブロンドウェイの事は調べたのか？」

「はい……………『勇者の遺産』とやらを探しているとしたか知りませんが」

「……驚いたな。そいつの名前まで知っていたとは……いや、かえって話が早いか」

そう言うと、サーティスは立ち上がる。
すると、不可解な出来事が起きた。

サーティスが、その手に一本の槍を持っていたのだ。

当然、どこからか取り出した素振りも無く、まるで、元々……そこにあっただけ……かのようだった。
すると、今まで一言も喋らなかったティナが、突然ミーシエの後ろへとすりより、服を掴んだ。

「どうしたの、ティナ？」

「あ、あれ……何て言うか……凄く怖い……」

「……なるほど。これを感じるといふ事は、その子は『魔人』か。道理で人間の気配とは違う筈だ」

「……それは？」

ミーシエが尋ねると、サーティスはどこか寂しそうな、悲しそうな顔をし、その問いに答える。

「これが『勇者の遺産』だ。いや、正確に言えば『勇者の遺産』の一つだ」

「なっ!？」

サーティスの放った一言に、二人は言葉を失うほど驚愕する。

「ど、どういう事、ですか？」

「……これは、『人魔戦争』によって、魔王との戦いによって生まれた、遺物……だよ」

サーティスはそう言うと、二人に歩み寄る。

「話をしよう。少し長い話になるかもしれないが、構わないかい？」

「は、はい」

「……『バルゲイズ会戦』。これについてどれくらい知っている？」「えっと、魔物達の総本山、バルゲイズで行われた、『二十人部隊』と魔王との決戦、ですよ。それで勇者ノヴァが魔王を討ち取ったとか」

「ああ。表向きはそれで間違い無い……だが、その話には続きがあるんだ」

「え？」

「ノヴァが魔王に止めを刺した直後の事だった……突然、魔王の体が七つに飛び散ったんだ。そして、それは呪いとなり……生き残った『二十人部隊』の七人に、とりついた。こういう風に」

そう言うと、サーティスは上着をまくり、背中を見せる。

二人は息を呑んだ。

サーティスの背中に、蛇のような青黒い痣が浮かんでいたのだ。

「だが、魔王の呪いは、同時に私達に力を与えた……それがこれだ」

サーティスは手に持っていた槍を突き出す。

「見た目は普通だが……これには、信じられないほどの力が込められている……おそろく」

サーティスは一度言葉を切ると、ミーシェの目を見て、事実を告げる。

「これ一つで、王都を陥落させる事も可能だろう」

「ば、馬鹿な！ 失礼を承知で言わせて頂きますが、そんな事……！」

「残念ながら、あり得るんだよ。そして、これと同じようなものが、あと六つ存在するんだ……そして、ブロンドウェイもその一つを所持している」

「え！」

「彼女は昔、バージイ・トレイトという名を使っていたんだ。『二十人部隊』にも所属していた」

そういえば、バージイ・トレイトだけは、どれだけ調べても詳細が分からなかったと、ミーシエは思い出す。

「そして、奴の目的はおそらく、全ての『勇者の遺産』を集める事。私は、どうしてもそれを阻止しなければならない。だからこそ、彼を……ハルト・ヘイジを王都に來させようとした」

「……？ 先ほどの話が、彼とどう関係が……？」

「君も見た筈だ。彼の持つ奇妙な籠手を」

「まさか……」

「そう。『不障ふわらひの籠手』は、フォルスさんが遺した『勇者の遺産』だ」

「で、でも、あれは『無干渉』じゃ……」

「確かに、普通に使えば、あれは『無干渉』の効果しか発動はしない。そういう意味で言えば、最も安全な『勇者の遺産』かもしれないがね」

「そ、その事をブロンドウェイ卿は……？」

「知っているだろう。が、彼女の中ではあの籠手は既に無いものとなっている筈だ。気付かれてはいないだろう……聞きたい事はこれで全部かい？」

「……最後に一つ、お頼みしたい事があります」

「ん？」

「彼を……ハルト・ヘイジとディライズ・ゼグラードの本格的な捜索をお願いしたいんです」

「……そんな事をすれば、ブロンドウェイに籠手の事がバレてしまっただろう」

「ですがっ！ 彼には何の罪もありません！ それなのに……！」
「……ああ。悪いと思ってる。彼に会ったら、謝ろうと思ってるよ」
「……え？」

ミーシェは、サーティスの言葉に一つの違和感を感じた。
今彼は、まるで、ハルト達が生きていと知っている……かの
ように言ったのだ。

「……そう期待を込めた顔をしないでくれ。私は彼の安否は知らないよ」

サーティスの言葉に、再び落胆するサーティス。
すると

「だが、彼が生きているという事には、少なくとも確信が持てる。
フォルスさんの……彼の孫が、川に落ちたくらいで死ぬ筈が無いからね……だが、君の気持ちも当然分かる。そこで、だ」
「え？」

「……実は、ブロンドウェイの駒が、今度の『隔月闘技大会』に出るといふ情報を掴んだ。信頼出来る筋からの情報だ。間違い無い。
……だが、奴にしては簡単に情報を漏らし過ぎだ」

「……私達にそれを調べると？」
「そういう事だ。奴等の目的を調べ、出来ればその駒を倒してくれると助かる。戦力が減れば、奴も動きを制限せざるを得ないからな」
「……それを果たせば、彼等の捜索をしてくれるんですね？」

「ああ……と言っても、もう三週間は経つ。おそらく、時間がかか

るだろう。それでもいいかい？」

「はい」

「交渉成立だな。……すまないな、本当は、今すぐにも動くのが当然なんだが……」

その後、任務の詳細を話した後、ミーシエ達はエツジボルグ家を後にした。

しばらく歩いた後、ティナが重い口を開く。

「……ねえ。もし、アタシ達が勝ったとしても、もう手遅れだったら……」

「あり得ないわ」

ミーシエは即断した。

「……そう、信じるしかないでしょう」

そう言いつと、ミーシエは暗くなってきた夏の空を見上げた。

同時刻。

ここは王都の北東部のとある町。

その「エイジス」と書かれた札が立てかけてある民家に、ケイト・ウエイルスは煙草をふかしていた。

二日前、ラズマと出会った彼女は、全てを知った上で、彼に「地獄の特訓めにゆー」なるものを与えた。

それを一週間こなせば、少なくとも、多少は戦える体になっている筈だ。

ちなみに、当のラズマはと言うと、外へのランニングへと出かけている。

一本目の煙草を吸った後、二本目を取り出し、そのままふかす。すると、家の玄関が「こんこん」と叩かれた。

面倒そうに扉を開けると、彼女のよく知る女性が立っていた。

「やあ、トリシアちゃん。どしたの、突然」

「……その、ちょっと、お話が……」

「そう。まあ、入りなよ」

トリシアを招き入れ、居間の椅子へと座らせる。

「それで、話って？」

「あ、あの……バラーさんが回復したので、私もバラーさんとコンビを組んで『隔月闘技大会』に出ようかと」

「あ、そうなんだ。い〜んじゃにゃい？ 少しでも勝率を上げるのは大事だからね！。それで？」

「えっ」

「それだけじゃないでしょ？ 多分」

「……鋭いん、ですね」

「おろ？ 私の勘もまだまだ捨てたもんじゃにゃいね」

そう嘯くと、笑いながらトリシアを見る。

「……ケイトさん。貴女は長い間行方不明だったと聞きました」

「……」

「なのに、何故、仲間のティナさん達に安否を伝えず、こんな所で油を売ってるんですか？」

「……油を売ってるとは言ってくれるねえ。ちょっと色々あってね。まだ会いにはいけないんだよ」

「色々って……」

すると、扉がギィという音を立てて開いた。

そこには、滝のような汗が流れているラズマが立っていた。

「……50km……走って、来たぞ……次は、何すれば、いい？」

「んー。じゃあ、とりあえず五分休憩ねん。その後に筋トレかな」
「分かった」

そう言うと、ラズマは外へと出て行く。

それを見たトリシアは、何も言わずに裏口から出て行くこととする。

「……全て終わったら、話してくださいね」

「……うん、約束するよ。最も、終わる頃には全部明らかになるかもだけどねん」

こうして、夜は更けていった。

そして、一週間が過ぎた。

『隔月闘技大会』の開催日。

会場となる王立闘技場は、既に祭りかのように人々で賑わっていた。ついに、様々な意図と思惑が絡んだ戦いが、始まるうとしていた。

が、それも簡単に始まりはしない。

闘技場から少し南西に行った場所に存在するスラム街。

ここには、行き場を失い、下町にすら住めなくなった者達が多く存

在する。

そんなスラム街に、どう考えても不釣り合いな人影が二つ。

「……………迷ったね、うん」

「……………」

人影の内の一人は、見た目四十過ぎほどで、Ｔシャツに腹巻、頭は禿げで、右手には酒瓶を持っており、絵に描いたような「酔いどれのおっさん」だった。

もう一人は、どう考えても飲んだくれとは不釣り合いの美少女で、黒いロングコートを着ていた。

すると、酔いどれがわざとらしく大げさに溜め息を吐く。

「まったく……………君が王都に来た事あるっていうから任せてみればこのザマだよ」

「……………ふん。来たのは大分昔の事だ。覚えてないのも無理はあるまい」

「自分で言うかね、それ」

酔いどれは辺りを見回し

「とりあえず、この辺の人に場所を聞いてみようよ」

「……………正気か？ ここはスラムだぞ？」

「こつなつたのは誰のせいかな？」

「……………チツ、嫌味な奴め」

「んじゃ、あの人に聞いてみようか、ルヒジダちゃん」
「ちゃん付けはやめろ……フータロー。胸糞悪い」

ルヒジダと呼ばれた美女と、フータローと呼ばれた酔いどれは、スラムを歩いてきた男に歩み寄る。

「すみません。王立闘技場に行きたいんですが、どっち行けばいいんですかね？」

「……………」

「？ あの一」

フータローがいくら呼びかけても、男は言葉を返そうとせず、ただこちらを見つめるだけだ。
すると、二人はある異変に気付く。

「……………フータロー」

「……………囲まれてるね」

見れば、ナイフを持った者や、気を失った瞳の者等が、フータロー達の周りにひしめいていた。

「……………はあ。面倒事は御免なのになあ」

「だからやめとけと言ったんだ」

「……………まあ、でも」

「ん、そうだな」

『なっちまったものはしょうがない』

二人は身構えると、スラムの住民達へと襲い掛かった。

数分後。

辺りには、少なく見積もっても三十もの人間が地面に倒れていた。そんな中、悠々と立っている二人がいた。言うまでもなく、フータローとルジヒダである。

フータローはスラムの男の襟を掴み、王立闘技場の場所を聞き出していた。

「……うん、なるほど。ありがとうね」

フータローが襟を放すと、力が抜けたように男は気を失う。

「あつちだつてさ。全然方向違うじゃん、まったく。ルヒジダちゃんったらおつちよこちよーい」

「もの凄く殴り飛ばしたいんだが、構わないか？」

そんなやり取りを交わしながら、二人は王立闘技場へと向かった。

そして、それぞれを思惑を胸に、遂に、『隔月闘技大会』が幕を開

ける。

第23話 十人議員サーティスの真実（後書き）

という事で、サーティスとミーシェ達の話、ケイトの抱える秘密、新キャラ、フータローとルヒジダの登場回でした。今回、遂に明らかとなった『勇者の遺産』の正体。これは、今後ともストーリーに関わっていく予定です。

あと、番外編の続きの方は、もうしばらく待って頂けると幸いです
o r z

そんなこんなで次回予告。

遂に始まった『隔月闘技大会』。
熾烈な予選を勝ち抜き、本選に出場するのは果たして……。
次回、「おっさんフータローの拳」。
頑張ります。

評価、感想、指摘等頂けると嬉しいです。
質問も頂けたらお答えします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1290w/>

拳と魔法と勇者と世界

2011年12月16日00時46分発行